若菜籠

乙湖生著

若菖蒲

ISSEIDO
東京 誠言 神田

若菜

ISSEIDO

寄二乙羽子一

覓レ句閉レ門時復吟
忝二來御覽一再三献
大岳昇暾名士興
者番題目宜二悲壯一

謫天

風光概托二寫眞一尋
受二得天恩一倍深
東洋累卵少年心
不レ免同人口半痞

むかし芝居氣ある男の、京菜を市に賣らんとて、大内鑑〳〵と聲高らかに觸れ行くを、人みなあやしみて、呼び糺せば、安倍の安菜なりと答ふ。さあらば買はんとて、籠より好きをのみ擇りぬけば、男揉手して、あとはくづの葉になりますると言ひしとぞ。言葉に花をもたせて、客の氣を外らさぬ、それには似るべくもあらねど、種は同じき八

百よろづのかみさん好み、さらりと盛り上げたる姿は、好けれど、烏婆にほじくられなば、屑の葉も多かるべし。さるほどに何も彼も明けまして は、若がへりたるわか菜籠、底も蓋も御存じの御客様方、七草のストトンとお囃子を、まんべんなく御頼み申上候、可祝。

亥の初春

作者

玄の初春

作者

もくろく

春の夜（小説）……一
世話女房（小説）……一〇
鎗持勘助（小説）……四七
犬さくら（小説）……五六
子煩悩（小説）……一一〇
不老泉（雑筆）……一六五
淡粧濃抹（雑筆）……一七五
田家風月（雑筆）……一八八
小照録（雑筆）……一九八
點景山水（雑筆）……二〇六

望郷臺（雜筆）……二一四
かこひの梅（新躰詩）……二二一
柳がもと（新躰詩）……二二五
浮世の影（新躰詩）……二四七
富士登山（紀行）……二五三
木曾路の春（紀行）……二六四
鹽原の夏（紀行）……二七六
江楓漁火（紀行）……二九二
雪のふる郷（紀行）……二九七
ながれの末（俳諧）……三一二

以上

若菜集

乙羽生著

春の夜

春の夜はおぼろ隱しの絹羽織を、態とらしく引ッ張りたる高帽の新學士が、買ひ立ての木履を、突ッかけ穿きのセヽコマしく、講武所から出て來てより、四谷組合の提灯下げし老爺の、相乘一臺、君が世の萬代橋を渡つて後は、按摩の笛だに聞こえねば、夜は更けて十二時に近かるべし、迷子石の根の糸柳、枝は黑髪のフウワリと地に影を映して、月に遠慮勝の瓦斯燈

の、闇夜には幅を利かしたるが、今宵は鵜の目鷹の目とも見えぬまでの、ぼんやりと投首の躰なるは、やゝ深夜の態ならずや。

月は今、つき出しの藝者の、曠衣の紋よりも美くしく澄み亘りて、裾模様の下界には、おでん屋、鍋焼温飩の屋臺にも、太平樂の客は無く、況て聖堂前に來ては、コンモリとした森の、煉塀につゝまれて、眠む氣に見ゆるお茶の水の面に、映つる橋のたもとの火影も、淡き川霧に消されて、奥には花もあるべく、斷岸百尺、その高き處に架れる欄干の、夢のやうに迫かに見ゆる抔、諸事沈着いたる夜の景色に、人も畫圖の中なるべし。」

川添ひの土堤際にうち並べたる鐵管は、その太さ四五尺もあるらむか、黄昏までは唐子遊びなどしたりし腕白小僧も、今は母の懐中に熟睡の夢や結ぶらむ、影も形も無きを取柄に、一人の乞丐の、飽くまで月に耽けるを見たりき。

これも世にある時の男山、苞着る身の今は、衣も劍菱のズタ〳〵切れの、襤褸を錦と見る春の月夜を、我物顔の獨占して、小謠を唸りくさるぞ奇怪なれ。

總じて人の門に物を乞ふ程の者の、世をも他をも恨めしくて、月には涙の露を浮べ、花には憂きに胸もつぶるべきに、左はなくて、明日の餌にもありつかぬ今宵の、しかも月に我が憂きを

忘れて、身を電柱に凭せかけつゝ、扇拍子の代りには、鐵管の縁をうち敲きて、朗詠にうつゝ無きは、奇しき白徒かな。

乞丐のいふ。月に聞かする筋ではなけれど、さても浮世の山ある事よ。十五から酒呑み初めて今日が日の、今を昔に比べて見れば、お月さまと鼈の、スポポンがポンと、打つた皷の狸の孝八。自慢の腹を突き出して。ヘッヘッ、私の胸毛を薄に見立て、圓行燈がソーレ月の雛形、八疊敷よりは世の中が諸事四疊半の、茶立虫は秋の景物、薄雲ともいはれ給ふ太夫職が、何んとした事ぞ、初々しいにも人によれ、若旦那も若旦那よ、おゝ自烈躰い、遠慮も人目も入谷田圃の、鐘が鳴つたら歸しやアしませぬ、勤めしなはる花魁でさへも、惚れたホの字は萱野の雨で、濡れて見たさも、勤氣を離れて、もとの娘にかへつて見れば、他人行儀も實の底か、サア此處が千兩、ハッ萬兩のところよ、花魁坐る肚胸も主の傍で、マア御機嫌よろしうと、無理やり捨てゝ行く先は、隔つ屏風の雲千重、誰が書き捨ての川柳、入江に沿へる一ト村の、裾からつゞく床の山、鳥立つ古渡の舟底に、未練を殘す塗枕は。幾夜の影や映すらむ。それからしては病みつきの、夜を晝なる夢心地、家も屋敷も煙となる、末はお舍利も殘らねば、南無三寶、これではならぬと、目を覺した曉は、世は霙降る冬枯の、人の心はさもしいもの、あゝ冷た

いもの、甘きに着いた蟻までが、尾羽打枯らした揚句には、見向いても見ぬがなべての世間、我の情に脆かりし疇昔に比べて、頼まば田町の法院もと、廓で覺えし小唄から心づいて、少との縁者を尋ねて見れば、人非人奴の犬猫あつかひ、斯ふした時に親兄弟がと、窮して懷かしい恩愛も、今となつては後の月が阿母の三年忌、女親に育て上げられた甘ッたれが、其亡き跡の邪魔になつて、一人息子の獨り思案、悍馬の轡を離れては、止め途も無く狂ひに狂つた果が今の身、さてこれからが何うなるものか、長い浮世に短かい命、彼奴の笑窪に打込んだ時に、無いものと思つたのが、今まで生きて居たのも餘德、これから先が

ザッと積つて二十幾年、人生五十の白髮天窓を振り立てゝ、爪の火を積み溜め、家内を電氣や瓦斯燈で光からしても何になる、ヘン馬鹿奴、近い譬へはお向ふの俄長者よ、アノ幾代目かの末の末に、乞丐の出ぬとも限らぬのが、明日知れぬ人の身の上だ、乞丐する程の男に野暮は無く、金は浮世の廻り持で、ツマリ我を立て通して一生を送るに、誰が何んと云ひ人がある、愬じ何の何兵衛で、世を渡ればこそ、貧した時の肩身が狹いが、お莚樣、おうソノお莚樣、人間もこれまで落れば、そろ〳〵運の開け口よ、天下の大道に闊が無ければ、跨ぐにも大股で行け、蒼穹に廂が無いので、天窓を屆める世話も入らぬ。太平の御代の

難有さは、ノダレ死に倒れても、屍を犬の餌食にもなさらぬ哩、近かお貰ひの少ない折は、酒の量の乏しいだけが不足なれど、餘れば溢れる世の中に、乞丐ばかりが滿足に飲むといふ譯にも行くまい、餘る思案は、おう、この膝とも談合して、天地萬物、咸な我といふ尺度で量つて行くから、これがホンの自由自在の極樂世界よ、極樂世界、唐樣で書く賣家札とは旨いことを云つたもの、兎角生學問が鼻につきくさつて、今夜も明月に浮かされて、チョッ眠られぬのが可笑しいッ、アハ、、、、、、あれ向ふをまた藝者奴が通りくさる、あゝ此頃の時候、蝶舞ひ鳥謳ふといふ事は、己等が目から見た世界觀よ、ヘン馬鹿々々しい、

世の中が何んだと云ふんだ、今が春で、花が咲いて、鳥が啼いて、あア面白い、アハ、、、、、と高く笑つて、獨語をやめつ、弗と澄む月に面を背けて、おう好い月、月は昔の儘ではあるが、變る我が身は、「それ春の花の樹頭に榮え、秋の月の水底にしづむも、世のはかなさのありさまを、見てもあはれや重衡の」と、千手の小謠高らかに謳ひつゝ、月に背ける闇に隱れて、姿は其處か、見えずなりけり。

跡には川露の淡く、お茶の水の土堤を單めて、月人に近くなるまゝ、春の夜の朧なるこそ、一入美くしき眺望なれ。（卅一年末新作）

世話女房

（一）

『母ァさん、お錢をお呉れッ、』とさも勇まし氣に家に駈込める六つ七つの男の子、振分髪の優しくて、品のよき面相、見るから愛嬌の溢るゝ具合は、蓮の葉に露置ける如く、眼元は清しく、頬は豐にして、菩薩眉の柔和なるは、誰が眼にも愛らしかるべし、されど其家は貧しきにや、尻切布子に古き胸當をかけたり、時は六月の末つかた、土地は丹後の宮津町に、町とは名のみの濱邊近くに家居して、丹青の業を世計にすれど、繪師と名に呼

ぶ者も無く、岸苔といふ雅號は持てども、奇人、偏人、頑固男と、世の人に嘲けられて、天晴の技倆を、見て呉れ人も無きがありけり。それからは其身も拗ねてか、毫揮らうともせず、身を立てんともなさず、珠玉は空しく塵に埋もれて、光を放たぬ間に、我と一つ鍋の飯食べし朋輩は、瓦も玉と賣つけて、山師の玄關、門柱嚴めしく構へて、先生面の憎らしさよ。さる程に繪師と云ふもの、丹を塗り、粉を施して、それで役目が濟むものならば、土偶師もやるべし、蒟蒻屋も能くすべし、つまり惱天を痛まして粉本を集め、足の頭に草鞋食ひをこしらへて、旅の雨に吹き籠められ、嵐の音に夢を破られて、見ぬ山水を探る

にも及ばず、謂はゞ歌人は居ながら、名所を知る格で、古人の下圖を引ッこ抜き、向ふの瀧を消して、屋下流水に代へ、麓の樹木を、峯に移して、兎も角も一圖を纏めて足るなり、鳥目の包み加減で、筆に疎密の別を置くは、それぞ露店の刷毛畫。そんな事して繪師と誇らんよりは、寧そこれが面白いと、繕はぬ垣根に、南瓜の蔓を這はして、それ花が咲いた、坊や來い〳〵、朝の日陰のある間に、根に水をかけて呉れ、實が生つたらば、坊やと私と二人して煮て喰はうよ、月が昇らばその下で、寢轉んで涼まうよと、世が不平やら、頓着せぬのやら、我儘氣儘に日を送れば、家は次第に貧しうなりて、食ふや食はずの境界と

なりぬ。女房お園はそれを苦にして、いろ〳〵と賺しつ温めつ、繪を書くことを勸むれども、措いて呉れと叱り飛ばされて、復た云ふ程の勇氣も出ず。

夏の日の正午には早く、檐の青桐葉影を錆竹の小椽に映して茲は風さへ日向よりは涼しく、沓脱の切株に、小狗の眠るも長閑さの午前十時頃、お園は坊やの汚れ物を洗ひ濯ぎて、椽側にかけ居る處へ、小太郎駈け來て。『母ァさん、お錢をお呉れッてば、』『だッてお前、唯た今餡餅を食べたばかりぢやないか、』『餡餅いや、私お錢が欲しい。』『そんなにお錢をお遣ひだと、お巡査さんに叱られますよ。』『お巡査さん？　いや〳〵私お錢を

欲しいナア。』『いゝ兒だから、大人しくしてお遊びよ、いゝかえ坊や今に父さんが歸つて來て、お土産を充分下さるから。』

『いやだよう、お土産入らないからお錢をお呉れ、あれ〳〵母アさん御覽よ、松ちやんも、孝ちやんも唐人笛を買ひました、坊やもあれが欲しいナ、あれ買つて頂戴。』とせがまるゝ母の切なさ、これが人並の活計を立て得るものなら、飴も笛も買ふて遣りたきは山々なれど、葉買ふ錢も竭き果てゝ、枯野に弱る虫の聲の、細くも露命を繋ぐ今の身、小遣錢も遣ひ果して、明日は何うして暮らさうかと、寢物語に泣き口説けば夫も苦勞を見兼てや、今朝は疾くより起き出でゝ、知己を訪ひに出で給ひ、歸

りの程も知れ難く、よしまた歸り給へばとて、金の工面の否やも知れず、あア如何にして　今のこの身になりたるか、妾も以前は岸某の娘にして、今の夫とは師弟の中にてありたりき。されども繪師の家柄とて、女子は名跡繼ぐこと叶はず、誰かある、娘に娶はせ、家の名を讓るべしと、窃に目をつけ居給ふ中、今の夫は氣性も優しく、固より腕は堪能なれば、これこそと擇まれて逢ふ初契の、嬉しいやら、羞かしいやらの八年前、時しも霜月末なりけり。其後父上隱れ給ひて、二年三年は事も無く日を送りしが、師に離れたる門生は、宿無き饑鳥の祿に趁はれて、去る者もあり、遁ぐるもあり、別けて夫と中悪かりし苦石は、

早くも東都に名を揚げて、我家を悪さまに云ひ觸らすを、夫は更に氣にかけ給はず、其儘にして流れ行く、月日も浮名と共に消えて、また家の名も、揚る雲雀の春とはなりぬ。その春は花に嵐の風邪心地、夫は永の病に犯され、枕あがらず臥し給ふもの、恰も一年餘なりき、斯かれば貯蓄も早く竭き、小太郎にもせがまれて、妾も苦勞に瘦せ果てぬ。その冬も過ぎ年も暮れ、また春に遇ふ枯木の花、妾は色香も失せたれど、水仕の業に追はれては、紅白粉も要は無く、子の成長に氣まぐれて、襤褸を縫へば秋の雨、鍼かとばかり降頻りて、芭蕉の破れを知らせけり。されば、要無き遊藝は父あり母ある中にして、世に出で親

に別れて後、夫に病まれ子に追はれ、琴の調べも何かせむ、昔時習ひし糸竹を、絲針の技に代えたらば、今の憂目は見ざりしならむ、嘆くは愚なり、今はや遲し。嘆く中にも嬉しきは、夫の病癒えたる事なり。それ父さんに抱ッ兒せよ、この間に晴衣縫ふて遣ろと、腰上げ延す二三寸、行と丈とに曲尺あてゝ、背丈伸びしを喜ぶは、子を持つ母の心なるべし。さてもその後、夫の病は全癒したれど、それよりは氣性以前に變り行き、世を厭ひてや、都の住居は住み憂しとて、今の宮津に移り住み、多くの人とも交はらず、心任せに繪を畫きて、世に售らんともし給はねば、其名は漸う聞えずなりて、今は岸苦と呼ぶ者も無く、

斯くして年月を過ぎ行かば、再び世に出る時も無からむ。聞けば意地の悪い苦石は、今東都にて飛ぶ鳥も落るばかりの勢ひとや、夫と技を比べては、劣はあるとも、決して優れる筈は無きに、如何して其名を賣りけるぞ、羨ましくは無れども、エヽ口惜い、夫は何故に腑甲斐無きぞ、イヤ〳〵怨むはホンに勿躰ない、貧は女房の不仕末ゆゑ、おうそれもあり、唯可哀相なはァノ小太郎、小遣錢を拗られても、遣ることならぬ貧苦の責、四百四病の苦痛の中、貧より辛らき病は無いと、世の諺に聞いたるが、今こそ我身にあたれりと、お園は落る涙を拭ひて、わが膝元に頑是無く、泣寢入る小太郎を撫で下しつゝ、その顏熟と

瞰入たり。暫らくして小太郎は眼を覺し、四邊を眺めてベソを掻き、『母ァさん、早くお錢をお呉れよゥ』『またそんな事をお云ひだよ、坊やはいゝ兒だから、大人しくして寢んねをおし』『いや〳〵いやだ、母ァさんお呉れッてば』『お錢を遣はない兒はいゝ兒』『だつて皆なが唐人笛を持たないと、一緒に遊ばないッて云つた、よう買つてお呉れッ、母ァさん』『えゝ聞き分けの無い兒だ、母ァさんはお小使を持ちません、だから父さんのお歸りまでお待ち、さうすると笛を買つて上げるから』『いや〳〵、ァノ孝ちやん許の母ァさんは直と買て下さいますけど、坊やの母ァさんは吝嗇で私いや、唐人笛が欲しいなァ』と泣けども賺す

辭だになく、子にまで心見透されて、口惜涙は湧きかへるを、耐ゆる胸の苦しさは、燃ゆるが如き思ひなるべし。『坊やお泣きでない、もう父さんがお歸りなさる時分だから、お前外面へ行つて見てお出で、お腹が空いたら餡餅を上げやう』『母ァさん、私餡餅は嫌ひだ』『だつてお前、何日もお美味〳〵といつて食べるぢやないか、だからお隣家のお婆ァさんが、坊やに態々下すつたんだよ』『いや、私今日は餡餅よりかお錢がいゝや』『お錢は私から父さんに貰つて上げるから、餡餅もお食べ』『ホントウにお錢も兩方をかえ』『さうよ』『母ァさん、嘻しいナァ、早く父さんがお歸りだといゝけれど』『だから見てお出でな』『あい〳〵』

『アッそれ轉ばないようにおし、さうして遠くへ行つちやいけませんよ』『あい、大丈夫よ、母ァさん！』『何んだえ』『父さんが』『來ましたか、早く呼んでお出で』『父さん〳〵、やァい母ァさん』『あいよ』『父さんのお袂が膨れて居ます、母ァさん、お土産は何かあてゝ御覽』父の袂が膨れしとて、喜び廻る門の口、岸苔は莞爾ともせず、日に照されて額は汗ばみ、眉を顰めて入り來るを、日頃の氣性と見てとるお園、何彼につけて如才無く、澁團扇もて煽ぎやれば、子は手の下を潜りつ拔けつ、土産貰はん一心に、喜ぶ顔の愛らしさ。

岸苔は小大郎の顔を見て、我と涙の湧き來るを、隱して袂に手

をさし入れ、取出したる小包開けば、待設けたる品ならで、細く刻みし紙片なり、お園は驚き手にとり上げて、『これは何で御座います』と顔を皺めて難ずれば、小太郎もたゞ涙ぐみて、母の乳房に縋りつきぬ。岸苦は太き息して『お園、私は今日から元結の賃仕事をやる氣ぢやが、其方も手傳ふては呉まいか』『えゝッ』『ナニも驚く事はない、一日やれば三錢、其方と二人で六錢ぢや、この方が何より罪がない、アハ、、、』『それでも貴夫は、友染の繪をお畫き遊ばせば、日に一圓は……』『えッ何を云ふぞ、私ぢやとてそれ位な事は存じて居る、私は畫をかくことを嫌ひでない、横好の大下手、その下手な畫を殘して置いては、

死んだ後まで人樣に笑はれる、それが口惜いから畫かぬのぢや、アハ、、、』『それでも明日を何うしてお暮しなさる、この子が可哀相で御座いませぬか、今日も今日とて、今朝からの執拗つゞけに、小遣錢の缺も無くて、貴夫ばかりを待つて居ました』『ナニ執拗！、捨てゝ置け、母が庇保と癖になるワ』と云ふ人も泣き母も泣き、子は殊更に聲立てゝ、貧に泣くこそ哀れなり。

（二）

若き女のその身を花に譬へらるゝ頃は、姿も振も優しくて、遠山の黛は初三の月を描き、細腰嫋々として、柳の風折無く、春はそれ臙脂よ白粉よと、鏡の前に兩裸裸ぎて、芙蓉水を出づる

態を映し、粧成つてそれからは、紅張の日傘に前後をつゝまれて、渡月橋に黄なる蝶を追ふたりしも、人間の榮枯は雨後春月の虧け易く、岸家の令嬢お園も、哀れや零落の淵に沈みて、龍の雲を獲ざるもの十年、丹後の宮津に居を移してよりは、世帶に窶れ貧に痩せて、花見月見の遊興も無く、小太郎といふ乳呑兒出來ては、身に絲竹の嗜みありても、藝は身を助くる程の薄命ならずと、琴を焚いて竈を賑はし、三絃の糸もて垣根の綻びを繕ふ迄となれば、粧ひ飾るべき櫛笄より、着がへの衣をも賣代なして、夫が病める折の藥にかへ、斯くて漸うに病の癒えけるまゝ、元結の賃仕事をその日の活計とすれば、友は飯に寄る

蛆の如く、今や口を糊する術だに無くなりてよりは、去る者日々に疎くなりゆき、お園の家を訪ふ人も無くて、掃はぬ門に落葉の積りぬ。岸苔はかゝる世の人心を觀じつゝも、尙ほ繪を畫かんともせず、畫かば一枝半石の丹青、立どころに成就せん腕はありながら、日に三錢四錢の賃仕事に甘んじて、輕々しく毫を揮はねば、生活次第に困窮して、今は小太郎の小遣錢にも必迫しぬ。

岸苔の斯くまで世に合はざるに引きかへ、早く一枝の筆を載せて、東都に出でたる苔石は、二三年の間に羽を伸して、今は飛ぶ鳥も落なむばかりの勢ひに任せ、門戸を張り、門生を集へ、

必死となりて世に斬り出でたるに、後には比ぶべき者無きまで
に賣出し、苔石と呼べば、三つ見も知れるやうになりぬ。
今年の夏は雨いと多かりしより、京の稻荷山は松茸の當り年と
て、關東からも茸狩に出掛くる程の景氣に、苔石は久々にて故
郷に錦を飾らばやと、意を迎ふる者のあるを幸ひに、門生從者
六七人を召連れ、伊勢參宮の後奈良をめぐり、東大寺春日の社
と見まはれば、紅葉に鹿の配合面白く、花に好かりし若草山も、
枯れて一入の趣ありと、夕暮の月を待ちて、麓の茶屋に毛氈敷
かせ、樂飲みの座もしめやかに、雲に入る孤雁の景を眺めては、
傍の門生に、あれ〳〵あれが光琳の筆法じやと、大袈裟に吹き

かくる。京に近きだけ言語の訛るも、耳新しう聞ゆるとて、女
中の顏を見れば、目鼻立の凛として何處やら品の好い容貌は、
それよ、岸のお園樣に、そつくりじやと、俄に昔時戀しうなりて、
翌朝丹後に行くと云へば土地の者引き留めて、もう二三日御逗
留と勸むるを、要ある身の長居はならずと、無理に歸るほど惜
まれて評判好く、京には行かずして、まはり路なる宮津に至る
も、戀あればなり。
丹後には天の橋立といふ名所あれど、それには眼もかけずして、
一散に旅を急ぎ、宮津に着いて名ある旅宿を本陣に定め、先づ
他人をしてお園の安否を問へば、岸の令嬢樣ともあらうものが、

見る蔭も無く零落て、昔時の俤は更に無しと、同門の追從者が斥候の役したり顔に云ふ、されども苦石は眞事とせず、それは嘘なり、岸苦とてまんざらの腕でも無ければ、左までにならざらむ前に、何うか分別をつけそうなものと云ふを、それは貴君が知らぬが佛、嘘ならば、論より證據に呼んで見給へと、一書を岸苦の家に飛ばしぬ。

岸苦はその書を讀み下して、怫と腹立て『ナ、何と云ひくさる、近頃は御閑の御樣子お羨しく存候私こと直樣御伺ひ可仕處多忙參上致兼候就ては乍御足勞樣一寸御入來待上候其折御生計上の事何彼と御相談可申上候と書きをつた、えッ不禮千萬、

よしや私は貧したればとて、兄第子、しかも岸の相續者だ、私が事は兎も角も措いて、師匠の家に未だ一度も顔出せず、私を呼び寄せんとは無禮至極よし〳〵、お園お使には御返事に及ばぬ、御用あらば先方からお出でなされと斷つて呉れ、岸苦は貧しても、他人に腰を屈げることは、大の嫌ひだと申して遣れッ』

一徹短慮の岸苦、眦をきり〳〵と昂げて切齒をなし、持ちたる書狀をさん〳〵に引裂けば、女房は何事と傍に摺寄り『まァそのやうな短氣なことを……手紙の意味が何うあらうと、問ふて下さるは御心切』と云ふを岸苦は怫として、眉間に蛇の如き青筋を現はし、お園をグッと睨みつめて。『默れ！　其方の知つたこ

とぢやない、たとへ手紙に何う書いてあらうと、岸の家元は私じや、それに何うじや、成上りの分際で、私を宿へ呼びつけんとするは、えッ無禮な奴、この宮津へは何用あつて來居つた、出世を私に誇る氣か、立身したを見せに來たか、たゞし心切に私を訪はんためならば、先づ我家を訪ふて後、そして往復もなるべきに、飽まで私に抵抗氣か、殘念』と腕を組んで口惜がるを、お園は恐々傍に寄り、慰め顔して物云へば、女子の知つた事じやないと、叱られながらも使ひには、躰よく云ふて歸し遣り、夫の傍に座を占めて。『さァその御立腹は御尤もですが、先方はそんな考へで、呼んだのでもありますまい、云はゞ何かの

行違ひ、貴君はお厭とおつしやるなら、妾が行つて參りませう、先方に逢ふて話をしたなら、また好い事もあらうもの、斯ふして暮して居た日には、日々に困つて行く道理、小太郎も來春から學校に出して遣りたし、貴君の運も開けましたら、世帶の苦勞も無くなりませう、斯ふ零落て他人の力を借ることは、妾も口惜しう御座いますれど、何と云ても元結の賃仕事では、何日雨龍が上ることやら、それよりは苦石に逢ふた上で、これ斯ふと話をしたなら、また好い工夫もつきませう、妾斗りの一存で、貴君のお名は落しませぬば、一足鳥渡參つて來ます』岸吉は眼を閉ぢて物も云はず、強ゐて許可を請ひ求むれば、勝手にせ

よと云ひ切る儘、納戸に入りて障子をピシヤリ。

折から往來に遊び居たる小太郎は駈けて來て、掾側に寢轉びながら。『母ァさん、お錢をお呉れ』『えッ、忙しない、妾は今他所へ行く處だから、歸つて來てからにおし』『いや、いや、母ァさん、私も一緒に行きたいナァ』『おう連れて行くが、大人しうするんだよ、いゝかえ、始めての叔父さんだから』『いゝよ、坊やお錢お呉れッて云はないよ、ねい母ァさん』愛らしき兒に手を引かれ、進まぬ心を勵まして、苔石の宿を訪ふたりけり。

（三）

秋はやゝ寂びたれども、磯邊に遠時雨の音も無く、濱風は少しく冷たけれど、微醉を醒さんには屈竟なりと、苔石は今日もまた振舞の酒の香を、附切の女中に吹ッかけ、十二疊二間押通しの廣間を我物顔にして、達磨樣の涅槃像と云ひさうな寢轉びやうをし、コップに二三杯の水を呑み干して『コリヤ枕石、先刻岸苔の許へ使ひに行つたのは其方ぢやな、アノ無禮者は何と云ひ居つたと、よし〳〵怪しからむ、實以て左樣か』門生枕石は閾の外に手を支いて『はい、先刻申上げました通りで御座ります、何うしたものか、非常に腹を立てまして、岸の家元は此方ぢやとか、何ぢやとか譯の判らぬことを申して居りました』『ナニ家元！　あの醜態で家元でもあるまい、怪しからむ男だ、ア

ハ、、、あァ云つたやうな男が居るから、繪の道も進歩しないのだ、家元ッて何が家元だ、腕が鈍くつても、畫けなくつても家元か、あんな無法な男には、心切も無になるから、今後若し尋ねて來ても門前で追ひかへせ』『ハッ』と一同平伏して引退れば、碁石は疎らな髯を捻りまはして『コリヤ枕石、其方碁の對手をいたさぬか』『私は不調法で御座ります』『そんなら與太郎、其方は何うぢや』『はい私も……』『話せない奴等だ、斯ふ云つた日に碁でも打たんと、旅のやうな心地がせぬ、誰かないか、無い、フン皆な私には一目を措くと見えるな』『さうぢやないです』『おう後藤、其方は強い筈ぢや』『でも先生にやァ勝てません』

『いや、其方には勝てまい』『何故で御座りますか』『そら、泣く兒と後藤には勝たれぬと云ふぢやないか』『ヘィ』『今云つたのが判つたか』『ナル程、洒落で御座りますな』『さて〳〵感じの悪い男だ、』これにて一同大笑ひとなり、旅の憂さを晴すのはこゝぢやと、碁石大恐悅の體にて眠れば、門生共は地獄で佛と、碁盤を借りて、五目並べ抔して樂しむ處へ、宿屋の女中が入來り『岸さんの御新造が見えまして、先刻のお詫びにとやら申して居られます』『ナニ岸の御新造だ、無禮千萬な奴ぢやから、面會を斷つて呉れ』『それでも先生樣に伺つて下さいませぬか』『それには及ばむ、これこのやうに先生は快く寢んでおゐでなさるぢやな

いか』『でもお家にゐらつしやいますのを、お斷り申すのは餘りお可哀想です』『では御勝手になさるが宜しい、吾輩共は先生の寢んでゐらつしやる中が天下だ、えッ五月蠅いナ、それ御覽、此所がもう三目になつて居るぢやないか、これが負けると僕が菓子をおごらんけりやァならんからサ』『そんなら宜う御座ります、お斷り申ますから』と女中は頰を膨らして出て行きぬ。

お園は門口に行みながら、襟をつくろひ髪撫で上げて、座敷に案内さるゝを待てば、女中の返事は反對にて、先生樣は御寢なつて、御面會をお斷申ますとの辭に、腹は立てども詮術無ければ、時宜して歸るに、小太郎は面白からぬか、門口出づれば啜り泣き、嫌かせど止まぬは空腹なるべし。

戸外に出づれば、濱風温く吹き渡りて、頽れし鬢の毛をはらひ、日は未だ落ちで、親子の影を地に映すに、我と身裝を繕ひて、窶れし姿に涙落しぬ。さりとては苦石の無情よ、妾と昔時は師弟たり、今日尋ぬれば寢みしとて、情無く歸せし人非人、かゝる人面獸心を賴まんとしたは妾の愚、家に歸つて夫に何と言譯せうぞと、悄々として歩む態は、花落んとして、雨中に惱む如くなり。

折しも背後に笑聲、何事と振向けば、苦石を首として、門生從者六七人、二階の欄干に身を寄せつゝ、お園の姿を笑ふなりけ

り。此方は無念さ、口惜さ己れと云ひさま擡ぐる顔に、誰が投げ出せしか卷煙草の吸殼、中つて灰の眼に入りてや、小太郎がワッと泣き出すを、興あり氣に瞰下して、轟然と笑ひ轉げる物音と共に聲を揃へて。アノ醜態を見ろッ！

（四）

無念、無念、口惜と一圖に思ひ詰めたる心の、後には終に大勇猛心を惹起して、當の敵なる苔石を凌駕せんずる勢ひの凄まじさ、譬へば狂風の荆草を吹いて、寒月冴ゆる千里の野を、暴虎の驅くるが如く、眼に遮る少しの故障だに無くて、一意專念丹青の技を勵む程に、堪能なる腕の、ます〳〵錬えて、百錬の鐵よりもなほ鋭なり。梅は木振枝振の若木だも趣あるに、花を着けて一入の匂ひ深く、岸苔根は確なる腕とて、負けまじとの培ひに、如何でか美しき蕾の生らざるべき、花と云はず、鳥と云はず、宇宙の中、目に觸るゝものを採りては畫き、畫きては壁に懸けて、心に適はざれば、引き破り、引き裂くこと、昔の人の布を截ちけるよりも易し。斯く精神を籠めて、一枝半石を圖すれども、人氣無きか、其名の世に知られざる故か、誰一人揮毫を請ふ者無し。今の世は古物とさへ云へば、瓦板の讀賣、胡粉摺の大津繪すら買ふ人あれど、名の聞こえざる名人の、熱血を注げる繪は、見て呉れ人も無かりき。

さる程に女房お園は、如何もして夫を世に出さんものをと、種〻に心を碎き、手内職に忙しき身も、朝は疾く起き、夜は遲く寢ねて、賃元結の隙には、胡粉、紺青と繪の具を解きて手助し、活計に餘裕ある時は、絹、絖、畫箋、唐紙など買うて、夫に毫を揮はすれど、岸苔はお園の苦心を知らぬ顏に、幾枚となく畫き損じては、引き裂き、突き破り、羊の腹を肥すとのみ多かり。

貧してはドンツク布子に、北風の寒さを凌ぎて、こゝ三疊の間を、己が畫室と定め、金城鐵壁よりも要害堅固に、破れたれども障子に閂して、猥りに他人を內に入れず、端然と坐したる岸

苔が姿は、九年面壁の達摩に齊しく、烱々たる双の眼を一枚の絹に聚め、筆を意の行くに任せて、水を描き、山を畫き、雲を呼び、風を麾きて、畫虎に眼睛を點ずれば、月に慘憺の狀を添へ、竹に天籟の趣を加へぬ。岸苔は息をもつかず、一心不亂に其圖を見詰め居けるが、岩石の點苔に難あるを發見し。えッ氣に食はぬと云ひ樣、手を伸して引ッ攫み、前後の思慮も無く、ざらりと裂きて、窓の外に投げ遣りたり。

家は荒れたれども、窓外の眺望いと面白く、頽れたる垣根の隙より、宮津の海晴れて翠に、波の碎けて磯を打つ邊には、六ッ七ッの千鳥の立ちて、黑き岩陰に飛び去りぬ。されども鹿を追

ふ獵師の山を見ざるが如くに、山光水色眼に入らざるか、小窓の敷居に肱を置きながらも、眼は畫圖を辿り、魂は趣向に掠められて、心は半ば狂せるが如し。

お父さんと優しき聲して呼びたるは小太郎なり。窓の下から愛らしき顏を出して、今折り採れりと覺しき寒菊の花一枝を捧げつ、これ上げましよと云ふ、岸苔は精神茲にあらざれば、返辭だにせずして、何を眺むるとも無く、眼を天地の間に遊ばせ居るを、またしても五月蠅呼び立つるに、物凄ぎ一ト睨みして、邪魔すなと叱り付くれば、頑是無き小太郎、恐さに縮み上りて、裏口に立てる母の袖に縋りつきぬ。

想に凝りて毫を握る日は、子の愛も無く、妻の情も知らで、唯紙絹の上を行る筆の軋る音するのみ、鎖せる室は風死して、陰氣座に横はり、幾日か掃はぬ塵の積りて、吐く息もいと苦しげなり。晝は終日夜は終夜、座しては立つことの懶ければ、食も畫室に運ばせ、戸の口三寸出でざる日の重なる程に、血色悪しく、肉落ちて、枯槁病める人に似たり。

されども元氣更に衰へず、清瘦鶴の如き身を起して、丹青を凝らすもの、一月二月乃至は半年、未だこれぞと思ふ畫の一枚も成らず。女房お園は夫の病痾に罹らんことを苦にやみて、氣保養など勸むれど、更に聞き入れざるのみか、後には夜を徹して

の勉強に、今は精根竭き果てけるか、猛虎一聲山月高の圖に、落葉一片を畫ける中途、朱筆を緊乎と握り詰めたる儘、卒倒して人心地あらず。

女房驚きて呼び活せば、暫時して息吹きかへし、活と眼を瞻開きて、傍に泣き寄る小太郎を引きつけながら、畫き懸けたる畫圖を睨みて、殘念とたゞ一言。

（五）

青天雲ならざるに何の龍ぞと見れば、櫻咲く嵐山に、花見の幕を張るなりけり。大井川に筏させば、散る花の吹雪に、春行く水の香ばしく、渡月橋に狩衣召せし殿上人お在まさねど、大原

女が裙端折たる姿は、奴袴着けたる君よりも風流なるべし。三軒茶屋の簾を捲いて、香爐峯の雪と洒落る通人無くとも、知恩院の鐘の聲は、流石に古都の俤を殘せり。別けて今年は博覽會を此地に開かれたれば、京の賑はひ凄まじく、昨日も今日も人の山を築きて、東山は山に山を重ねたり。今日は博覽會の出品者に、褒賞を授與せらるべき日とて、禮服着用の人々、我先にと會場に詰めかけて、金牌か銀牌かと、待つ中が花なるべし。頤て美術品の褒賞授與式となりぬ。片唾を呑んで待居たる技藝家、何れも是も我こそは一等賞ぞと、心構への凛々しさ、風俗の美々しさ、晴の場所とは、實に今なり。

式場には總裁の宮殿下を始め、向々の役員綺羅星の如く立列び、係官一歩前に立出でゝ、一々褒狀を朗讀あり、先づ第一番に讀み上げたるは、繪畫の部にて虎の圖、筆力雄健着想奇拔圖樣頗る斬新にして祖先岸駒を凌ぐ其妙技一等賞に相當金牌を下賜す、出品人は岸岸苔と呼ぶ。この一聲に岸苔は如何に嬉しかりけん、病み窶けたる身の這ふが如く立出るを、女房お園はそを勦りて、齊しく廣場に直立たり。

滿場の視線は夫婦の身に注ぎて、褒賞を持ち出づる時は、誰云ふと無く岸君萬歳の聲は起りぬ。場外に去れば、始め笑へる人々も、口を噤みて、二人の後影を尊げに見送けり、時は未だ早

ければ、旭日曈々と都の大路を照して、肩身廣き夫婦が影を地に映しぬ。この折の風俗、破れたる布子着ながら、胸に錦繡を飾れる姿の小氣味よさ。さりとては燕尾服の花を着けたる苔石の、褒狀の實の一ッだに獲ざりしに引換へて。（廿七年作）

槍持勘助

煙ぶる柳を蹴鞠の月は、煉塀の影を大路に映して、長屋の武者窓より、燈のほのめく、何たる心地好き春の夜ぞ、千兩が一刻の價値ならば、こゝに青緡の錢が五百文、酒に代へなば、醉は

明方までの夢ばかりなる下郎の身、少と分配前を此方に貰うて清香ある花の下に、夜一夜明かさるゝ迄の榮耀あらばよけれど、貧乏德利に竹の皮の提重では、花にも鳥にも心は移らざるべし。今は知らず、五十年も前までは、貴賤貧富の楷子段酷く違ひて、人間になり損ねたる種瓢の蔓には、南瓜の生りし例無く、前世に折助の種を蒔かれなば、智者も勇者も剛の者も、下郎に果つる身ぞ憐れなり。作州津山の槍持奴に、蘆田勘助といふ者ありけり、剛力他人に優れて強かりければ、常に君侯に咫尺して、御馬前の塵を鎮めたりしが、老る年は水と共に流れつ、、鬢の毛の霜を置くには、立つる鳥毛の色に後れて、あはれ昔の力

量も挫け、力瘤の岩丈は見すれども、やゝ枯木の膏無きが如くなりき、されども忠義一徹の男とて、臆する色は少しも見せず、吹き荒める嵐の日に、毛臑をまくりて、鐵脚を露はし、腕も肩も張り裂けんばかりに重きを、物ともせず、打振りて、御登城の供をなしける。

今宵は何か感ずる事やありけん、仲間部屋を出でゝ、便々たる腹に酒を湛え、虹の如き息を吹きかけつゝ、煮賣の店を立出でゝ、大路を跟蹌來りしが、弗と澄む月を仰ぎ見れば、今し散りかゝれる櫻の花の、颯と吹き來る風に地に敷き、時ならぬ雪か霜か、勘助が襟元寛げたる懐中に入りて、寒しと見ゆるまでの

美くしさ、風流氣無き下郎の身にも、そゞろに面白う思はれて、我知らず足を止めしが、忽ち眉根をうち顰めて。イヤ〳〵散り際麗ろきは花のみではない、人は一代名は何とやら、御家の爲の命なら、この下郎奴の首ッ玉、槍先に捧げ申さうわと醉を吹いて足を早め、來るとも無くて我が部屋に入りぬ。

壁やゝ落て月を漏らし、檐傾きて風荒めり。行燈の火を搔き立てゝ、塵に埋もれし硯を掃ひ、墨磨り流して、走り書に一通を認め了り、部屋の中央に立てかける、大身の槍を膝下に引寄せつ、鞘を外して穂先を窺ひ、燒刃の匂をつく〴〵見れば、實に一品の業物とて、美くしなんと云ふ斗なし。勘助は頓て莞爾

とうち笑み『天晴の業物かな、聞說らく昔關ヶ原の役相果てゝ後、本多豐後守樣この大身の槍を携へ、越前侯に謁へて宣ふに我若年の頃よりこの槍先にて、敵を打破りしこと數回、中にも元龜の初年なり、姉川の一戰に數人の首を討取り、味方ヶ原の戰より、長篠の一戰、鳶巢山の先登して强敵を打惱ましつ、まつた高天神の戰には首級を獲ること二十一、小牧長久手の戰場にては、敵と烈しく接戰なして、首級を擧ぐる十有六、それをばこれに結び下げ、大御所の御實檢に供へられしも、みな此槍の力のみと、左まで貴とき槍ながら、老ひては杖ともなし難さに、秀康公へ奉られしを、越前家の重寶となして、永く御秘

藏ありたるが、武運の傾くる所は是非もなや、御子息忠直公、この鎗を讓り受けられ、大阪陣にも携へ給ひて、幸村始め誰彼と、五十近くの首級を擧げしも、晩年御所業荒々しく、酒色に耽り遊ばすのみか、種々亂行の御咎めにより、越の高田に移され給ひて、疇昔に變る御有樣も、時世がさする業なれば、誰を怨まむ樣も無く、この業物も埋もれて、深山の枯木に齊しかりけり、其後寛永半の頃、當城の主人宣富公、其讓を受けさせ給ひ、津山の守護となされしも、今太平の世の中に、花奢風流を事として、骨を粉黛の色に軟らげ、腸を酒池肉林に腐らして、武士は弓執る業も知らず、力量年と共に減しては、大刀佩

さむ者だに無し、さるが中にも我君は、この勳績ある業物を、日頃の出行に持たし給へど、槍穗の長さ、四尺五寸、柄の長さは九尺にあまり、總尺合して一丈四尺、鞘に熊毛を植ゑたればその重きこと言語に絶えたり、われこの槍を持てより、二十餘年の星霜を經たれども、弓矢神の御守護にや、ツイに一度も病みたる事無く、如何なる烈風の時にても、物の屑とはせざりしが、嗚呼老る年には勝れぬよ、我若し不慮の事あらば、誰か代つて捧ぐべき、家中を見ても其人あらず、花よ鳥よと歌詠めど竹刀の痕を撫でゝ見て、痣を苦にする弱虫共、いかでこの槍持ち得べき、よしや半年一年と、持ち耐ゆべき者ありとも、苦心

の程ぞ如何ばかり、若しも卒忽の過失あらば、君家の恥辱此上無からむ、左にあらずとも、今の君侯戰場に臨まるゝに、これをば自在に捌かれ得べきか、若し此槍が御手に餘らば、武門の不覺此上やある、彼是を思ひ煩ふ時は、潛上ながら此柄を伐りて短くなし、君の所用を便利にして、我に代れる持人に、後の難儀を除かせむ、弓矢八幡、下郎が無禮を宥させ給へ』と、大身の鎗を一振り振つて、燈の前に立たる樣は、阿修羅王の怒れる如し。

春とは云へど更けて行く、鐘の霞むに添ふ花の、散りて四邊に聲も無く、人氣は早く絶えにけり、破れたれども澄む月の、影

は廂に邪魔されて、室内には燈す燈蓋の、油の絶間、燈心の瞬く程ぞ迫りたり。

勘助は今死ぬる身も悠然と、諸裸脱いでドッカと座しつ、眼を閉ぢて心を鎭め、靜に槍の柄を追つ取り、傍の山刀を振上げて丁、々、丁と、力を籠めて伐る程に、柄四五尺ぞ斷れたり。それをば一回振り廻しつ、おう、これでこそ天下の寶、御家も萬歲萬々歲と、喜びつゝも近づく死期に、息を數へて腹を突き出し、短刀逆手に取るや否、松の一木は煙となりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

風露こゝに二百歲、その名は萬年山に、朽ちせぬ績は、世を代

へ時を古るも、色は變らぬ青松寺の、月下に門を叩いて、僧を驚かしつゝ、苔に青み雨に黑める碑石を讀めば『槍持勘助の墓』

（廿九年作）

犬さくら

（上）

春の夜の朧にかすむ花園町を、曲り角から三軒目。お忍びの夜の首尾はこれにと、ポストの影法師を、研ぎ出すの門に浴せかけて、月にも木地を見せかけの板塀に、見越の松のお誂ひは、

直ぐ眞向ふの魚勝から取寄せて、無人勝なる勝手元も、諸事は金に埒の明く別世界。茶座敷もあり餘る身代には、贅といふ程の奢とも思はずして、何う妾宅の苦情も無く、月六齋の御幸の外は、世をも人をも捨扶持に、肥後米の直も耳に入らねば、錢金は斯うして湧くものと、旦那が本業の銀山の繪圖面を押ッ廣げて、無心の手管を考へ、寐轉んで新聞紙を眺めては、三の面の穿鑿を、痴話喧嘩の小楯にとりて、驕らする算段ばかり。ましたしても小唄に音〻を合しては、浮いて、鬱いで、氣を揉んで儘になる身を羨みて、拗ねて寐る夜もありとかや。

こゝの女主のお政といふは、もとは夫者の流の身、芦間に寄す

る朝妻船の、浮寐定めぬ化生なりしが、今の旦那の好いたでもなく、好かぬでも、あらぬ男の意地張から、引かれて根のついた二三年は、珍らし物好きの浮心より、それ大磯よ池上よと、見栄半分の贅澤に引ッ張り廻されしが、今の世の紳士と云はるゝ程の男に、眞面目に戀する者は少なく、殖かる毎に增す慾には、何日か遊蕩の數を盡して、新橋の艶、柳橋の意氣なるをも我物にせねば措かぬ心から、殖民地を此處にもつくり、彼處にも圍はれ者の阿房宮、お手のものにして、思つた程の旨味は無く、その儘置けば野の梅の、色さへ香さへあるものを、生木の斧と引き割きて、始皇の三千、我は未だ十人にも足らぬ眺望

と、花壇に菊は凋るれども、ツイ自由の利く所から、他所の垣根に氣を移しては、故參にお成の日は稀に、一度や二度が關の山、主はこんからドンタクの、その日も不動の空縛り、繫がれて居る妾の身は、柱をめぐる狗にも劣りぬ。えゝ儘の川、露さへ厭ふ心だも、迷ふて濡れてそれからは、何うなるものかと、内々は隱男もありとの噂。

さてその噂の世間に知れ初むる頃は、男の足は遠退きて、音沙汰も無い二年あまり、春は今宵、志かも月のある今日の夜に、忍ぶ身の肩巾が狹く、親指の在否を女中に糺して。おやお久し振と、奥に駈込むその跡に踵きて、二階に通る男あり。奥には

女主の聲らしく。ナニ木村さんが……と座を立ちながら。幽靈ぢやアあるまいし、突然に來る人があるものか、春やは嘘つきぢと、澄し切つて次の間まで出來る途端、階子段の上口でその人に衝きあたり。おやと云つて、無意識に前の座に居直りつ、さて今更のやうに。お前さんよくまア忘れずに來て下すつたぢ、嬉しいと口惜しいとで、極りが悪いワと、たゞ男の顏を見詰めた切り、煙草の煙を我知らず眞向に吹き付くるを、男は顏を俯向けて。酷いぢやないか、やつとの思ひで逢ふと、直ぐ煙ッたくされるのだものをと、態と顏を皺むるを、お政はジロリと横目遣ひして。酷い？、何方が酷くつて、お前さんいくら

鼬の道だからつてもう二年近くにもなりまずよ、今迄何處の何ういふ女護島をッ、つてゐらしつて、憎らしいねえと、煙管の雁首を銀釵でホジクつて居る、男は手持無沙汰の風で。それは寃罪だよと、澄し切つて居るを。善哉もお汁粉もないもんだ、人を甘くばかり輕視つて、學者だと思つてサ、ねえ春や、木村さんは餘りだと思ふワ、と加勢を女中に持込む程の弱味を、またお出でなすつたとお春は小楯にとり。左樣で御座いますね。先づ同盟の意を漏らして、日頃の忠義は斯時ぞと、直樣君の御馬前に立塞がる意氣凄まじく。ねえ貴方、木村さん、貴方はほんとうにお人が悪くつてゐらつしやるワと、順慶流に斫り込み

つ、目色をお政の方に送れば、女主は短刀直入の勢にて。木村さん、貴方まア考へて御覽なさいな、アレは一昨々年の春ですよ、試驗が近くなつて忙しいから、一月や二月は來られないかも知れないとおつしやるから、それなれば今夜は別れの盃だからつて、伊豫紋さんからわざ〳〵お料理を取り寄せの、二人して醉つて、妾の三浦訣別を彈いたのは、もう三年前ですよ、その後何の音沙汰も無いから、お前さんは屹度落第でもなすつて、それで極りが悪いので、いらつしやらないのだと、我慢に我慢をして居ましたけれど、ホンとうに酷いぢやないか、まる三年來て下さらないのだもの、そしてお前さん今夜は大層

お虛飾ぢやないか、もう外に情婦が出來て、妾どものやうなのには、用事が無いといふ見せつけでせう、ヘンやけますねと、怨めし相に云ふ。木村といふ男、年の頃は二十八九、黑七々子の三所紋の羽織に、わざと小柄を通がりに着流したる、萬筋の米澤糸織の袷、通し裏を見榮の秩父を、キヤラコの白足袋に摺つけて、色落のせぬを自慢の穿き下し。皮色博多に一本獨鈷の帶をゞめて、金鎖を奥の方に光らせたる工合、目鼻立も凛として、妾風情の玩弄になる男とは見えず。別けてお政の辭の中にも、試驗の何のとある所を見れば、まんざら目の無い人間でも無さ相なり。木村は何邊で飲んだ微醉の色を醒さんとてか。お

春さんお水を頂戴なと、いふをキッカケに、この座を立たんとする一刹那。また春やと呼ぶ女主の顔を、目色にて覗へば、雲行悪しく風凄く、煙草の煙の渦を巻いて、お政の朱唇を出づるさまは、雲の岫を離るゝ趣きあれども、形勢それとは異りて、やゝ必迫を示したり。いけない〳〵、お水なんか差上げちやいけないよ、數寄屋町邊の美くしいのに、酔はして聞かれた揚句の果に家へ來て、酔醒の水なんか召上るのは酷いぢやないか、いやよ、近にいらしつて惚氣やうなんて、ホンとうにお人が悪いるく……と、云ひ丁つて仰向に煙草を吸ふ。

木村はお政の横顔を恐る〳〵見て。お政さん、それはさうぢや

ない、實は僕も餘り久しく無沙汰をしたから、來やう〳〵と思つたけれど、よ、マア〳〵聞いて下さいな、憤つちやァ困るなア、處で素面では極りが悪いしさ、ナニその面で極りが悪いかと、それは酷い、私のお面は牛皮ではありませんよ、いけないナア、交ぜッかへしちやァ、お春さんまでが忠義立をするんだもの。いけません、いゝから默つて聞いて頂戴、で素面ちや極りが悪いと云つて、酔つちやァ、尚ほ話も出來まいかと、ツイ一合の御酒を飲むのにも、一通の心配ぢやなかつた、よ、お春さん、お水を頂戴ッてばと、笑ひながら手を合せて見するを、お政は眞面目に怫然として。いけません、そんな旨い事を云つ

て、胡麻化さうとしたつて駄目です。お前さんは三四年前までは、嘘をつかない、可愛らしいお方だと思つて居ましたが、久しく逢はない中に、しつかりお世辭者になつておしまいなすつた子、酔つてゐらつしてさへ斯うだもの、眞面目なら何んなだらう、春や、お前決してお水を差上げてはいけないよと横を向く。それでも、餘りお可哀相ですネと、お春は氣轉に二階を下る。お政は懸聲して。お前、ほんとうにお水を持つて來ていけないのだよと、念を押して煙草にテレを隠しながら、思ひさま煙管の鴈首を灰吹に投く。

木村は少し持餘して。それぢやァ御酒……なほいけないつ

て、何故だらう、私には少ともその理由が判らん。何故つて木村さん、お前さん熟うく考へて御覽なさい、それぢやあんまりで御座いませう、今は何處の何の誰さんの仕送で、そんなにお立派におなりなすつたかは存じませんが、未だお忘れはなさりますまい、金澤の中學校から出郷後の田舍者丸出の、手織木綿の布子着の、茶色になつた兵子帶〆の、芝居でする與茂作爺といふ見榮で、雨の日も風の朝も、この池の端を、谷中から大學校にお通ひなすつたのを、アレハもう恰度六年前になりますよ、アノ時分は妾もこんなお婆ァさんぢやありませんでした、未だ色も白かつたし、年も若いし、腐つても御存じのお政、い

くら渇したつて、盗泉は飲まぬ筈の者が、何うしたのかお前さんが馬鹿に可愛く、御容子の武骨なのにお似合なさらず、尋常でお優しくつて、下宿屋の拂ひに御屈托なさる位な方だから、此人ならよもや浮氣はなさるまいと、此方から買ひ被つて、嵌り込んで、貢いでも上げれば、隨分出來るだけのお世話もして上げた筈なのに、それを何うでせう、一昨々年の春から恰度三年も鼬の道とは、お情け無いぢやありませんか、厭なら厭だと、何故判然とおつしやつて、手を切つて下さいませぬ、妾も歴とした旦那のある身よ、好く好かれたでこそ遊んでも居りますが、好かれぬ男に未練な口は利きませんよ、それに何うです

男らしくもない、瓢簞ぶらりと歸つた切り、ウンだとも、潰れたとも云はず、今夜ヒョッコリ顔を見せて、何邊かの醉醒の嘘を、妾の顔に吹ッかけやうなどは、あんまり難有もないぢやありませんか、えゝッ、頭痛がすると、長火鉢の抽斗から江戸櫻を取出して、木村の俯向く顔を上目で窺き込みつ。ねえお前さん、大層お痩せなすつたぢやありませんかと、冷かに笑ひかけて、からかつて遣らうとの口占。木村は正直に頬を撫でゝ見て。痩せましたかな、爭はれないものだ、月給取つて嫣ァを持てば、そんなに男が悪くなるものか知ら、私も三年前までは、隨分花園町にも可愛がられたが、あァ年は老りたくないものさ

と交ぜッかへす。おやお前さん、アノ奥様が……。はいお羞しい事で御座いますが、昨年中貰ひ受けました、御不審も御座らば、婚姻の顚末を巨細に申聞きいたしませうか、私も只今では鑛山局の技師、理學士木村良吉で御座い、未だ御存じもあるまいが、亞米利加へも洋行いたし、月給も少からず頂き罷り居りまする、さういつも安く積つて貰ひますまいと、一寸の虫にも五分の魂の格で怫とする。お政は江戸櫻を邪慳に刻んで、こめかみに貼りつけ、ジッと木村の顔を睨めつけて、眉間に蛇のやうな青筋を浮べつ。ホ、、、、木村さん、大層成長おなり遊ばして、もうお一人で歩行は出來ませうテ、金が出來れば、

人間といふものは斯うまで立派な口が利けるものかしら、お前さんはもう五六年前の事をお忘れなすつてテ、お前さんは未だ二十四五、三十歳前には身代の五つ六つも起す男のあるのにこの年まで女房も持たず、御蕩樂もなさらず、神妙にして學問なさるゝ方だもの、眞實も他人一倍と、思ひ込んだのが妾の眼鏡違ひ、妾どものやうに色も戀も仕厭きては、容子も入らず、顏色も欲しくなく、たゞ賴母しいのは、男の心一つと、ぞつこんお前さんが可愛く、彼アして斯うしてと、世話もさしてやり、世話もされて、變らぬ中を樂しむより外はないと、思ひ込んで斯うした情合になりましたは、憎うて出來る浮氣では御座

んせぬ、それに何うです、如何に大學の帽子は、圓い玉子の四角な形でも、書生の時は圓く出來、月給貰へば角を立てゝ、さう都合の好い事ばかりを、それで男が立ちますか、昨日はお前に世話になつたが、今日は紳士だ、安く積つて貰ふまいとは、それは誰へのおつしやりやう、だから云はぬ事ぢやない、お前さんは怜悧で御發明で、男振もよくゐらしつて、あァ妾なんぞは、脚下へも寄り付かれはしませんわヲと、拗ねて俯向く顔の色は、火に逆上せてか、眼の縁はポーッと赤く、細面にして口元締れり、鼻の高い鹽梅、目元に云はれぬ愛嬌ある、美を取立てゝ云ふべき程ならねど、憎き所の無い相好とは、斯かるをや

云ふらむ、鼠小辨慶の紬の小袖に、黑八の襟を透して、青耳の裏の見ゆるまで胸元を寛げ、白抜き紺青色の襦袢の半襟を、白き頸筋の彩色までに引〻めつ、帶は繻珍と黑繻子の晝夜を、猫ぢやらしに結びたり。あァでもねえとの髮の好みの、桃割に水色の切かけたるは、見かけを若くせむとの意か、顏は素肌の白きを誇り、口には一點臙脂をさしぬ。お政は今し云ひ了りて、長煙管を額に押當て、俯向ける儘、口を緘むかと思へば、口惜涙かホロリとなるを、木村はそれと見てとつてか。お前、ほんとうに泣くのかえ。眞實つて、嘘つて、女郎ぢやァあるまいし、酷いつても、お前さんは餘りだわ、何故こんなお方におな

りなすつたらう、さうして見ると奥様も、まんざら白人ぢやないのですねと、底は女だけに碎けるにも脆く、少しばかり我折つて出れば、木村とてマンザラでも無い間なれば。お政……

お政まん、お前だつて酷いぢやないか、白人ぢやないの何のつて、私の媽ァを何んな者と思ひます、白人も白人、大の白人で私は實にそのお姫様過ぎるのに閉口して居る位だ、恥を云はねば理が判らぬから、譯を云つて聞かせるのだが、お前も知つて居る通り、私には學資といふものは、鐚一文も無い、が、無いと云つて、其儘では、今の世間が渡られず、よしや他人一倍勉強しても、金が無うては機械も買へず、本も充分に讀めぬ始末

だ、で、學文も唯化粧道具といふ迄では、卒業してもお役所の屬官が關の山故、何んでも立身出世するには、腰巾着に若くもの無しと悟つたから、恰度媒介する者のあるを幸ひ、或る金持の隱居の一人娘を、貰らひ受けて、金穴をこしらひ、直に米國に行つて學士の上に學士を買ひ込み、歸朝して見ると、早速賣口もつき、今は月給の百圓近くも貰つて居るが、さァ斯うなつて見ると、何がさて、お前といふお前に仕込まれた私だもの、何うしてアノ土偶のお姫様を見て居られやう、酒も家ぢやァ旨くない、飯も惣菜を煮させる外に能の無い媽ァでは、小砂利を嚙む思ひして、今日は洋食だ、明日は宴會だと、漸々家が留守

勝になり、他所に馴染が出來るにつけて、糠味噌の臭が鼻につき、矢張元木に優る裏木は無しで、トウ〳〵今夜といふ今夜お詫にやつて來たのだ、男一疋が斯うやつて來るからは、もう勘辨して遣つて呉れと、笑ひかくれば、お政は寧そ怨めし相に。お巫山戯でないよ、お前さんは妾を釣つてゐますねと、慣るにつかず、笑ふでも無い挨拶して、煙草を男に喫ひつける。木村は一喫すつて。旨い〳〵、久し振で長煙草の味を知つたと、お政の顔をジッと見て。何日も美くしいチと、煙管の頭で頬を突く。アッ、人が悪るいよと、突然その煙管を引奪つて。お前さんのこそ女を嵌める笑窪よと、頤に手をかけるを、木村は態と

ぢらして。ヘン憚さま、お惚氣のお門が違ひませう、鑛山大盡の北の方、浮氣の政所とはお前の事だが、近頃は何うだ、的が折々やつて來るかと、親指を見せる。いゝえ、先月なんか丸ッきり來やしない、淋しくッて仕やうが無いから、お前さん今度ッから、一寸〳〵來て頂戴な。來たいのは山々だが、私の身ぢやア忍ぶ戀路のさて果敢無さよだからナ。よう〳〵、意氣な聲が出ますチ、串戯ぢやありません、よ、ほんとうにいらつしつて下さいな。來るわ〳〵、來る〳〵廻る御所車か。おや、隅には置けないね、ほんとうですよ。はい〳〵、立寄らば大木の蔭だ、ねえさうでせうと交ぜッかへせば。お巫山戯でないよ、

餘り人を馬鹿にすると罰があたりますワ、それはそうとして、春やの準備は、何うしたのかと、呼び立つれども聲だに無し。おや未だ歸らないよ、妾淋しくッてと、膝立直して。お前さんアレをお覽なさい、お月さまさへ、相合傘ですワと、障子を細目に庭を瞰下せば、板塀越に不忍の夜の景色、油繪かとも思はれて、曇ると見ゆる空の色に、月も朧の磨り硝子、飜るゝ花の風情あるも、春の模樣を整へ顔なり。木村も直と伸び上りて。あァ明日は雨か、この分では私も何うやら根が生へさうだと、寐む相な欠伸を木の頭、合槌の鐘の音が、池の水を掠めて、陰に陽に跡を曳いて鳴り亘る。

（中）

人の身の盛衰は、浮世の波の潮の滿干、浮沈あり、榮枯あり、しかも水の流と、その行末を齊しうして、判らぬ中に苦の崖のあれば、樂の彼岸もありて、誰も彼も迷ひの舟の中洲に、今日を明日を憇らふ人心。こゝに禍福は絆へる繩暖簾をくゞる男も、根生への貧は稀にして、いつれも浮世の廻り合せ、貼り交ぜの屏風の中にも、黒繪に雅致ある乞丐のあれば、紺青胡粉の厚化粧して、世間を華美に粧へども、裏に廻れば、直垂に襷かけて、地紙折する公卿樣もある。總じて人間の上の、明日知れぬことは、今に初めぬ掟なれど、富む者は驕り、貧しき者は世

を味氣無む中にも、表面は極東の一紳士、木村良吉の女房お園の父は、本郷に一時は聞えたる富豪なりしが、根が一代身上の地盤左までに堅からず、近火に燒れて、その半ばを削られ、家督に死なれて、その二割を失ひ、今は唯七分三分の緊要といふ所を、手堅く締りつ、貸附の家作を、他人の薦にウカと乘りて新に建ちたる鵜會社の、新株に書き代へたるまでは宜けれ、固より山師のヤマ仕事、發起人だ重役だ監督だと、船頭多くして、船を山に登せたる揚句は、その筋より解散のお觸と共に、箱根以東の化物は七里骨灰、雲散霧消と姿を隱して、ツマリ正直の頭に神さまも宿らず、虻蜂も取らず仕舞の、辛き目に遇うて、

初めて浮世の味を咀み嚼め、漸う目を覺して、今は世を隱遁と乙に澄しつ、濁らぬ小川を門前に湛えて、塀の中には竹の根岸の一ト搆へ、御秘藏の娘を、朝夕の眺にして、園やそのゝやと林泉の趣よりも興がりつ、それ花、それ月、それ雪と、娘に着する晴衣裳に、四季の景物を染め出さして、春秋の花鳥風月もこの子には若くものなしと、朧夜の千金に値する、帶も小袖もオイそれと、ねだらるゝ儘に買うて遣る始末に、身代は思ふ程には延びず、詰まるは座食の果し無けれど、子ゆゑの闇の親心から、その上の慾には聟の撰り好み、商人は損する時を思へば厭、田舍の豪農、土臭うていやゝ、さらば高等官の御次男、そ

れは世間を知らねば厭やの、あれは厭、これはいやと、厭といふ字を、親子三人揃うて、一人の聟に三ッ宛もつけて斷る程ゆゑ、出雲も終には耳を塞ぎ、媒人も攻めあぐみて、先づは兵粮攻といふ姿、その中には娘の齡は老ける、貯金は次第に減る、渴しては東橋亭の寄席の戻りに、上野の鳥又に夜食の膳を濟して、家に淋しく待つ乳母のお土産にと、あひ鴨のタ、キを註文して、待つ間に下から上り來る大學生、上品にして勇ましき、流石は書生中の高い木の、風に吹かれてか、「寒い」と手を叩きて火を呼べば、煙草盆なり。火だよ〳〵と云へども、女中は聞えぬ振して、お誂はと問ふ。軍鷄で御飯ぢやと吩咐け、また

火を吳れと云へど、また〳〵知らぬ顏をして、電氣仕懸の昆爐を据へ、鍋を無作法に載せて引き下る、これが火かと厭味を云ひながら、螺旋をまはして鹽梅を試み。あァこれだから困る、いくら理化學が進んだからと云つて、軍鷄屋にまで電氣昆爐の應用されるのは閉口だ、この鹽梅では肉も無味からうなと、雜物の糸蒟を鍋にぶち撒け、煮え立つ間に四邊を見廻して、塗板の直段附を、關所の高札でも讀むやうに目を留め、素的に廉だなと一箸摘みて。やァ頗る硬いと顏を皺むるを、お園の父は最前から、その素振に目を注ぎ居けるが、物に頓着せぬ心意氣の男らしきにホト〳〵感服し、かゝる人達こそ卒業の曉には、

美事立身出世して、名を揚げ身を立て家をも起して、天晴世に用の多い人となるべしと、思ふにつけて慾目には、箸の上下、座臥までか蓼食ふ虫の好くにあり難く、何うぞして云ひ寄る橋のあれかしと、思ふ眼前の割下は、辭を交はす緣となりて、名處までも明し合ひ、圍碁といふのに名を假りつ、折々我家に呼び寄せては、娘は兎も角、兩親先づ男振から容子から、ゾッコン木村に惚れ込みて、聟ともつかず、嫁入さしたでもなく、名も曖昧の良緣を取結びたり。斯かりければ木村良吉は養家にのみ寐泊するにつれ、花園町の事は思ひ出さぬにあらねど、春は此方の花嫁に、色さへ香さへあるものから、お政の若葉も風情

無きにはあらねど、何を云ふにも榮華の囹の圍はれ者の、山の芋から鰻と變りて、身は手車の送り迎ひ、その後首尾能學校を卒業して、學士といふ肩書もつき、米國にも暫時留學して、一旦歸朝の晨には、資産もあり、名望もあり、まんざらでも無い學才ゆゑ、忽ち技師に任用されて、奏任六等といふ辭令書も頂けど、月給は其人の小遣錢といふ身の上には、少しは紳士風も吹かしたく、人並の贅も盡して見たき頃の、養父と同居の居辛らき儘に、西洋の例を小楯にとつて、父子別居說を實行し、夫婦は役所に近く、そして便利の好い塲所にと、そろ〳〵新橋にも足指を向けて、蕩樂の穴は嫁の親元で塞がせ、一家の兵站は

お内儀の臍栗で繋ぐ程なれど、遊びが巧手か、嫁には少しも知らさぬのみか、養父の手前は生子息の小兒同士を案じさせたりかゝる形勢なりければ、未だ一年と經たぬ間に、悪摺するまで垢も拔け、アノ色も妙ならず、コノ戀も乙でねえと、新柳二橋も大方に見切をつけて、さて其上で何か興がる蕩樂はと、車上に手を拱いて、青空に面壁の達摩大師を極めつ、悟つて見れば裏木に優る元園町の住居も、氣が鬱いつて面白からず、意氣で陽氣で通な所もがなと思案にあぐめば、朦朧と眼に浮ぶお政の婀娜姿、根が水を出て妾風情する程の女の、遊ぶには極面白く張があつて、俠で、ピンとした所に嚙み締めて味はあるなり。

燒木杭には火の點き易けれど、火種の無い戀を、また吹き煽す手練もがなと、考一考の最中、養父が卒中にて歸らぬ旅立を、野邊送して、さて一七日四十九日と、シャンパンも厭いた口に、油揚蒟蒻のお齋を賞翫するも、實は本家の腰を覗ふからの魂膽なり。根岸の家では主人の明星失せてよりは、世は常闇のかゝり舟、何うせうにも後家一人では舵のとり樣無く、横吹きに漕ぎつくる聟の逆櫓に、儲かる筈の約束の金も廢り、次第に左前となる頃は、猫も虎と化けて了得に温順なりし木村の、御見識も凄まじく、呼びにやつても迎ひにやつても、役所が忙しいの、來客が多いのと、本家の威光もハヤ地に墜ちて、學士

先生を吸收する力は無かりき。かて〻加へてその折より、去る頃までは交情好かりし夫婦中も割れて、夜も近頃は浮寐の巣守の、雌雄翼を襲ぬること稀に、曉は寒し增上寺の鐘の聲、冬は板橋の霜に冴えて、歸らぬ人の足跡を算ふるも辛し。その後木村の消息如何、隱れ首尾の面白きに、二人とも浮身を窶して、離れず放さずと深く嵌れば、味噌漉下ぐる女房は世帶染て興無く、家に歸れば玉簾の中の育ならぬ內君の、直ぐ算盤から割出さるゝなど、浮氣する男の我慢のなる所にあらず、またしても役所の歸りがけに、花園町に入浸りて、他人の物も我もの顏にいゝ人がる人情の犬にも劣れり。斯うした男の上役に阿諛巧手

に、仰いで見奉つる局長樣の鼻毛を、何十何本と打算して、これは斯うだ、あれは彼アだと、大林區署のお役人が、官林の松の木を讀むよりも老練に、八字の髯は生しても、蝦腰の如才無く、五斗米に屈するは伸ぶるの初と、ヘタクタお辭儀は大得意なり。

主義は內辨慶外味噌の男の、今朝しもお政の門を小さくなつて出て、我が家の門にはお歸り引のかけ聲を響かせつ、整々堂々と玄關より入込む口元に、せゝつこましき下女と、昨夜も亦泣き腫らしたらしき女房の、眼を紅くしたるを紅絹の片もて拭ひながら、お歸りさまと辭儀するに目もかけず、ヅン〳〵と居間

に通つて、窮屈袋を投げ退け、傍に疊んで出してある不斷着を物をも云はず引つ懸けながら、塗卓の上にある來書と新聞紙とを、手に任せて、讀みつ、投げ退けつ、ごろりと寐轉び、兩手を後光枕にして、天井を仰ぎ見ては、あァ詰らぬと嘆息す。お園は陰氣の大人敷く、夫の不機嫌を見てとれば、擴げ散らしある洋服を疊み了り、窃と枕を進むれども、狸寐入にそれを外して、青疊に頭を摺りつける。さらばと搔卷を裾にかくれば、脚を上げて蹴て退ける。朝餐はと問へば、鮮の聲のみ高くさして、虫ほどの應答も無く、用意にと臺所に立つに、文讀む聲して、眠れる人の目覺むるには早し。漸う料理し了へて、膳を彼

方に供へつ、呼び覺しても夢は圓なり。お園は寧そ悲しくなりて、我と我が部屋に泣きに行けば、俄に箸とり上ぐる音のして、拍手三つ四つ續けさまに打鳴らしたり。かゝる炎所も女子は女子のたしなみと、懷中鏡に化粧改して行けば、恐ろしき眼して、何故泣くと睨めつけらる。泣きはいたしませぬと手を支けば、泣かぬことはない、眼の緣がウルンで居るぢやないか、何が口惜しくて泣く、私を恨むか、歸宅の遲いのが氣に食はぬのか、泣く程のことがあらば云へ、十二や十三の阿孃ぢやあるまいし、二十歳にもなりくさつて、奥樣とか云はるゝ身で、メソメソ泣いて埒が明くと思ふか、馬鹿奴、酒を持て、今日は休暇だ

一日家で飲み暮らすから、ドシ〳〵燗をせい、夏は居らんのか、何故早く用事を吩附けぬ、奥様ともあらうものが、酒の燗まで自分でせんでもよい、夏を呼べ、夏、夏、手前燗をつけい、園は此所に居て酌をせい、何をぐづ〳〵して居る、亭主が怖いか、恐ろしいか、そんな氣の弱い事で、一家の締が出來ると思ふか、下女や下男の繰廻しがつくか、以前は地主様のお姫さまでも、今は理學士木村良吉の女房、一家も持て居れば、他人も大勢仕つて居るのに、一言云はれては泣き、二言云はれては泣きくさるが、手前の顔を見ると實に陰氣でならむ、後邊の障子を明けい、そしてこの膳の上の菜は何うだ、食へるものが

あるか、ウニ、辛子漬、鮒の甘露煮、それからしてこれは何だ、こんな不潔な、不衛生な物を食はせる外に、手前の腕では何か料理が出來ぬのか、觸賣の煎豆屋にばかり、何日も旨しい物のある譯のものぢやないぞ、少とは腕を磨いて、私の口に合ふやうなものを、食はして呉れてもいゝぢやないか、それも毎朝晩といふぢやなし、昨日も一夜昨も家には居らんよ、近か歸るとこの始末だ、これでよくも留守居が出來るな、それにあれ〳〵庭のアノ草を見い、何故あんなに生へるまで植木屋を呼ばんのだ、お出入を許して置くのは何の爲だ、屋敷内に草一本も生へさせまい爲ではないか、此分では天井から雨が洩つても構

ひつけぬだらう、手前をはじめ兩親までが、さうした魂性だから、アレ程の身代も、今は何うだ、よくも未だ根岸の屋敷を離れぬなと、出て行けがしの難題も、この年この身の今に及びて香露は蜂に吸ひとられ、花の色さへ移ろひ行きて、散りかゝりたる女の姿を、更にいづれに任すべき、風は無情あたるとも、一旦嫁してはこの家を、出でずと思へば口惜さに、湧き出るものは涙なり。木村はなほも怒り止まず。園また泣くか、泣いて女房の義務が濟むと思ふか、手前のやうな不埒な者を、よくも〳〵親達が私に賣付けたな、譬にも賣物に花といふが、手前のやうに年が年中、臙脂白粉で暮す奴もないものぢや、顔が大切

か、亭主が大切か、亭主には腐つた物を食はしても、白粉で塗り隠くせば、それで勤の濟む譯でもあるまい、手前は女大學で學問したさうだが、亭主を投り放しにしても、琴だ三味線だで暮らせと書いてあるか、手前の母親は町内での博識だといふ事だが、今川や、庭訓往來にも無い圖の、躾方を教へたものだなと、飽くまでも悪口ほざきて、ゴロリとその座に肱枕、寐轉びながら、小猪口に二三杯、手酌で續けさまに無理飲みして、醉を天井に吹くかと思へば、またもや思ひ出せるかの如く。園その、手前今から根岸に行つて來て呉れぬか、母親に用事があるから、手前直ぐ同道して連れて來て呉れ、いゝか、直ぐだ

〳〵、サア早く仕度をせむか、長いなア、またいつもの三時間請合か、この日の短いのに、ぐづ〳〵せずと急いで……と、二言目には腹立聲、お園は泣くよりなほ悲しく、その身の部屋に退きても、心は閭の血の池地獄、邪慳の鬼に酷まれて、明くる簞笥の錠前さへ、胸には燃ゆる緋縮緬の、顔に無念の色を添へたり、晴衣を出せば去年までは、旅よ物見と着飾りしに、今日は破鏡に映す身の、姿も振も淋し氣に、冬の初の白菊の、霜に醜るゝ風情すら、お園の憂を補ひ顔なり。

（下）

時雨の後の小流は、塲末ほどなほ冬枯れて、朽たる杭の落葉の

留るも淋しく、水は藍より青くして、小石にそゝぐ音も荒めり。土橋に深き木履の痕は、門の敷石を黒うして、自然と遠き人足も、時めける頃の世の樣の忍ばれつ、心も冬もさもしさの、裏を見せたる袖垣には、殘んの黄菊白菊もあり、庭の木の葉も散り敷きて、箒の跡に立つ鳥の、暮れ行く空に燭點す如くに、赤きを見する楓のみ、やり水の白きに栖して、夕の雲を照りかへしぬ。この夕暮もお園が母は、女中を庭に下立して、木の間に箒を入相の、鐘に見る〳〵暮れ行く冬の、東の空を眺め入りては、娘は如何に暮らし居る、流行感冒が蔓延といふが、若しも病うてなどゐはせまいか、同じ東京の内に居りながら、

逢はぬ中は何うやら案じられてならぬと、塒の鳥を見遣りても子を思ふ親の心のあり難さ。頓て日は曛れぬ。花も水も黒うなりて、家には燈の影も賑はしく、女中や乳母などの臺所に立騒ぎて、夕餐の膳拵へする樣も忙し氣なれば、雨戸繰る音のとゞろ〳〵しく、行く雲歸る雲の、まだそれと明るき方を見て、物思ふともなく椽前に立てば、悄々と入り來れる娘。おうお園か、此日暮方誰に送られて來たのぢや、ナニ一人、何は兎もあれサァお上りと、母は相好頽すまでに善びて。こゝへおいで〳〵、克う來て呉た、今も恰度お前の噂をしてゐたが、久しく見えないから若しヒョット病でもせぬかと、餘計な心配ばか

りして居る、だが噂をすれば影とは、よく云たものぢやないか、のうお園、お前御飯は未だらう、アレ何を云てるの、こゝはお前の生れた里だもの、遠慮せずとドシ〳〵御馳走におなりよ、けれどもお前の家邊とは違つて、邊鄙で田舍も同だから、御馳走と云ても、別にお前の口に適ふやうなのもあるまいけれど、乳母アに吩咐けて、乳母ア〳〵、お前何んぞ見繕つて、お園の好きさうな物を、二三品取つて來てお呉れな、幸ひ妾も御飯前だから、緩々世間話でもして、そしてお前と一緒に食べませう、庭も、今は冬枯なもんだから、紅葉も菊も大なしになつて、アレあんなに荒れてよ、お前が一昨年地藏さまの緣

日から買つて來た、アノ根松ヲ、あれが大層大きくなつた、今夜は八日月で、お庭があれ、アンなに明るい、こゝへ來て御覽な、此頃は庭掃除で大抵ぢやないの、今日もヲ、夕刻に乳母が掃いて呉れたんだが、またアンなに木の葉が散つて居る、しやうがないね、妾も斯してお庭を眺めたりなんぞして居るけれどヲ、小兒が居らんもんだから淋しくつて仕樣がない、お前其處ぢや冷えやしないかえ、早く孫でも生れりやいゝと思ふが……と、お園の顏をジッと眺めて、お前何故遠慮をおしだえ、夜分に遠方をよくマア來てお呉れだ事と、喜ばるゝ程いとゞ悲しく、泣くまいと思ふ心の、根が姫樣育の張も我慢も仕切ずなり

て、襦袢の袖を嚙み締むるを、母は怪訝に見てとりつ。おや、この娘は何うかおしのかえと、お園の肩に手をかけて、物に拗ねざる小兒氣を、案ずるも亦親の慈悲なり。よ、何故泣くの、お腹が痛いか、頸痛かと、泣き伏す顏に振かゝる鬢の後毛を搔上げ呉れつ、賺して問へども、なほ泣きて、袖の垣根に卯の花の、顏さし埋めて啜り泣く、姿も雨に惱める風情に、母は一入心を痛めつ。泣いて呉れるな、お前に若しも眼を病まれたら、妾は誰を便にしませう、年數の加減か、この夏時分から腰が痛み、目もかすんで、眼鏡が無くては針仕事も出來なくなつたよ、お前にこゝで病はれたら、この妾が何うならう、さ、さ、

機嫌直して泣く程辛らいその譯を、一寸なりとも話して呉れと母は泣かねど泣くより辛らく、氣强く見せて慰むれば、お園は漸う顏を擡げて。お母さん、いつも〳〵御心配ばかりかけます る、みんな妾の惡いから、勘忍して下さいませと、また泣き曇る空色の、羽織の波を震はして、時雨るゝ沖に千鳥の紋も、しつけの糸の亂れ縫ひ、小口の紅絹の色好きは、實に花をだも欺くめり。母は心も空にして。心配のなんのつて、お前こそ何をそんなにお泣きだえ、他人樣の目から見ての心配顏も、子供の爲なら親の身には大の樂しみよ、またお前小遣でも不足したのなら、十圓でも二十圓でも遠慮せずに云ふがいゝ、ツマリ此處

の身代もお前達二人の所有、何うせ入るものなら、何程でもお役に立てやう、さうして妾の手許が不足したら、その時にこそお前達二人の厄介になるさ、老いては子に隨ふといふから、妾は良吉の世話になつて、ツマリは孫の傅でもするのが寧そ嬉しい、だが、今夜は良吉も何故一緒に來ないのか、暫時逢はぬが別に變りも無いか、お園お前未だ泣くが、一躰何うおしだ、晩てからお前一人で來るのも變だのに、來ると其儘泣いてばかり、何うした譯か聞して呉れと、問はれてお園ば淋しき顏を擡げて。お母さん、口惜しう御座います、妾は宿に去られて來ましたと、また堰き上げて啜り泣くを、母は意外と膝押進めて。

ナニ去られて來た、去るの去られるのとは、良吉の方の上にある事で、お前は家つきの奥樣、そのやうな事は云はして置かぬが、昨日までも今日までも、中睦ましくして居た二人が、今夜になつての離緣汰沙は、深い仔細のあることだらうが、それは緩々聞きませう、また良吉が近頃の不身持、立身出世してからの心變り、お前のよく辛抱して居ることまで、略々聞いて居ぬではないが、それも孫でも出來たなら、小兒の可愛さに絆されて、また中も好うならう、身持の改ることだらうと、大目に見て居ましたが、お前に何の科あつて、離緣するの暇やるのとは、何處を押して云はれた口ぞ、えゝ、泣くな、時宜によつて

は、此方からこそ破談を申込むまいものでもないが、何を云つても長いものには卷かれる當世、それに先方は今が大分に羽振も好く、此方は次第に風向の惡るい女世帶、その弱身に覗け込んで、罪もない娘を酷むとは、人非人の犬畜生、それでも學者か、世の中には自分の名書も讀めぬ程の男でも、義理と人情は判へ知つてゐるのに、アノ學者顏が……えゝ、口惜しい、人を馬鹿にするにも程がある、學者、學者、その學者になつたのも、他人樣の上に立つて居るのも、誰が加勢してやつたのぢや、學者ッ、ナニアノ學者奴が歐羅巴だの、佛蘭西だのと、異國の辭までも覺えくさる癖に、これまでの恩は忘れて仕舞つ

て、知らぬ顔の半兵衛様が憎らしい、學者、學者、えッ學者様、今日のたつた今から學者様は厭になつた、のうお園、斯ういふ時にせめて父さんでも居て下すつたら、別に口の利きやうも、懸合やうもあらうのに、お前も女、妾も女の、あア女ばかりの役が立たぬワと、これも無念に啜り泣く。お母さん、もう泣いては下さいますな、妾も今日までは我慢に我慢をしてゐましたが、何うでもお氣に入らぬものならば、一旦お詫びをして歸りましても、この末が案じられるから、妾は一生お母さんの、お傍について暮したい、これからはモウ何處へも嫁つては下さいますな、一緒にさへ居る事なら御飯も炊きます、お掃除もい

たしまする、世の中に親許の貧しい位、嫁の氣の弱けるものはありませぬ、後生に妾をお傍に置いて下さいましと、一語一句も涙なり。母は身震ひするまでに、無念さ口惜さに聲も荒みて。泣くな、もう云つて呉れるな、アンな慘しい心の男は、夫ではない、聖でも無いぞ、同じく割れるものならば、子供の無いのが何より仕合、お前も今日からは思切つて、妾と一緒に住つて呉れ、妾もとつて今年が五十二、行末永くもない娑婆に、お前に離れて何を浮世が面白からう、良吉に吸ひ奪られたのは、未だ埋合せの出來る錢金だが、お前の身躰に若しもの事があつたなら、とり返しがつきませぬ、サア涙を拭いて、機嫌克

う笑つて呉れ、思へば思ふ程腹が立つ、モウ云ふまい、思ふまい、さァ〳〵これでサッパリと眼をお拭きと、絹手巾を取出して、お園に渡せば、泣いてなほ泣き腫したる眼の縁の、櫻の色に露置きて、吹かば溢れむ有樣なり。母は辭を他所に外して、お園、お前この庭を御覽な、筧に月の映つて居る工合、おう好い景色だと云ひつゝも、障子をあけて座に直り、頓ては夕餐の膳据ゑて、母とお園とトリ膳の、味嚙みあむる人情も、親子は愛も一入にて、睦み語らふ樂しみは、これや三國一なるべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

月日は早し、一歳の風光こゝに流れて、暫らくも止まらざる人

の身の、木村良吉はある意氣事筋の爲に、不面目に官を辭して野に下り、影を浪華に瞞して、大阪鑛產會社といふ、怪しの株屋の技師長となり澄しつ、曾根崎村に新宅を出來せる後、東京の噂は知る人更に無くて、矢張人は侍、鈕は櫻の花に大の字出のチヤキ〳〵と持囃されて、乘り出す毛車の緋の色は、當人が陰で出す舌の如けれど、其筋から人相書渡る程の罪の無い身には、德義といふものゝ社會の制裁脆きに甘んじ、何も知らぬ顏に髯を生して、閑話休題、シッポリと夜の雨の睦語は、何日も、權利ある女房に一歩讓りて、亭主三尺去つて婦の影を蹈まぬ迄の鄭重、今の女房の名を云はずとも、そんぢよ其邊の階子

酒、女の癖の泥酔を、またしても介抱に忠義なる影法師の、川添柳下の圓窓に映つて。おう危険い、お政〳〵、お前また夢に魅されたな、何うだ、これこの冷汗がサ！○（廿九年作）

子煩惱

（一）

世に塵拂ふ人の多ければこそ。髯蓄ふる者もあるなれ。流行として是非も無けれど、身に貫目も無い男が、八の字を捻ねくり、葉巻莨喞へたればとて、瓦は金に化すべきや、威嚴は其人の價

値ならば、鎧着て簑笠の代にもせよ。ツマリ虚飾の皮一重を引剝いで、裡一貫の男となり、三文にだも買手なくば、六道錢の出所は無くなるべし。駿馬の骨を買はずやと、昔の賢女が取越苦勞の代物も、開け行く大御代の難有さには、シヤボンといふ重寶のものになりて、却て美人の美を磨く道具となり、諸事廢物の無い世となれども、黄金縁の眼鏡に世界を達觀した顔の紳士の眼には、矢張花ある中が春なりと悟を開き、よし懐中は木枯の震ひ盡した中でも、絹布の衣を引ッ張、骸骨が花見をする顔もせずして、優然と肩で風を切り、ふかす煙草の烟には、鼻の下から雲の岫を出づる趣を見せ、己が容貌を飾る爲めには、

囊駝師の庭木を造るやうな考で、目尻を釣り上げ、眉を細くし、頬の凹處に糸薄を植え込みて、締の無い口元を、草を分け出る月に見立、天晴林泉の妙を得た心持するが妙なり、其上帽子も鍔の狹い、天井の平なのを選んで、天窓の上に占領地でもある氣で居れど、實を云へば寸土尺地も身に着いた不動産は無く、名のみ糸扁に申の字と呼れたさの僭上から、三日御前の一雨毎に殖える今日此頃、別莊沙汰の盛んなのも、無理ならぬ次第なり。

相州鎌倉で若し八景の勝を撰まば、別莊の夜雨といふ名が、必ずその撰の中に入るべし、山と云はず、溪と云はず、少しの空

地だにあれば、名も知れぬ紳士の本宅兼帶の別莊建てゝ、借金の遁場に充て、江戸の仇を長崎で、討たるゝまでの生き延び處とする程なれば、松風村雨を聞く風流氣は微塵も無く、先づ琴の調を几帳の蔭で聽くよりは、耳近い三味線こそ興あれと、首の白い魔性を捉へて、美人湘簾を捲くの圖と洒落るも可笑し。

さる程にその界隈の人氣大に荒みて、田舍者の質朴無く、たゞ腰を屈めさへすれば、金錢は得らるゝものに心得、一寸客を呼ぶにも、貴君樣でよい名をも、殿樣などゝ勿體つけ、直に兀げさうな輕薄笑ひに、鐵醬の兀げた前齒を露して、媚を萬人に賣る掛茶屋の老婆もありき。

長汀白沙に磯馴松をあしらひたる景色は、光琳の繪にも見ぬ眺望ぢやと、爵位の高いお殿樣の贊辭を、眞帆に風とうけたる茶屋の媽が、鬼に鐵棒といふ見榮にて、望遠鏡を据えつけながら、今しも入り來たれる一人の客を見かけて。親方お久し振、大分お見限りですねと云ひつゝ、床几の端に尻落付けて、膠の詰つた煙管をヅウ〳〵吸付け、サウ御一喫と突きつける。親方と云はれし男、年の頃は四十八九、勇み肌の色は黑けれど、憎からぬ口元あり。鼻は高きも、ギヨロリとした眼に凄味ありて、人相から云へば、何うやら賞めた顏でもなし。鳴海の浴衣に三尺帶を尻からげにした鹽梅から、胴亂擬の煙草入を見よげに下げ

し樣子は、親方の名に適役なり。親方は煙草を指の頂で捻くりながら。コウお內室さん、噂でも聞いたらうが、お前に喜ばしたい事があるんだと、媽の顏を覗き込み。ねえ、モウ知つてるだらう、ナニ知らねえつて、お前にも似合はねえぢやねえか、お房の一件よ、アレが何うしたつて、話せねえナア、材木座のお屋敷に上つたことをよ、知らざア云つて聞かさうかと誰やらの身振をする。見つともないからお止しよと云ふ横槍を、親方は尻目にかけて。實はそれお前も知つての通り、あの阿魔も泥醉漢につけて置いちやァ、何日までも有達が上らねえから、厭だ〳〵ッテ云ふのを、無理やり引取つて、お殿樣へ差出したんだ

がね、第一己が氣味の好いばかりでねい、阿魔ッ女が仕合よ、あァやつてお屋敷に上つてさへ居りやァ、お后も同樣活計歡樂何一つ不自由は無し、己らの米櫃もがたつく氣支ひは無いしさ、これからは此方の世界だ、ねえお前。氣味のいゝ話ぢやねえかと、自慢氣に云ふ、折しも一人の生醉、酒氣を芬々と匂はしながら、此方へ蹣跚來かゝりぬ。親方は早くも眼をつけて。あァまたやつて來た、逢つちやァ兎角面倒だから歸るぜ、あれあれァレを見ねえな、アレだらうぢやねえか、困つちまう、アンな泥醉漢をお房奴何がいゝつて纏いて居たんだ。お花坊がある からよ。お花坊、實は己らァノ餓鬼の仕末にも困つて居るのよ

お內室さん、左樣なら、また來るぜと、裏口から遁げ出せば、戸口に咲ける南瓜の花に、夕陽のかゝるも眼眩かりき。

（二）

沖の千鳥の翼より先つ暮れ初めて、海の面に薄隈を彩り、歸帆の影を黑めたるまゝに、霞となり、靄となりて、果は波のうねりの見えずなる頃は、日は全く嘿れきりて、八日あまりの月は出でたり。夏ながらも濱風涼しく、捨てある儘の小舟には、塒を忘れて止まるか、一羽の烏の袞るも見えき。月明に透せば、磯馴松の二株三株、若葉の蔭に立續く漁家は、七寶燒の墨繪にも似、岩に碎くる波の色の、雪を班に置けるも凄し、この物淋

しき夜の景色に、往き來ふ人もあるまじと思へば、怪しや物蔭より年の比は、十歳あまりにもなるらむ小娘の、一人磯邊を徘徊するあり。

夜目には確と判らねども、虎班絞の單衣を着、帶といふも名ばかりなるメレンスの、破れたる細きを締ぬ、顧ふにこれは母御の仕立直しなどの、雜巾にせんよりはと斯くも纏はせけるにや、色は黑く、脊も高からねど、眼と口元とに愛嬌ありて、何となく娘らしき優しき顏なり、太き緒の冷飯草履を引摺りて、波打際に走せ行きては、砂地に尻を落着けて、見るともなく海の面を見詰めぬ。

この幼き女の兒の、日の嘆れたるに、何故に家路には着かざるか、詩の意味など知れる男ならば、月影の波に碎くる夜の景色を面白しとも見るべく、未だ物の哀れをだも得知らぬ幼兒の、果知らぬ海路見渡しても、如何はかりの興味かある。されど幼兒の、眼は波と月とを見比べて、何となく物淋しげに打嘲ちぬ。

いや〳〵、何うも家に歸るのは厭だワと、微に獨語て、眉を顰めつ。あア面白くない、家に歸ると、またお祖母さんに叱られるから、いつそ此處に何時までも斯うして居やうかしらと、何心なく手を伸して、眼前に落ち居し帽子を引寄せる。あらいやな、麥藁帽子の破れたんだ、妾は何かと思つたらと、云つて尻の

下に敷き、その破目を拵りながら。い〻敷物だこと、家の布團よりかい〻ワ、オヤお尻に土がついた、着物を汚とまた叱られるから、恐い〳〵、この帽子なんか破たつて構やァしない、誰が忘れて行たんだか、これを斯う敷いて、この上に斯う寐轉ぶと、着物なんか汚れやしない、ホントウに此處がい〻ワ、涼しくつて、蚊が居なくつて、そしてお祖母さんも居なくつて、妾何時までも居やうかしら、いけないや、お腹が空くと困るワ、何うしやう、早く歸らないと、また叱られて、今夜の御飯を食べさせられない、いやだ〳〵、妾お母さんを欲しいなァ、お母さんは、何故妾とお親父さんとを棄て〻行つたんだらう、酷い

よ、あんまりだワ、お親父さんはお酒に醉つたくれてばかり居るし、お祖父さんとお祖母さんは、妾を殘酷てばかり居るよ、あァいやだ、學校へ行きは行つたけれど、大勢して妾を虐めて、やれお前の親父は泥醉漢だの、やれお母さんに棄てられたの、お祖父さん處の居候だのッて、ホントウに厭なことだ、何故妾のお父さんや、お母さんは妾を可愛がつて呉れないのだらう、妾はお母さんの見ぢやないのか知ら、お隣家のお松さんなんかは朝寐をなすつても、お目覺の菓子を貰うし、髪を破したからつて直ぐ結つて下さるワ、學校から歸りが遲いと、何時でもお母さんが門口に立つて、待つて居て下さるけれど、妾の

お母さんなんかは、妾を棄てゝ何處へか行つて仕舞んだもの、いやだ〳〵、こんな髪なんか破れたつて構やァしない、お祖母さんが結つて呉れなきやァ、學校へも行やァしないワと、亂れかゝりて、埃に白み、垢に汚れて、油氣もなき銀杏返を、根元から攫んで解きにかゝり、弗と何事にか氣の移りけん、低れたる顔を擡げて、隈なき月を眺むれば、態とらしき村雲に、半面の影を隠して、長谷の邊は黑うなりぬ。やァお月樣がと、初めて月に氣のつきしか、珍らし氣に失神して、彼方の空をうち見やれば、觀音の山は影になりて、闇より燈の火光を洩らしぬ。あのあれは觀音さまの常夜燈で、下のが太兵衛さんの家で、そ

の隣家がお松さんのお家で、そのまた隣はお祖母さんの家、おういやだ、遲くつて叱られやァしないかしら、今頃歸るとまたお祖父さんがお酒を飲で居て、種々な事を云つて妾を泣かせるんだもの、歸りたくない、だけれど早くお飯を食べたいナァ、お飯、ホントウに早く食べたくなつた、行かう〳〵と、立つては見たものゝ、急がうともせず、袂の端を口に啣へては、厭さうにして歩ぬ。折ふし月を眺めては、お月さま幾歳、十三七ッ未だお年は若ァかいナァ、おや、十三と七つでは、お母さんよりか七つ下だワと指を折つて見て。あァお母さんを欲しいなァと。行く〳〵長谷の町に入れば、何となく自然と眉の顰て、優

しき顔も淋し氣に變りぬ。

（三）

子飼となれば犬猫さへ可愛きに、如何なる天魔に魅入られけむ、現在の孫を畜生扱ひの虐き仕方を、世間の人も見るに見かねて、温め諭すことなどあれど、糠に釘程の利目もなく、夫婦しての責折檻に、伸ぶべき新芽も、寒さに縮て、脊も低く、躰も細りて、餓鬼道に落ちたる亡者の、牛頭馬頭に殘虐るゝ如く、未だ十歳にもならぬ幼兒の、浮世の味を覺えて、他人を疑ふ心の深うなるにつれ、いよ〳〵可愛がらるゝ道に遠くなりて、何時も祖母が笞の下に、手をからむ牽牛花の蔓となるお花の身ぞ憐れ

なる。

祖父といふは長谷の仁右衛門とて、若き時は大垣邊にて棟梁までもせし大工なりしが、仲間のウケの善からぬのみか、部下のアタマを刎ねしことの酷かりしより、その遺恨をうけて、已に鉞の下の露と消えなんとせしを、運なればこそ告ぐる人ありて、未だ夜明前の薄暗がりを便り、遁げ路を求めて、さして目的は無けれども、手職のあるを頼みになし、この鎌倉に流れ込みて、古寺の手入などに聘ばれけるまゝ、半年餘りも過ぎけるに、今の女房がその頃長谷の豆腐屋の後家に入りて、一年も經たざる間に夫に別れ、三歳ばかりの養女ある家に入聟し、富ま

ぬながらも一家の主人となりて、一生懸命に働きしかば、女房にも好かれ、養女にも懐かれて、身代も自と延にき、歳月は鉋かくるともなく、一皮づゝ剝けて、お房といへる娘の、玉を磨けるやうになれる頃は、はや十餘年の昔とはなりぬ。左まで可愛くはあらぬ子なれど、養父となりては世間の義理もある事と媒妁する人のあるを幸に、雪の下の長太郎とて、左官仲間での賞められ者をお房の聟に貰ひ、仁右衛門夫婦は樂な身になりぬ。

花嫁花聟と呼ばれて春らしく暮す間は短かくて、姿も心も若葉の夏と、齒に鐵醬までも塗り、紅にも白粉にも氣の措けずなる

頃は、頓て子も出來、川といふ字に寢る程に、風波の起るべき事も、釘鋲に羈されて、夫婦の間は一入濃く、姑との中も孫に和ぎて、笑つて送る日の多かるべきに、血を別けし親子ならぬ證據には、嫁と聟との間睦ましきにつけて、法界悋氣といふものもあり、且つは赤兒一人殖えては、活計向にも差響かんかと、己が寐酒の減ることを苦にすれど、孫の愛などは露しも起らず、斯かれば互に腑に落ちぬ事の云合ひより、双方自暴て酒の量も過ごし、糊口の道も漸くに薄らぎ行けば、家内に敵と味方を作りて、旗色を爭へる後は、分家の沙汰となりけり。

長太郎は憤怒の餘に家を分けて、お房お花と共に住み、その當

座は神妙に働きけるが、飲までも濟むべき酒を好きけるより、酔に任せて賭する友にも打交りつ、日毎に賽の目を競ふやうになりては、手職の鏝は手につかで、負けて明ける借金の穴を、覺への技に塗り隱し、果ては女房子の衣換までも賣代なして、一と六とを爭へども、運の向かでや勝つ日は少く、次第に負けて、今身動きもされずなる折、二束三文と思ひし屋敷の、家附五百兩ばかりに買ふ者あるに勇み立ち、惜氣もなく其處を離れて、扇ケ谷に借宅せしが、生身の金の何時しか腐りて、酒と賭には女房も可愛くなく、子の愛にも目は屆かざりし。

長太郎の不行跡に、行末の見込なしと目を注けたるお房の養父

母。あの儘にして詰りは年若の娘の喰物にされんよりは、お人好しを餌にして逸早く老後の米櫃を作らんものと、東京の何とやらいふ會社の社長が、別莊の新築と共に必要なるは圍ひ者、土地の美形も風變りて妙ならんと、人して探し索めらるゝ事を聞きつけ、何うお房を欺き負せしや、お目見えにとて連れ行きしに、以ての外のお氣に入り、直にとの御意にあまへ、泣いて斷る娘を無理に暇とらして妾の口に嵌め、二人は猫足の膳に松魚の刺身を賞翫して、福德の百年目と鼻を匐かしぬ。

斯くなれば義理にもお花は己等が引取りて、育てゝ遣ずばならぬ義理となり、長太郎の酒に亂れて腑甲斐なきに覘け入りて、

それを無理槍に連れ來、表向は學校にも遣り、相應の衣裳も着せたれど、裏は苛責の笞を與れて、身に生疵の絶ゆる日はなし。

樂みは夕顔棚の下涼みと、仁右衛門は椽側に薄緣敷かせて、夕餐の膳に一本載せ、便々たる腹を叩いて、嫣ァ月が射して來たといふ。おや、美くしいこと、恰で畫のやふだ、斯うなつて來ますと、蚊遣火はいらないやうですね、折角のお月さまを、挽屑で燻すやうなものだといへば、仁右衛門は可笑くも無い事に笑ひ興じて。ホシにさうだ、お月さまだつてさう煙つたくされちやァたまらねえのに、お前餘まり酷過ぎるぜ、何をつて、お

花坊を虐めやうがサ、世間で好くは云はねえから、モ少とお手和らかにしねえな、彼女だつても女の兒だ、成長なりやァ、米櫃になるかも知れねえ、鷄でも雌は卵子を生す、少たァ面倒も見ておやりよと、異見顔に云ふに、また始まつたと女房は蚊遣を煽ぎながら。お前さんは醉ふと愚痴ッぽくなるよ、アンな女を誰が可愛がるものか、厭なこつた、アノ女の面ァ見るのも厭だ、今夜ッてい今夜は、今以て歸らないぢやないか、アノ位な目に遇はしてさへも斯うだもの、お前さん甘口でもかけて御覽なさえ、手にも足にもおいねえ阿魔だと、語り合ふ處へ歸り來るお花、門口から窃と入て、闇に潛みつ挨拶しぬ。女房はそ

の姿をチラと見るよりも、怒氣滿面に迸り、額に青筋蛇の如く現はしつ、手はワナ〳〵とうち震ひて、膝をお花の方に進むるよと見る間に、襟髮掴みて手洋燈の前に引寄せつゝ振上ぐる煙管の下に、死せるが如く縮まれる小娘の腰の邊を、骨も碎けむばかりに擲据えぬ。了得の仁右衛門も小氣味惡る氣に、媽ア恕して遣れと云へば、女房は火に油を注げる如き勢もて。いえ、聞きません、ずう〳〵しい阿魔だ、この日暮まで何處に何ううろついてやがるのだ、えッ妾の事を種々に云ひ腐るな、そんなに家が嫌ひなら歸つて來るな、出てうせろと、足を蹴立てゝ踏み蹂る、お花は苦痛に聲も涸れ、たゞ涙のみ瀧なして、疊

の塵を鎮むめり。仁右衛門は德利の底を滴んで見て。あア、今の騷ぎで醉が醒めた、媽アモウ一合燗けて吳れ、面倒なら冷でもいゝ、ナニ無いつて、これは閉口だ、私にまで飛沫は酷過ぎるぜ、あア恐い〳〵、媽ア大明神樣々、アハ、、、、、お花坊早くお詫びをおしッてことよ。

（四）

匈奴に昭君を索めずとも、圍はれ者の果敢なさは、唐の古事も其身につまさるゝ種なるべし。されば女の身を珠玉に譬はゞ、よしやその姿は卞和の珠ならずとも、日髮日化粧に顏を粧ひ、餅玉も瑪瑙の珠になれかしと、萬づ摩り研きに心つくるものな

れど、お房の身の上のみは、性來の美玉が却て不仕合の原となり、厭きも倦かれもせぬ間を、生木の斧と引き別けられて、竹に繼木の姫小松は、枝葉繁れど氣は引立たず、日毎夜毎に夫の上や我が子の上を思ひては、枕の下は涙川、掬む人もなく泣き明す、一夜を千代の思ひ草、くさ〳〵すると胸に手を、あて〻動氣を鎮めては、その手を其處に置忘れ、寐て見し夢に魅はれて、恐きは人の心ぞと、怨んで見ても打明けて、話す敵もあらぬ身の、膝は思案の置き所、えい自烈體、雨さへ横に吹き込むかと、障子憎さの今朝までも、夢の遺場の八ッあたり、戸の開閉も疎暴に、怒氣を仕打に移しけり。

雲の峯頽れて、白雨颯と降り來れば、今までの暑さは洗ひしやうに瀟洒して、圍ひの中の燒くるが如き白沙を冷し、植込みの松には漕々と音させて、車に根を洗はせたり。

雨霽れて夕陽物干に明く、捲きたる簾を半ば下して、庭石の乾き行く樣を餘念も無く見惚るゝはお房なり。野末の菊とはこれなるべし。仁右衛門が娘としては、鳶が鷲を育てしとの嘲も妨ぎ難く、谷七郷にも之に續く美形はなく、長太郎が妻となりて、世帶に窶つれ、貧苦に痩せたりし時だにも、他人の目に着きけるを、今は紳士の圍ひものとなりて、黑板塀の中を其身の世界と定め、濱風にもあてず、日にも照れず、一週に一度妹が

り來給ふ折の外は、毎日の用事は磨り研きのみに追はれて、朝夕の行水、身中から御光も射さんばかりの美くしさ。衣は絹布を引摺て、帶も金糸に縫はせたり。兵庫とやらの髪に襟を透して、磨きて玉の如き肌を見せ、薫き込める匂ひ物に男の鼻をどきつかするも、色めける樣子はなく、奈良團扇に襟元を煽ぎて、掾の柱に身をよせながら、來る人を待つ風情もなくて、失神と外の方を眺めやりぬ。

かけ隔てたる山里ならねども、松の聲のみ聞き馴れては、風吹かぬ日の淋しさに、端近う立出でゝ、暮れかゝる泉水の闇を覗くに、何時の間に燈籠の火のちらつきてや、池の鏡に影を映す

もいと涼し。籠は置かねど、虫は自然と啼き喞きて、夜の雲は靜かなり。

お房は云はず、笑はず、物思はしげに柱に凭りて、深くも愁に沈む樣なり。そも何を思ひ屈するにや、この美くしき家に居、この美くしき衣を着、それのみか此上なき美食に飽ひて、世に不足も無かるべきに嬉し氣なる顏もせず、興あり氣の面地もなくて、血色日に〳〵褪めつ、美貌は漸うに衰へ行くのみ、斯からばば如何なる深愁かある。

あァいやだ、いくら美い衣裳を着たつて、いくら美い家に居たからつて、少とも嬉しくは思はない、お花は何うしたか、長さ

んは、何うしなすつたらう、あんなにお心良い方が、酒の故であんなになるものかしら、あゝ恐い、何うかお酒を廢して下さるといゝけれど子、實は長さんが確乎して下さらないと、お花が可哀相だ、聞けば此頃はお祖父さん家に居るさうだが、どんなにか酷い目に遇ふかしらん、一寸でも逢ひたいけれど、居所は知るまいし、行く事もならぬ、こんな不自由な事はありやしない、お妾なんッていやな、旨い物を食たからつて、斯う心配ばかりしては、少とも身になりはしない、旦那は妾を信切にして下さるけれど、その優しくされるにつけて、長さんに若しこの信切の萬分一もあつたならと、思へば猶のこと忘られない、

矢ッ張蛙の兒は蛙の子で、妾とは不思議に氣が合つて居た、旦那が金があるからと云つても、それが妾の物になるぢやなし、それよりか長さんのお心さへ直れば、また夫婦間を好くして、共稼ぎでお金も溜めやうし、お花も可愛がりませう、あァ妾は何故こんな處へ來たのだらう、いくらお父さんのおつしやる事だからつて、餘の事とは違ふから厭だと判然云へばよかつた、口惜しい、妾は屹度欺されたんだよ、お妾なんて人聞きの惡るい、妾は何うしても長さんの女房、お花坊といふ立派な兒まである中だ、あァいや、妾は何時までこんな所に居るのだらう、早く鎌倉に行きたい、お父さんとお母さんは何う妾の身を極め

たのか、こんな蟬の羽のやうな薄い衣物を着て、天人の眞似なんかして居たからつて、長さんも居ないし、お花も居なくつては、ホントウに厭になるよと、ホロリと涙を溢して、我ながら氣のついてか、オヤまた涙が溢れた、いくら泣くまいと思つたつて、泣かないで居られない、口惜しいのと悲しいので、涙が溢るれワ、何うしたつてこんな事になつたんだらう、人を目見えだと云つて連れて來て、それなりに圍ひ者にして仕舞つて、そしてこの東京へ連れて來てサ、あァいや、お花に逢ひたいなと、袖を顔にあてゝ臆面も無く泣き出せしが、人の跫音に肝を冷して、慌てゝ泣顔を押隱し、懷中鏡を取出して、白粉紙で

眼の端を拭ぐふも、妾の身の是非もなし。梅といふ女中は、拔足してお房の背をポンと叩き。お房さま、お喜び遊ばしませ、情人から電報……がと冷かせば、お房は眼を圓くして。情人つてナァニと眞面目になるを、あらお房さま厭で御座いますよ、眞面目におなり遊して、ホ、、、旦那樣が今夜ゐらつしやいますつて、サァお奢り遊ばせ、今度は屹度黃金無垢の根掛かなんかのお土產で御座いませうと、油かけらるゝ程口惜く、お房の眉はまたキリッと昂りぬ。

（五）

二一天の美祿。これがあつての世界ぢやと、醉ふ時の鬼も、飲

まぬ日の佛か神か、根が人柄の男だけ、胸の御托を自暴飲みの酒を力に賴光が、甲の目票ある家の、前と云つては素通りも、奈良茶碗で煽る梯子飲み、前後不覺に醉ふ時は、路の傍でも檐下でも、搆はず眠る狂ひ獅子、牡丹畠を荒したとて、村の男に叱られては、何時もお房の言譯に、その塲はやつと濟しても、澄まぬは末を思ひ川、子の成行を案ずるだけ、可愛さいとしさ未練さに、何うも男が捨てられず、泣いては見れど笑ふ日の、嬉しい首尾もあればこそ、醉つても怪我の無いやうと、男の出先案じては、搜して覗く恩愛の、羈にからむ繩暖簾、正體無いを扶けつゝ、家に歸りて藥よ水よと、騷ぐも醒めし曉に、苦勞

かけたと一言の、お禮の辭聞きたさゆゑ、苦勞に苦勞を忍びたる、その信實も水の泡、養父の罠にかゝる身の、心も汲まで男氣に、一徹短慮の怨み言、それからまたも自暴酒を、飲み過してはは子の愛も、夏來にけれど古袷、垢と虱に汚れつゝ、見るさへいぶせき有樣を流石に仁右衛門堪えかねてや、お花を家に引取りたれど、佛の棄兒を鬼が育てゝ、物になる日を待つなるべし。

十五から酒飲み初て今日の月、變らぬ月に變る身の、今日を怨まん樣もなく、姿を影に曝し行き、耻も世間も無くなりて、衣はボロ〳〵虛無僧や、菰にも劣る破れ單衣、けふ九重に匂ひあ

る、汗と垢との瀧縞に、帶は若芽の古錦、花は無けれど柳の都昔の態は無くなりて、長太郎とも長さんとも、名を呼ぶ者を夏の月。アレ見やァがれ、お月樣さへ丸裸だと、片裸脱いで寐轉べば、褥に代る夏草や、武者どもの夢ならで、羅漢か左官か譯の判らぬ、怪しの者の臥床となりぬ。

清風明月夜はやゝ更けぬ。更けて聞ゆる虫の音は、露を重氣に啼き唧きて、木蔭の闇に置き迷ふ、栗の床を我物顔に、眠り轉けたる長太郎を搖り起す小娘あり。

お父さん、お起きなさい、こんな處に寐て居ると風邪を感く、見つともないから起きて下さい、夜が更けてこんなに露が落つ

たぢやないか、おう、いやな蚊藪、蚊に喰はれて血が出るゾ、サァ起きてお呉れと、肩端に手をかけて、震り起せども正躰なし。しやうが無いね、こんな路傍になんか寐轉んで、狆犬のやうだ、おう汚ない、犬の糞が、あら恐い、蛇の死んだのなんかあると、手を引き、袖を引いて、扶け起せば、長太郎は夢我夢中に眼を圓して。やいコン蓄生、私を起すのは誰だえと、拳を堅めて擲らうとする。お花は振上げたる腕の下を潛り、月に透して顔を父の眼の前につきつけ、お父さん妾だよ、妾だつてばえッ判らないノ、お花だよ、こんな處に寐轉んで居ると、お巡査さんが來ます、サァお祖父さん許へ行かう、風邪を感くと

いけないからと引立つれども動かばこそ、其儘其處に寐轉ぶ機會、お花も轉げて尻餅つき。お父さん、痛いぢやないかと、腰の邊に縋りつけば、長太郎は現の際の高笑ひ。ざまァ見ろ、祖父許の娘になどなりやァがるから、痛い目を見るんだ、一抵手前は誰の子だ、親を棄ると天罰があたるぞと、肱枕して鼾を作るに、お花は俄に泣き出して。誰の子だつてお前のぢやないか、お前妾は可愛くないのかえ、お父さんが可愛がつて呉れなきやァ、妾は日本一詰まらないぢやないか、お父さんいやだワと、年數に似氣無い言振も、辛苦がさする業なるべし。長太郎は未だ熟睡でや、左も蒼蠅さうに聲を張上げ。いゝッてことよ

私を怨む位なら、お母さんに嚙りつけ、お前はお房奴に棄てられたぢやねいか、私が厭ならお母さんの許へ行け、東京へ行て妾のお母さんの居る處は何處だつて聞いて見ろえ、大金持のお妾さんになつて居らァ、お前が尋ねて行たら、何んなに可愛がつて呉れるだらう、お前は好いお母さんを持つて居て仕合せだが、己ァ薄情阿魔を脊負込んでこの醜態だ、こんな醜態をさせやがるも、誰がしたのだ、皆なお前のお母さんぢやねいかと、醉つて居ても、遺恨の舌は滑に娘に喰つてかゝれば、お花は寧そ口惜がり、母の去つたを我が故と、云はぬばかりの難題に泣くより外に詮術あらで、涙を袖に浸しては、鼻つまらせて伏

し沈みぬ。

夜更の風のざわつきて、月にも雲のかゝる時、誰慰むる人も無く身の薄命を嘆いても、物や思ふと問ひ呉るゝ者も渚の捨小舟、とり着く島も無きまゝに、人目搆はぬ獨言、獨り辛さを紛らしける。

あァいやだ、妾は何故こんなに可愛がられないんだらう、お父さんもお母さんも、妾を敵の子でもあるやうに思つて居るよ、詰まらないなァ、お祖父さん許へ行くと虐められるし、親には棄てられるし、これから何うして生きて居やうと、我が成行を苦にしては、力と頼む父親の、正體無いを口惜がり、縋りついては泣き沈みぬ。

斯くても親と思へばこそ、案じて覗く父の顔、こは如何しけむ、口よりいたく泡を出して、苦痛に惱むか、ウンと苦叫の一聲高く、拳を摑み足を上げ、轉び廻れる俄の重症、お花はたゞ呆るゝのみ、水も藥も野末の床にある筈無ければ、聲を限りと呼ぶばかり、梟の聲に凄さを添えて、夜更の風の颯々たり。人や居らぬか、水など無きかと、四邊を見れば月冴えて、犬の影だも見えざりき。斯くては父を見殺しに、殺すも知れずと走りては、後に心も殘る鐘、一ッは陰に打沈みて、またも哀れを添ふたりける。

折もよし、時もよし、遠くの杜の木陰より、夜行巡査の角燈は闇を破つてちら――ちら。敏くもお花の見つけてや。助けて引助けて引、お父さんを助けてと、生死流轉のこの一言は、天地の眠を呼び覺して、杜には反響、梟は音を止めて、たゞ寂たり関たる荒野の外に、命と叫ぶ小娘の聲又聲。

（六）

如何に世にある人の而白ふ見るらんと、最明寺の喞ちたる雪の日を、用無き身の置炬燵にもぐり込み、道明寺を女中に鹽梅させて、窓から覗く下駄の痕、二の字は先刻つけた儘、殘れる上に積りてや、庭木に降れる鹽花も、咲くかと見れば春めきて、

無人勝なる別莊は、雪に陽氣を增したりける。

只見れば何の苦もなき妾宅は、黑板塀に見越の松、門の柱に銘打たねど、意氣な年增の世界とは、地圖に引いても植込みの、木の葉隱れの敷寄屋窓、暗きを見榮の結搆も、何暗からぬ權門の、人目を忍ぶ隱れ家に、圍はれ者の果敢なさは、金の威光にけをされて、日陰の田鼠の、戸の口三寸出たることなし。

錦着て牢屋の人に似たるかな、帶は金糸に光れども、石や瓦に劣りたり、釵に玉を着けたれど、玉の碎片にも若かぬべし、たゞ徒らに寐て起きて、機嫌氣褄をとる事の、外には何の用も無く、爪彈きの三絃、忍び琴、主人の留守を鬼の居ぬ、洗濯時と

心得て、自と降る自墮落も、身から出でたる錆ゆゑに、何日か愛憎も月夜の釜、拔かれた揚句は秋風の、扇となりて捨てらるゝ、末を思へば厭さも厭なり。

花ある中は蝶も來む、袖に涙のかゝる時、他人の誠の奥底も、明けて語らふ身の上に、女中も共に貰ひ泣きつ、左樣した譯ゆゑお屋敷へ、來られし身かと氣の毒がり、何うぞしてお子さんの御安否、御亭主の御樣子をも、探ぐつてお知らせ申したいと弱きは他人も憐れむべし。

降り敷く雪も一トしきり、風歛み寒さも薄らぎて、小歇みせる間に、庭の雪見と酒落ませうと、女中の元氣に引き出されて、

お房は緣側に腰うちかけて、その松の雪を下してお呉れな、大層枝が垂れたぢやないか、そんなに亂暴にして、枝を折ると旦那樣に叱られるよ、あらいや、お前雪が此方までかゝるぢやないかと、袖を顏に翳して、じッと向ふを見る樣子、艶なり、美なり、麗はしゝ。貧富は垣根の裏表、內の樣子に引かへて、外には寒さに凍ゆる乞丐。おう寒い、お腹が穴いたと云ひつゝ、伸び上つてお房の別莊を見上げ。宜い家だな、こんな家に生れた子供は果報だ、妾も未來には斯ういふ立派な家に生れませう、だけれども斯ういふ家に居るために、亭主も子供も打捨つて難儀させるお母さんがあるかと思ふと、富貴な家の人は薄情か

も知れない、無慈悲な事をするものかも知れないワと、寒さに齒の根も合はぬながら、身を縮めて門の廂下に屈み居る、お房は門の外に人ありと心づき、扉を細目に覗き込めば、人心地も無氣なる女乞食の十歳ばかりなるが、門の柱に縋り着いて、寒さと飢を我慢し居る樣子に、女中はいたく氣の毒がりて。あれ御覽なさいと、お房にも見せぬ。お房は何心なく、戸の隙より眺め遣るに、これは如何、お花が成れの果なりけり。

お花坊かと口まで出でしが、今更身分と外聞の恥かしく、落ちかゝる涙を嚙み締めて、その樣子をうち見やるに、誰が縫ふて呉れし布子ぞ、雜巾にも劣りたる襤褸の上に、金巾の帶をゞめ

この雪道に藁草履、足は凍えて赤く腫れ、髮は雪に舐られて、水を浴びたる如くなり。餘りの事に呆れ果て、辭も無くて見惚るゝを、女中は早くも察してや。お房さま、可愛さうにこの寒さにコノ薄衣、お臺所で火を焚て暖てませう、貴女樣は部屋へ行つてお待ち遊ばせと、云はれてハッと氣のつきしが、隱すは厚意を無にする道理と、心で拜みて家に入りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お前はお花坊ぢやないかと、耳元近く呼び覺されたる一聲に、お花は眼を覺せば、品の好い女房に抱かれしのみか、見も馴れぬ立派な家に居て、身に絹布を着せられあるにうち驚き、四邊

を見やるに、床には名も知らぬ珍寶、棚には名匠の刻みたる像なんど、いづれも千金を費したらん如き種々の器の、塲所狹きまで置き比べたり。如何なる人の住む家かと、眼眩けるまゝ、抱ける女房の顏見れば、我が名を知れるも道理こそ、しかもこの春の季、未だ櫻の花の散らぬ頃なり、我と父とをふり捨てゝ、さる富豪の妾とやらになり給ひたる母御なれば、お花の驚きは一方ならず、さるにても此處は如何なる國にやと、泣き出しさうな顏して問ふを、お房はさも嬉し氣に。お花氣がついたか、此處は何處だつて、お前少とも知らないのかえ、矢張鎌倉よ、妾も暫らく東京に居て、先頃ヤツトこゝへ來たのだが、よう壯

健で居て呉れた、逢ひたかつた、もうお前何ともないか、あァ漸と安心した、先刻お前が氣絶した時は何うしやうかと思つた、あら嘘だつて、それ御覽な、此處に寶丹も水もあるぢやないか、お花、お花、お花や、何故お前默止つて居るの、久し振で笑つて御覽大層身體が大きくなつた、髮は誰が結つて下さる、よ、お前何故返辭をおしでない、おや、この子はいやな、泣いて居る、何故泣くの、何が悲しい、えゝ自烈體と怒るも可愛き眞身の親、お花は泣いてその手を離れ。お母さん、何故お藥を飲まして下さつた、搆はず死なして下されば、お父さんに逢はれるもの、妾は捨てられたお母さんより、死んだお父さん

が戀しいと、涙に咽せぶも道理なり。

死んだお父さんッて、ソリヤ眞實かと、血相變へて詰め寄れば

お花は涙を啜り上げて、だからお母さんは薄情だと云んです、

お前が居てさへ下されば、お父さんは死にませむ、お前ばかり

こんな立派な家に居て、お父さんも妾も居所はありません、お

父さんはお酒を呑み過して、お腹が破れて路傍でお死去なさり

ました、噂でも御存じの筈だのに、今まで知らずにおゐでなさ

るは、よくよく妾共の事は思ひ出しもなさるまい、あァいや、

こんな人の傍に居て、また他人樣に悪口される、妾は野中の一

本杉だから、お祖父さん祖母さん許へ行くのより、寧そお貰ひ

になつて居た方がいゝ、こんな物に這入つて、こんな立派な衣

裳を着せられたからつて、またお母さんに捨てられると詰まら

ない、それよりか一人で居た方がましだ、さうするとお祖母さ

んにも虐められないし、他人樣にも笑はれない、何うかお母さ

んばかり好い衣裳を着て安樂をなさいませ、妾は汚ない衣裳が

いゝ、何時までもこんな處に居て、お貰が厭になつた頃に、打

捨られると恐いから、早く歸りませう、お母さん何うか壯健で

居て下さいよと、立ちかゝる娘の袖に縋りつきて、口惜泣きに

泣き沈むお房。尤もだ、道理だ、妾が悪かつた、堪忍して吳れ

お父さんが亡くなつた事も、お前が斯ういふ身になつたのも知

らないで、妾ばかり斯んな氣樂な活計を立てゝ居ては、お前の腹の立つのも無理はない、だけれども、妾だつてお前を思はぬことはないが、圍はれ者は牢屋も同樣、閾の外へも出る事ならず、それに外聞の惡るさゆゑ、滅多に人に顏も見せない、妾はもう〳〵諦めて死んだ氣になつて居たものを、親の心を子は知らで、怨んで呉れるが情けない、斯ういふ身分になつたのも、これには種々譯のあること、知らぬお前に聞かしたとて、容易に信じて呉れまいが、まア一通り聞いてお呉れと、お花の手をとり引寄せて、涙ながらの身の上話、子に罪詫ぶる親の心は、如何に苦しき事なりけらし。

（七）

花召しませ、花召しませぬかと、八百八町を觸れ歩く親子の花賣あり。母なる人は盛りは少し過ぎたれど、未だ枝頭に三分の春ある優姿、鳥啼ずなれる今日が日に、花を提げて巷に立つはなほ色香を世に衒はん意か、されども髪を繕はず、薄化粧だも施こさゞるは、見する人無しとての强ね心か、たゞしまた無情の花は賣れども、解語花を召しませとは、云はぬ心の謎なるか、この縹緻もて、しかも親一人なれば未だしも、子にまで花を賣らせずともの事なるに、世にこの業ならで生計の道無きかの如く、都の塵に顏を黑めて、東よ西よと蝶に追はれて、花を

賣り行く殊勝さよ。

春暮れて人は花を惜みつゝ、名殘の歌、餞の詩など書いつけて、また來る春を待つなるに、花賣の身は花に愛着の心もなく、名ある櫻も婀娜なる桃も、惜氣もなく斷り捨てゝ、花に衣食の果敢無さを、知らで斯かる業するか、夏は卯の花の白きを、花賣る籠に充して、手に杜若花を提げつゝ、子と睦ましく話しながら、露の干ぬ間に賣り盡して、家に歸るも親子連れ、途を急ぐは待つ人のあるやと問へば、苦り切つて物言はず。

賣物に花とさへ云へるに、其方は花賣を稼業にして、愛嬌の露だも無きは、なべての世間を慣りてか、たゞしは人の心を怨

むの餘か、何うぢやと問へど、苦り切つて又物言はず。

啞か聾かと嘲らるれど、それさへも耳にかけず、花賣り捨てゝ先手を急ぐ、妙な女子もあるものよ、戀知らぬ鳥も獸もあらざるに、生娘とはあれなるべし、さるにても如何にして彼なる子、を設けしぞ、よも木の股から生もせまいがと、新道の若者の口の端に上りぬ。

秋は來れど花を賣り來る、冬になりても花賣に來る、來る毎に眼を注くる若者は、女房の姿に目をつくれど、美貌に一點の粉膩なく、身に色めける衣を着けず、雨の日も風の朝も、籠を擔ひ、裾端折りつ、右手に花を提ぐれば、左手に娘の手を引いて

來る。

花召しませといふ聲は、裏町遠しと喞たしむる、初松魚の聲より評判よく、今日は佛の日、明日は生花にと、隱居も後家も贔負にして、花を引取りて遣れど、これにも莞爾との愛嬌も見せで、木佛金佛其儘なる不愛相も、そを通り越しては、腹を立てる者もあらず。

斯くして二三年を過ごしぬ。ある富豪の隱居その志の愛でたさに惚れ込み、後妻にと云ひ込めば、皆までも聞かず身震ひして。いやの〳〵、花は賣りますれど、實を賣らぬ心は、根の無い枝が證據と、手酷く斷りて、其後はその町に立寄らず、遠く

避けて花を賣りぬ。さる程に娘のお花は十三歳、母のお房は三十の姥櫻、まだ散り殘る色香も、頓て褪むべき折あるべし。知らず如何なる流水の、この可憐なる落花を浮ぶべき。（廿八年作）

不老泉

綿ぬきて身も輕やかになれば、初夏の風爽かに、垣根に白き卯の花の、月に輝きて、下葉の黑きに似もやらず、いと白く冴ゆるに、夜ながらも庭の面白う見らるゝまゝ、更くれども寢んともせず、椽側に端居して、仰いで清光を眺むれば、ゆみ弦なり

の月に雁の渡るなんど、あり來れる光景なれども、今宵のみはいと興あり、木履穿きて飛石を傳へ行けば、竹には婆娑の影あり、藤棚の形地に落ちて、砌にある石の黒く見ゆるは、見狗のうづくまれるにはあらぬか、風光の老ふること早きは、散る花の脆きよりもなほ味なく、變らぬ月影さへあるに、變り行く態の奇しきは、衣更するにもまされり、いでや母、亡せにしより八年の思ひ出に、病中の事杯胸に浮び出づる事どもかいつけみむ。

母の病み給ひしは、われ十九の春なりき、家は都を百里あまりへだつる處にありて、富まざるも貧しからず、兄と姉とはあれ

ども、父はわが幼き折に歿去給ひぬ。その折はわれも物心なき頃なれば、左までには嘆かざりしも、今度はいたくわが胸を拊たり、年は五十路を七つあまり超え給ひぬれど、白き髪の一筋だになく、色も赧顔にて、躰いと肥え給ひけり。常にも他人にうち向ひて、わが母は躰も心もいと若々しうましませば、老木ながらの若緑、千代も經給ふべき吉瑞と、語りつゞけて悅び合ひしも仇なれや、盛れる花の雨に嫉まれて、その肥え太り給ひし躰の、一朝中風とやらん症にて、半身不隨の人となり給ひぬ。日頃雄々しき御氣性の、逸る御心に儘ならぬ身を悔しがり給ひて、涙に暮れ給ふ日のみ多きよし、兄君文して知らせ越し給ひ

ぬ、われ其折は山形といへる地に君仕へして在る頃なれば、いたくうち驚き、主なる人に暇を乞ひ、行李とゝのへて故郷に歸りぬ。歸りて後は只管に母の心のみ慰むる事に身を委ね、秋風戰と吹きて、蘆邊に雁の渡る頃は、吾妻山の温泉に扈從して、母の病の癒えよかしと、嶺の藥師に祈念せる事どとありき。その浴の塲も、熱海箱根などに異りて、諸事物足らぬ勝なるのみか、旅籠といふものもなく、多くは木賃にて泊るなり、されば木の料若干、油の料若干、座敷料若干として、人を宿す習慣なれば、煮焚の業も自らするなり、朝な夕なの炊きわざ、わが手一つにてするを、母の見給ふにつけて、たゞうち泣きお在するのみ、われも未だ世馴れぬ頃なれば、悲しき顏を隱さんともせで、或時はともに涙に暮るゝ折もありし、月ある夜は樵歌牧笛に耳を傾け、雨そぼ降れる夕、更闌くるも知らで、文に耽くる時などは、我の眼の症に罹らん事を氣遣ひ給ひて、母は寢よ〳〵と宣ふ。其後家に歸りても、醫藥怠りなく、此處の妙藥、彼處の名醫と、ある限りの手を盡したれど、病痾に克つ可き手術もなく、漸うに覺束無氣に見え給ふ。われは更なり、兄も姉も親類緣者も、一同枕元をとり圍みて、看護疎略ならざれども、醫師も匕を投げたる際に、施すべき手術もなく、見す〳〵凋れ行き給ふを伽する夜半の心細さ、弗と誰やらの物語に、こゝを距

る三里に遠く、一色堂村の藥師に、長命水といふありて、その御水を病む人に飲ますする時は、癒ゆべき者は忽ち癒え、癒えずして逝く人も、苦惱なく往生を遂げらるべし、されども其山には蛇多く住み、人跡稀なりといふ。この譚を聞けるわれの喜びは譬ふるに物なく、その夜は明くる間遲しと、東の未だ白まぬに家を出でゝ、町外にて一つの瓶を買ひとり、知れる者に路程をたづね、名も知らぬ小村二つ三つ通り過ぎて、只ある大川の畔に出でぬ。激湍ならねども、流早くして水いと青し、橋あり、桁に束ねたる柴を架して、芝草を置きたり、渡りて行けば、荆棘兩側に茂りて、路いと狹く、かゝる中にも藪鶯の、春を忘

れで啼く聲の淋しく、晝なれども人の往來は絶え、虻の荒るゝ儘に任せたり。なほ行く半里あまり、いよ〳〵人家に遠かり行く程に、路傍に樹木茂りて、青き空を掩ひ、烈日は葉蔭を射りて、蒸し暑きこと云ふばかりなし、頃は陰曆五月の末、炎天に雨なく、草頭露渴きて、路に蛇の横はるもの、一二にして足らず、叢中に物あり、走り去りて後邊を顧れば、みなその厭ふべき虫よ。されどもわれの心は、不老長生の藥液を得るにあれば、神に祈り佛に念じ、只すら母の病の輕かれと願ふの外なく醫師も賴むに足らず、良藥も口に苦きのみにて、些の効能もあらねば、この上は天の力、神の力、佛の力を賴むの外なしと、

一意専念、勇猛精進肚裏に他の物を容れず、眼に他の物を見ねば、路に豺狼ありとも、蛇蝎ありとも、怯まず、怖れず、行く〳〵その村に着きぬ。山高からねども、陰々として物凄く、麓に華表あり、朽ちて倒れんとす、石階あり、崩れて草に埋れりわれは且つ喜び且つ勇み、登りて祠前に額づき、祈誓し了りて、恐る〳〵社の結構を仰ぎ見れば、二間四面もあるらん茅葺堂にて、雨に古び、風に痛みたり、不老の泉、長命の水は何地にあると、見れども無し、堂の後背に廻りて、捜せども見えず、こは如何すべきと、立騒げど、尋ぬべき人もなく、山寂として雲眠るが如し、麓に下りて探ぐるに、登る時は眼も觸れざりし松

の下に、覓したる靈水あり、その質清からず、印の票札だに無けれど、これなり〳〵とうち喜び、脊に負へる瓶とり出して、幾回か神に念じ、そを汲みとりて袱につゝみ、手に提げて家路に着くに、四邊の景は目に入らず、疾く歸りて直に母の枕邊に行けば、今を限りと兄も姉も、看病の傍口に唱名の聲を絶たず、母も覺悟やし給ひけん、眼を閉ぢて默然たり。われは先づ姉に綷の由を告げ、姉よりして靈水をすゝむれば、快く飲み、飲みてわが顏をつく〳〵眺めて、ほろりと涙を落し給ひぬ。それよりして物も宣はず、他の藥餌をも口にし給はず、たゞその靈水をのみすゝめ奉れば、快く眠りて、往くべき道を急ぎ給ふ

風情なり、斯くて枯るゝ枝は、日を經て脆く、花は自ら凋れて、香なく、色なく、その月廿九日亡き人の數に入り給ひぬ。臨終の折も、靈水をすゝめけるに、眼を細く見開きて、わが名を呼ひ給ひつゝも、手を弱く握り給ひぬ。その聲は絲より細く其腕は鶴よりも痩せ給ひけり。それ末期の水すゝめよと兄の辭に、長幼順を正しふして、母の唇に靈水を紙に浸して注ぐに、注ぐものみな涙ならぬはなし、頓て香の煙に鎖れぬ、愀々の聲は唱名の聲と半ばしぬ、嗚呼不老の水、長命の液は、この末期の水とならんとは。

星霜八年、父母に後れ、父母の地を離れて、客土にこの月に對す、變らぬは月、變れるは我が身の上。知らず今日の感懷、明日はまた誰が身の上に移すべきや。（廿八年作）

淡粧濃抹

三ツ兒の魂百までもといふ諺は、いたく我が嗜好に適へり、我は幼き頃より繪を見ることを好み、また繪本など透寫して、紅紺青もてそを彩り綴りて冊となし、父君に見せまゐらするに、後には我を繪師にせむなどゝと宣へて、故郷の某といふ斯道の達人に、打明け給へる事もありしが、母君はまたいたく廻國繪

師の意氣地無きを嫌ひ給ひて、幇間に齊しき業など習はせ給はずとも、蛙の兒は蛙の道學ばし給へとて、十四の春は文にも筆にも緣遠き業を身習ふ事となりぬ、十六にして父君に後れ、それより五年過ぐる頃は、母君もこの世を去り給ひつ、殘れるは木枯にふるひ落されたる猿の、木の實を求食るともなくて、笈を東都に下したりき。

さて不思議なるは、東都に來れるその日より、繪の道に緣近き活計にありつきたることとなり、我が拙ながらも筆を執れるは兩ながら繪の雜誌なれば、交はる友も丹青を業とする人ならねば、斯道には淺く深く志のある人のみなり、その頃は未だ美

術といふことの、誰彼の頭腦に染まぬ際とて、今のやうに繪をかく者も少なく、また繪のみにて世を渡ることも大々家など云はるゝ人の外は、容易ならぬ頃なりしかば、その雜誌の賣行もいと少かりし、さるを我と社主と、斯道の人々を推勸めて、いろ〳〵の會など起し、月々繪の展覽會を開き、我先づ四方を駈めぐりて、古き繪新らしき繪を數多借り集めつ、檄を飛ばし、大方に案内して公の覽に供へぬ、そが奔走も、そが周旋も、我一人にて埒明かし、晝は諸方を廻りて、珍らしきあれば借りて肩に載せて持歸り、夜はそを陳べ列ねて、東の白むも知らざりし事などありき、されども今の如く腕車にも乘らず、衣もい

と見苦しかりし、一二年過ぐる頃上野の美術協會も盛りになり行き、第二回の博覽會も開かれて、世は何時となく繪の世の中となりぬ、今の野口珂北君はその頃よりの篤志家にして、斯道には有力の人なり。

風俗繪も四五年前までは好む人いと稀なりし、その折我住吉具慶の畫ける洛中洛外の繪卷物を、博物館より會の陳列品に借得て見たりき、其筆の巧みにして、而かも精しき、彩色の古雅にして生氣ある、數百年前の世の樣を目前に睹る心地して、いと喜ばしかりき、その外英一蝶の四季日待の繪卷物、これも元祿時代の豪奢の世の樣を想起させて、有聲の畫無聲の詩、いづ

れや優ると感ぜしめぬ、この卷物今は野村貴族院議員の所藏なり。

土佐繪もまた風俗を見るには便あり、屋根を省きて殿造の全體を見するなど、建築の上にも要あるべし、古きは奈良朝の樣など想はるれど、降りて拙きものに至りては、その描法を謬りて虎を描いて尙ほ猫にも似ざるものあり、土佐繪も古きは寫生にして、南都の俤は丹碧彩毫の端に彩られあり、山の綠青にして、笠を伏せしが如きは、三笠三輪などの俤あるべく、殿造の今も世に殘れる法隆寺の伽籃は、古き土佐繪の姿あり、松のなよやかにして、綠の苔深きは、大和の初瀨なんどに多く、端

山しげ山の波のやうなるは、吉野はその雛形なるべし、そもそも松の一木を描くにも、海邊波高くして風の烈しき處は、枝くねり捻れて、龍の蟠るが如く見ゆるも、而かも風無く雪薄く氣候穏かなる土地に生ふる松の、尚ほ處女の態あるが如く、何となく優しげなり、されば傍畝山の松と、末の松山の松とは、描法一途ならざるは、理の當然なるに、今の土佐繪はその區別なし、これ繪師の見聞博からざるによるなり、圓山應擧は丹波に生れて、西の都に名を揚げたり、故にその描く所多くは近畿數國の外に出でず、その描法も優にやさしくして、山水人物悉く京の温柔を示せり、さればその筆致にて、北海の激浪を描

く者あれば、これ大に謬れるなり、地勢の異る所、山川人物皆な多少の異趣あれば、天下の繪師たる者、須らく行脚すべし、坐ながらにして名所を知るとは、歌枕を探り得るに難かりし頃の世の諺なり、今は寫眞の術あり、千里一飛の鐵車あり、徒らに粉本をのみ杖とするの時にあらず、宇宙は美の摸型なり、萬象悉く藥籠中のものならずや、何を苦んで門外を出でざる、見よ〳〵時は今ぞ、花も笑へば、鳥も謳うて、春色の美を粧へり、諸君畫板を肩にして、渠と宜しく行樂を共にせよ。餘韻に乏しきは容齋の筆なり、餘地なきは容齋の繪なり、餘韻無きは久うして厭かるべく餘地無きは伸びざるの描法なり、故に

容齋を初に愛する人も、久しくなれば、目の超えて、應舉に移り、探幽に移り、元信に移り、古佛畫に進む、餘地無きの繪は尤も學び易く、學んで其堂に入り易くして、其上を出でず、筆熟すれば一羽の墨鴉も滿幅の密畫より趣あるべく、趣あれば久しく見るも厭くとなし、容齋の繪は纖巧なり、書き過ぐるの僻あり、繪は『今一筆』といふ餘地無かるべからず、月雲を出でず、而かも月あるを知しむるものは應舉の筆なり、月を描きて雲に及ぶものは容齋なり、故に容齋が一世の傑作なる阿房宮の圖と、呂后人彘を造るの圖の如き、巧は乃ち巧なれども、見了て餘情の那邊に在るやを知らず、我は惜む容齋の筆にして、尙ほ且つ終

に一の忠臣義子をのみ描くの繩墨を出づる能はざりし事を、人あり曰く、余は繪畫を見了るの後も躊躇逡巡去る能はざるものは、配色にあらず、圖樣にあらず、全く餘情の余が眼を離れざるによりてなりと、實に然り餘情は繪の魂なるかな。

六七年このかたにて、我の親しく逢ひもし見もしゝて、その風采をも知り、その性行をも知り得たりし名家の世を辭したるは下の四人なり、河鍋曉齋は水戸の人にて、野口珂北君と同藩なれば、互に來往せしが、我の曉齋翁を知りたりしは明治二十三四年の頃と覺えき、翁我が會に臨みて、予が勞をねぎらひて後茶室にて憩はれ居られたり、好き機なればとて、筆と紙とを持

ち行き、いざ挿繪一片賜はれといふ、咄嗟筆をとると見る間に、一の羅漢を描き了んぬ、下繪も無ければ別に考慮の邊もなく、忽ちにして生けるが如き人物の紙幅に躍るを見し時は、その健腕の非凡なりしに驚きたり、年は五十を超え、大兵肥滿の圓頭顱、稍々兀げて赤く光り、眼光鋭く聲太くして、魯智深の正の物を見るが如し、其後若干ならずして翁逝く、畫幅の値頓に騰り、一紙百金に値するに至れりと言ふ、次は月岡芳年なり、我の翁と初めて逢ひしは圍子坂にてなり、翁は年若き美人を携へ、翁の風采はその畫風に似たるや、何處となく垢ぬけして、江戸ッ兒の價値は十分あり、手に繪の道具を袋に入れたるを提

げ、美人を顧みては指し示して、菊の講釋を云ひつゝ歩かる、行く〳〵王昭君と云ふ菊の花を見て、要あり氣に筆とり出し、一寸寫生して、園中の床几に休む、我は進んで挨拶して別れし後、一二年訪はざるに病に斃れて此世には在らずなりぬ、月の百姿に俤を止めて、主の雲間に入りたるは遺憾此上あらず、次は小林永濯なり、我の翁に初對面せるは、その小梅の寓居にてなり、翁晩年肺病に罹り、起居やゝ難儀なりとて、多く人に逢ひ給はざる折も、我は常にその書齋に入るを得たりき、然れども翁は病に痩せて、繪のやゝ肉つける人物には似ざりき、我の往年雜誌に請うて挿みたる、年中行事は、翁が尤も晩年の作

にして、また最も精神を凝せるものなり、翁の書齋は向島の田甫を見透にして、清好雨奇の趣あり、其後二年ならずして翁は終に起たずなりぬ惜哉、次に我の最も親しく交を辱うせしは平福穂菴なり、翁は秋田の人永く函館に遊びて岡野知十君と交あり、我の翁を知れるは明治二十二年の頃なりと覺ゆ翁初めお茶の水に在り、後故ありて我と家を同うせり、我は一樓の下に在りて、文を作るを事とし、翁は樓上に在りて丹青に耽る、翁は實に斯道に熱心の人にして、一紙半切の繪なりとも容易に筆を執らず、深く考へ、博く參り、圖熟して後筆を執るに沈重にして、而かも速かなり、四條の流を汲むと雖ども、古

法に拘泥せず、故に一種絶佳の筆致あり、然れども酒を嗜むこと深く、日夕痛飲、醉うて眠を貪るの外、醒むれば近隣の小兒を集め、唐子に扮せしめて、其身は布袋に擬して遊べり、時正に孟夏地は日本橋に近く、四隣近接炎蒸堪え難し、翁毎時我を誘うて氷屋に行く、其後故ありて故山秋田に歸り、居ること年餘、一朝中風症に罹りて斃る、哀悼の情に堪えず、今の寺崎廣業君は翁と同鄕にして、而かも同じく四條の流れを汲むもの、我と廣業君と交深し、二人相會する毎に翁の平生を追想せざるはなく、顧うて悽然たらざるものなし、知らず翁にして今尙ほ健在せば、我が丹青界を震動する豈に難からずとせんや。

一夜寢られぬ儘のよしなし言、よしなき言を書いつけて、獨り去年の愚を笑ふのみ（廿九年作）

田家風月

何位何爵と、夫も妻も草双紙の口繪にまで、挿まれ給ふ高貴の方を、二人並べて見る時は、如何にも睦ましき御中と見奉れど世の中は錦繪の、裏と表とはいたく違ひて、奥方の鏡の面も、涙の痕に汚れやしぬらん、美き衣を着、美き家に住みて、親も子も睦ましからんには、此上なき喜びなれど、人の一生は紅よ

白粉よと、愁ひの顔を粧ひ隱して、紋お召の襦袢の袖に、眼を窃と拭ひつゝも、嬉しげなる眉をつくるもありけり。されば人に幸と不幸とあるが中に、家の齊はざるほど、こゝろよからぬは無かるべし、古への名君賢相も、天下は治め易うして、家は齊へ難しとて、胸をば痛めさせ給きと聞く、況してや今の世の人情末になりて、君臣父子の分を忘れ、禮讓を失ひて、我儘のみ募れる程に月も光を失ひ、花も窈窕の色褪めて、年と共に撫子の、庭の中のものにあらずなり行くぞうたてし、斯くて百年も過ぎなんか、千歳と祝はれたる松も薪となり、萬年と壽かれし龜も、汀のものならで、たゞ恥多しと嘲つにいたりなむか、

さて家庭の和樂も、鄙と都と比べたらんには、人心峻しき都の住居の物憂きは、人目も草も枯れ果てぬる山里よりも多くして晴れやらぬ胸のうき雲は、岫を出ずる白雲の自然なるに比べて、いくその悲しみや深かるべき、物學びする人の故郷忘じ難しなど云へるも、田家の風月の興あるよりぞ云ひならはしけるにや。先づ都の人の春ぞとて浮き立ぬる花の色も、三日見ぬ間の世の變遷に、綾羅の袖を飜せし者が、秋の初風身に染みぬる紙衣着て、巷に立つやうになりては、興ありと眺めたる花も鳥も、飢を癒すべき色あるにあらず、徒らに捨てる神に助けらるゝ紙屑拾ふて、月夜に片袖を翳し行く人もあり。斯くてもな

ほ子の愛に覊されてか、霜を浴びつゝも人の檐下を宿として、狗にも劣りたる世渡するもありけり、さるものに比べては、物足らぬ田舍にこそ、和樂の味はあるなれ、春は山櫻の咲き飜れて、庭の筧に水を引けば、招かざるも藪鶯の止りて、時ならぬ經誦む聲に、先祖の忌日の思ひ出されて、佛壇に線香薫すは娘の役と、母は回向に餘念なき折しも、朝稼ぎにとて樵りたる柴を、脊丈より高く擔ふて戻る主人の風流は、これ見よと折り來れる山躑躅を出して、この火點せる如き花を、今日の御先祖に供じて、御燈の代りにもせよといふ。日は茅葺の廂を洩れて、竹椽の半ばを照す處に荷を下して、おう肩が凝るといへば、娘

は後邊に廻りて摩づる間に、妻は小川の水を盥に汲みて、洗足せよと夫の草鞋まで解いてやる心切には、日に黒みたる顔にも笑みの溢れて目も鼻もなくなすべし。庭には名ある草も木もなけれど、近く窓に横はる芝山は、剃刀あてたる尼の頭に似て、青々と目も覺むる心地すれば、谷川の水の白く流れて、堰の朽杭に鴉の立てるも長閑なり、かゝる中にも道義の心はあるにや夜は月下の門を叩きて、僧に仁義の道を問ひ、歸りの野道を獨り行けば、雲眠りて人の意も穩なり。固より算數の術も知らねば、慾といふものも薄く、慾無ければ敵となるべき人もなし、恐きものは屋根の洩るばかりぞと、寺の和尚の本堂再建の話に、

寄附を強ひられての迷惑顔も、佛樣の爲めと自ら名をつければ、腹も立たず、家には忰の太閤記讀みて、藤吉郎も百性から出しと、我は顔するも勇ましや。夏は卯の花垣根に咲きて、杜鵑も啼いて來れば、老木も若葉の眉をつくる、常に鹽鱈喰ひ馴れし身の、初鰹食はうとも思はねば、小判嚙むと聞いたばかりで、恐い魚ぞと顔を皺むるも可笑、美き衣着るためには、家に蠶を飼ひて母寢ざる時、娘は桑の圃に入りて、籠に堆きまで摘むなり、刻みたる桑は蠶に與へて、一眠、二眠、三眠、寢食を虫と共になし、さて漸う繭を製しては、娘の曠衣、夫の不斷着をつくり、餘れるは妻も着、屑繭は眞綿になし、祖母御の綿ッ子を

製して、冬の寒さを忘れしむ、斯かる睦ましき家庭には、鬼千疋と譬へらるゝ姑も、菩薩眉をつくりて嫁の手を賞め、孫の働きを褒めそやして、微笑む毎に老の波は一畝づゝ消ゆべし、常夏の花の咲く頃は、藪蚊多けれど、夕顔棚の下涼みには、松笠を燻して澁團扇に風を迎へ、親も子も膝を頽して見る月は、圓き影を水に映して、濁れる池も夜は清く見ゆ、それより一入嬉しきは、山田守る小作人の妻の、早乙女の業して、苗をうゑぬ植えつくるに、畔に這ふ兒の乳欲しゝと泣けば、流石に人情の忍び難くてや、句に「早乙女や兒の泣く方に植えて行く」の意も忍ばれて、床しくも哀れは深かり、手は泥に塗れ、顔は日

に焼けぬれど、心のしかも白くして清ければこそ、狐疑の念もなく、山家に浮かれ女のある筈なければ、夫の心も移らず、妻も悋を云はぬかはりには、己れを愛する者の爲めに容つくる意も出でぬなり、年中の快樂は五節句と定めて、睦月の里かへり三月の雛祭には、假令石女のありとても、雛侍くぞ哀れなりと謳はるゝまでの口惜しさも知らで過せば、五月の菖蒲に菱餅のやり取、さて文月の七夕には、色紙短冊に文字書きて葉竹に結へ、そを谷川に流しやる、重陽に菊を祝ひ、やがて收穫の頃ともなれば、稲苅りて庫に納め、米に精げて市に賣る、城下より金を集め來ては、母にも妻にも娘にも美き衣を着せ、髪をも結

はせ、紅も白粉もつけさせて、鎮守の祭禮に連れ行く樣の睦ましげなる、都の人のおもひも寄らず、其上に裕かなる家にては、山の温泉に浴みもし、三十三所の觀音詣もして、夫婦の情を温め、父子の間を滑かにして、目出度く年を送り、歳を迎へては世の人の、鏡餅つくるもありき、冬籠りの面白さは、雪を豐年の貢と見て、前祝ひに酒買ふもあれば、榾くべて寄る圍爐裡の端には、姑も嫁も親も子も、みな輪になりて世間の噂仕合ふも、胸に隔ての障子閉てねば、偷聽する程の强者もなく、打明けてする事に、影日向の仕振無ければ、腹の立べつき隙間もあらず、斯かる中には貧乏神の潜み塲もなきまゝ、身代も伸び、

嫁の腹も膨れて、律義者の子寶も餘るべし、實に太平の餘德には、諫鼓苦蒸して、デン〳〵太鼓と變り、鷄驚かぬも理や、米俵の上に羽をひろげて、時刻をつくる顏もせぬは、目覺時計に役目を讓りて、隱居の翁と名を改めし氣か、さりとては苦と樂とを俱にする田舍の家庭の睦ましさよ、これをしも都の人の妻と樂みを而已樂みて、終に其樂みに厭くに至れる者に、見せてやりたいものよ。穴賢。（廿八年作）

小照録

人間僅か五十文、當百ほどの命もないのに、文久錢の欠片のやうに碎けて、瓦にもならず、玉にもならず、呆然と二十五文の關を越して、時の相場にも外れ、こゝ八百八町の中央で、文を横縱十文字の罫の桝に量つて、賣り食ひして居る果敢ない稼業の文學者、あア昔の事を考へると、寧ろ十年前の方は、余程氣樂なやうな心地がする、

その十年の昔には、我も山形に丁稚奉公をして居た、主家といふのは土地で有名な呉服屋だが、我は何うも書物にばかり凝つ

て、店の用は頗る迂濶であつた、底で我はお店向には落第して、臺所の方へ下げられた、丁度その頃は普請最中であつたから、左官の手傳、土方の合棒、箒掃除、拭掃除、米も精ぐ、鍋も洗ふ、味噌も摺る、釜も研ぐ、その隙には八貫酒も釀る、醤油も味噌も製造する、また其間には古草鞋や古繩などを雨落へ腐らし置き、そして日に乾かして、荒壁、赤壁に交ぜる下藁といふものもつくる、近か少しの隙があれば畑などをも耕した、或年の夏、名物の薄荷といふものを、三日町裏の持地に植えて、極熟の炎天に耕作したことがある、膏汁が流れる程辛らかつたが、その時には夫が却て我には嬉しかつた、何故と云へば愁じ

店に番をして居て、好な本も讀めず、番頭に睨まれて居るより、斯う野に出て耕作して居れば、煙草休みには懷中から、隱して持つて來た詩文集を出して讀むことも出來、又己が著作なども種々浮んで來る、黃昏頃などの心地の清々すること、日は狐越邊の山に沈んで、暮色は光禪寺の杜にかゝり、鳥の塒に歸る、犬の遠く吠ゆる。恰も畫にあるやうな景色の中で、業を終へ、野中の清水で手足の泥を洗ひ落し、空しくなつた腹を抱えて家に歸り、顏も隱るゝばかりの大椀で、飯を存分に食べる折の愉快さ、何とも彼とも云ひやうが無い、夜に入れば、綿の古いのを拷るとか、雜巾などを縫すとか、よし居眠をさせながらも、

本は容易に讀ませられなかつた、で、朋輩が寐てから、薄暗い行燈の火で畑で讀み殘した本を讀むとか、お向ひの市村といふ豪家から借りた新聞を讀むとかして、我の寐るのは大抵二時か三時であつた、夫で朝は矢張夜の明際、呼び起されて、川の水で顏を洗ひ、鹽で齒を磨くのは常である、それから見ると十年後の丁稚や番頭さん抔は氣樂である、新聞も公然と見る、卷煙草も平氣で呑む、齒磨も「練はみがき」だの、瓶入だのと、二十錢も三十錢もするのを用ふが、實に昔と今とは雲泥萬里の差だ、そして湯に浴るのは三日に一度か、ともすると四日に一度だ、それも我は大抵顏を洗つた事はない、何故といへば晝間勞働し

て居るから、疲れ切つて、夜遅くなつて、頗る眠くなつて、湯に浴るから、非常に心地快くなり、風呂の縁を枕にして居眠る、暫くして大に逆上せる、目を覺して直に飛び出る、衣裳を着て、主人の前に辭儀する、で、何日でも顔を洗ふのを忘れるのだ、或時のこと、朋輩に悪戯をされて居眠つた顔に墨を塗られたのを知らず、今の流義で湯に浴り、顔を洗はず上つた、例の通り湯の中で眠るのだから頗る永い、一同は冷評して、「君は餘りお磨きをするから永湯だが、一躰何處を磨いた」と云つて、鏡を見せる、我は吃驚した、底で僕が入浴しても顔を洗はぬことも判り、居眠することも判つて、番頭のお目玉を頂いたことがあ

つた、この居眠の話では、モット可笑しい事がある、我の主家は法華宗である、或年のこと、菩提寺に身延山の管長が來て、毎晩の説教があつた、佛の事には寛大であつたから、我も許されて參詣したが、此宗に限つて坊主が説教する前に、雨蔓陀羅華と云つて紙を刻んでつくつた蓮華を散らします、で、子供心にその蓮華が欲しさに高座の前に出て拾ふ、が、拾つた後は説教などは何うでもよい、また坊主奴毎晩同じ事を繰返して説教するかと蔑如して、大膽にも太鼓に凭りかゝつて居眠つた、例の如く疲れて居るので、殆んど熟睡、其鼾雷の如しであつたら う、處で高座の上の坊主奴、大喝一聲して、「これ〳〵小僧、眠

むいなら、後へ下つて寢ろ、前では說敎の邪魔になる」と叱した、咄、我の身の上にとつての一大事、この寺の本堂に鮓を詰めたやうの大入は、多分千人位は居つたらう、その人々は皆な我の一身に二千の眼を聚めて、さも佛敵でも獲たやうに見詰めた、その中を我の座を立つて、引下る時の無念さ、口惜さ、遠く帳場の方を見ると、主人は世話役をして、嚴然と構へて居られたが、今や堂中は鳴を打つて「やァあれは何屋の丁稚だ」と叫ばれた聲に、急に顏を垂れて恐縮の躰をなされた、我は實に一生の大不覺であつた、嗚呼今にしてこれを想ふも、冷汗の背を流れるのを覺える、それからして其噂は八方に廣まつたものと見え、我が往來を通ると、酒屋の樽拾ひ、藥種屋の丁稚などが、予の姿の見えずなるまで、「何屋の居眠丁稚〳〵」と惡口した、

その居眠の癖が未だに癒えず、今に目が覺めぬものと見えて、歲月忽々、我は人生二十五の春は過ぎても、これぞといふ起業も無く、僅に文を賣つて口を糊して居るとは、文人ほど味氣無いものはない、然れども、幸ひに他人の飯を食べた事のあるだけ、今日否この三四年以來無資書生を養つて置くにも、他人の痛い痒い位な事の判るやうになつたのは、書籍以外に學問したお庇蔭、考へると口惜しい、我が實に今頃まで算盤を持つて居

たなら、空想かも知れないが、恐らくは岩崎彌之助さん位には
なつたかも知れぬと思ふ、底で我が第二の故郷なる山形市の子
弟諸君よ、諸君は決して文人にはなり給ふな、早く前田正名先
生などの門に入つて、大法螺、否、大商人、大工業家におなり
なさいと、遠方から御忠告を申上げる、（廿八年作）

點景山水

われ烟霞を好むの癖ありて、行く雲の岫を出づる山にあくが
れ、岩にせかるゝ溪川の水を掬びて、日にやけ、風に櫛られ、

一笠双鞋、危橋に佇立みては、落木の中の人となりつ、まつた
く畫中の趣を解すること多かりしが、眼に看、心に感ずる山水
の、彼の樹は誰の筆に似たる、この斷崖の米家の法を得たるな
ど、丹青の技無き身ながらも、若し後年畫を學ばゞ、彼に此を
點綴して圖と成す如何、而かも青山と白水と、自然の畫をなせ
るにあらずやなど、旅中別に興を促すの快ありき。奈良は風景
に富むの地なり、海遠く水乏しければ、白沙青松の勝無きも、
三笠山の優しき風色は、古土佐の筆に入りて、青山稚松、間々
山櫻を添へたるなど、奈良朝の寫生は此處より出でたるべく、
南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中とは、移して此地を評するの

句となすに足るべし、今に於て昔を想ふに、月卿雲客の花月に朗詠し、歌舞せる時代は、諫鼓苔蒸して鳥驚かざる時とて、其繪も豪宕の態なく、優にして而かも美なりき、當時の詩歌亦、その繪畫の態と同じく、唯花月宴遊の趣を盡して、形骸以外に幽玄の想を搆ふるを知らざりしなり、佛畫既に廢れ、樓閣山水も徒らに眼前の巧を衒ひて、脚繩外を出づる能はざりしか、其纖弱なる筆に據りて、世に紹介せられたる所の、東奥の山水を見よ、地三百里を隔てゝ、氣候風俗の全く異れる所あるにも似ず、軟弱なる山、平和なる水、其他のもの、皆是奈良方面の摸型を以て描かれたり。抑々風土異れば、一樹一石も尚ほ多少

の異變を免る能はざる可きに、在來の土佐繪は其用意無く、其繪は而かも山水人物の態に於て見る所あるの外、別に高遠甚深の氣あるにあらざるものにして、この調査を缺くは、大に怪しむべきなり、我今茲初夏、東奥南部津輕の地を跋渉して、初めて土佐繪の所謂「末の松山」の如きは、稍々眞を措くに足らざるを認めたり、一犬の虚、萬犬傳へて、之を改むるを思はず、徒らに筆を舐り、丹青を施して、能事了れりとなす笑ふべきの極にあらずや、

繪畫の要は氣に在り、氣品既に高からば、形態の如きは措いて問はざるも可、我一夜橋本雅邦翁と語る、翁曰く、狩野芳厓翁

の嬰子觀音の圖は、醜汚なる事物を翻して、神化せしめたるもの、これ則ち繪畫の眞面目なりと、然り、其圖たる、孕母臨月の混沌界を描寫して、材は無上の汚怪なるものなり、然れども銅を材として、金に化せしむるは美術の妙、眞趣は氣品にあるを以て、假し、其圖中の胎兒の神々しからざる、液壺の德利めけるなど、多少の欠點あるにもせよ、美術の神品として、更に何等の汚點無きなり。聞說古より時勢は繪畫を左右すと、而してその時勢に左右せられざるものに名畫逸品多し、元信は戰國割據時代に於ける英傑なり、然れども渠は時好を趁ふの戰爭圖は描かざりし、然り、渠が筆は區々爭奪擾亂を描くが如き、

豆大的のものにあらずして、大悟徹底せるその思想は、別に高遠幽靜の神境を馳驅したりき。實に彼の湘瀟八景の幽絕凄絕なる大圖の如きは、戰塵を淨舍に避くるの間に於て、一呵して成れる絕代の名品にあらずや。今の畫工、平時尙ほ自ら其途に安せず、其分を知る能はずして、描ぐ可らざるものを描き、以て時勢に後れずとなす、百年の後、果して有聲の畫として稱せらるべきや否、滔々たる當今の繪畫界、輸出畫を爲す者は、徒らに外人の好尙を趁ひ、展覽會に出品する者は、先づ審査長の意好を窺ふて、其筆を二三にす、斯くの如くにして、何の日か眞に美術を鑒る者に遇ふべきや、痛嘆の至に堪へず。

繪畫に楷行草の別あり、眞に其人の技倆を見る可きものは草畫なり、草畫ほ丹碧の補助を假らずして、一瀉して成るもの、素養無き人の及ぶ能はざる所、古より沙門の徒之を能くす、何となれば氣の筆に勝るものあればなり、書も亦能書は出家に多し、渠慾寡くして、纖巧を喜ばざるによる、故に雪舟雪村の如き、運筆自在、思想健全、以て證すべきなり。

吉野の花、松島の月といふは、穿てるの語なり、花によりて延元帝の古を想ひ、世の興廢を嘆ずる、尙ほ開落凋悵の憾みあるが如し、松島の月に至りては、全く畫人の材に資す可きなり、遠近陰映の法、遠山は翠く、近巒は黑し、波は穩にして覇氣に

乏しきも、青松の優しきは、王氣に勝るものあるべし、雪には雪村の筆となり、雨には元信が洒脫の態あり、然らば則ち月には如何、滿天雲無く、眉月に雁行の過ぐる、隈取の工合など、探幽の筆致を假らば一層の趣あらむか、尙ほ一歩脚を東奥に逸して、一ノ戸二ノ戸邊に行くに、山は兀として天を摩し、水は麓を流れて、淵となり、瀨と流るゝも、人無く、家無く、白雲儘徘徊するの狀、蕭白、大雅等の筆致あるべし、嗚呼この山迎へ、水送る天下の名勝、孰れか點景山水の趣あらざる、不文我の如き既に畫中の人たり、況んや有數の丹青家をや、聊か旅中の感を記す。（廿九年作）

望郷臺

雨のふる郷、雪の故さと、何彼につけて、たゞ兄ゐます里、姉ゐます家のみ思ひ出さるれ、我年弱うして、父母の國を離れ、こゝに京に客たるもの十年、寒燈を剔て夜書を讀みては、孤影語るに友無きに泣きたるもの幾回ぞ、花は吹雪と散りて、鏡の如く照る墨田川に、波紋を印するあれども、落魄しては如何でか春の興あるべき、衣は垢つき、粮は乏しくなり、悄々夕陽の前に立てば、地に映つる影の物淋しきのみ、身は人の情にかゝり舟の、舵を絶えては、誰と淨世の荒浪を超ゆべきや、浮きつ、

沈みつ、波のまに〳〵衣食し來りしが、去年又志ある方に拾はれて、今も漂流人の哀れさは、食足りても尙ほ故郷の戀ひしく、白旗の彼方、露か涙と別れたりし松原の奥には、我か家のあるあり、幼かりし時、父の植え給はりし梅の一木は如何になりつるぞ、花は美くしう咲きて、黄なる鳥の來て遊べるか、春戸の方には太き梨の樹のありけるが、雨に瓣の散らでや、雫に濡るゝ白き花の、夕月に露を飜さずや、父の小池に挿し給へる菖蒲は如何、花は紫と白の染分なりしに、今年は輪の太かりしや、秋風の下の黄菊白菊、蕾の綻ぶる頃は、花壇に蠟障子懸けて、夜の霜を厭ひたりしも、その父、その母、逝去給ひてより

は、南園如何に荒れまさりけむ、昔時は籠に落栗拾ふて、老ひさせ給ひたる兩親に、物參らせたる子の、今は雲山百里の路を隔てゝ、そが魂祭る夜の果敢なさよ、苦學漸く緒に就きて、家あり、衣足るの時、養はんに親無く、樂まんに友相遠し、畢竟功名利達は、交遊團欒の敵なるや。

雨の淋しきには父を懷ひ、風の凄き夜半は母の恩を憶ふ、されば花の晨、不忍の池は霞に隱れて、西湖の白堤に似たる辨天の祠に、水を籠むる鐘の音響きては、この景、この美、片親だに世に在さば、一目見せたしなど思ひつゞけて、日暮里の菩提寺に、命日を吊らふ折もありし、交はる人天下に多くなるにつ

れ、意ある友のその國々の名物など贈り越すことあれば、こは父の好み給へるもの、これぞ母の嗜み給ふ品なりとて、物宣まはぬ佛に、手向水するも、別れて後の志なれ。

嗚呼逝くものゝ追ふべきにあらず、玄宗已に反魂の香煙を怨みたるを、我將た如何せむ、寺に落日あり、墓に寒鴉あり、風荒める中の一塚、呼べども聲はあらず。

さるにても故鄕のなほ戀しきは、越鳥の南枝に巢くひ、胡馬の北風に嘶くに齊しく、雨の夜風の夕、旅の冷なる人情を懷ふにつけて、友の交誼の暖かなりしを思ふこと切、我には殊に親しかりし友の、たゞ一人故鄕にありたりき、我が家は貧し、我に

學ぶべきの資はあらざりし、而かもその中にありて、常に我が心を勵まし、我が弱を扶けて、滔々たる逆流をも恐れしめず、巍々たる絶壁をも避けしめたりし保護者は誰なりしか、棄つる神のあれば、助くる神もある世なりとも、渠の如く我が意志を强からしめたるものは無かりしなり、渠は實に我の救世主なり、世はその人の一長一短を是非すれども、人は神にあらず、我はその人の長を執りて、短を更に云はざるも可、德必ず隣有り、知る者は自ら首肯すべし、彼と我との交誼は說にあらず、財にあらず、氣なり、故郷の戀しかりしも、一は同胞あると、兼ねては斯友のあるとによりてなり、意氣は千里も融るべし、我

その人の音信ある時、また其消息を傳へらるゝ日は、花鳥風月の清興あるより、一入の愉快を覺えて、好まぬ酒も思はず量を過すことありたりき、去年如何なる緣ありてや、我鹽原を超えて、南會津に出で、再び磐梯の山に登り、立ち靡く煙の末の定め無き世に、生き殘りたる小野川雄子澤の村人に逢ひて、有爲轉變の有樣を語り、圖らずも鄕に歸りて、親しき友にも逢ひ、同胞とも酒酌み交はして互に無事を喜びたりしが、その時の興は今もなほ忘れ難し、友は我が爲に宴を佐氏の泉に張りたり、花都に花も無かりしが、松は含む千秋の色、風は傳ふ萬古の聲、日落て月はあらねども、螢の影の二つ三つ、飛びては水を

出づる態の、繪も及び無き眺望ありき。更けて川原の闇を行けば、柳の下を流るゝ水に、提灯の火の映つるなど、京にあらぬ風流と、一句口吟めるも可笑かりし。

涼しさや清水流るゝ星のかげ

其折の同行は落合、吉井、蓬田、渡部、遠藤の方々と登坂の君もゐ給ひき。翌日京に歸りてよりは、風雨二百日、櫻咲いて世は春なれども、我は花摺衣着て、國に歸る日無きを如何せむ、蝶舞ひ鳥謳ひ、人も屋根舟に竹屋の渡を上りて、醉眼濛朧、待乳山を睨めども、我は三尺去て小石川の御殿坂に、文草の筆を停めて、二階越に植物園の花を見つゝも、友の音信を待てば、

花曇りからの雨、風をも加へて、ひら〳〵寒からぬ雪と、故郷の花暦は如何にしつる。（卅年作）

かこひの梅　（廿九年作）

飛んで北野の、うめ鉢は、
常世がなさけに、振あぐる、
斧に生木の、圍ひもの、
香にたつ浮名を、謳はれて、
格子戸うらむ、王昭君、

消えむともなき、新道の、
出口にのこる、春の雪、
狆が北やら、南やら、
覗けば憎くや、こぼれ梅、
月のころから、ころからと、
木履の音と、見かへれば、
燈火眠る、門の口、
枯柳の影に、ぢやらついて、
清夜に冴ゆる、鈴の音、
すねてはぢけて、腹立てゝ、

待つとはなしに、待宵の、
松は煙と、なるならば、
いつそ煽つて、さくら炭、
はねて消す手に、たゝみ算、
こつくり樣も、仕あきては、
膝は思案の、置どころ、
身を投節の、小唄にも、
人は容目より、心とや、
仇な素振に、ほだされて、
命とたのむ、花の兄、

二世の誓も、天神の、
髷にかための、銀かざし、
出雲に柘植の、鬚櫛に、
おくれ毛はらふ、甲斐もなく、
他所にひかるゝ、金衣の袖、
公子は染まる、紅梅の、
色は思案の、外とかや、
嗚呼かゝる身は、薄命の、
種をやどして、酸いものも、
甘いも嚙んで、眼をぬぶる、

女風情の、果敢なさよ、
嗚呼かゝる身は、來ぬ人を、
戀にやつれて、力なく、
忍び泣く音も、すてられし、
實のなる末を待つばかり。』

柳がもと

（廿九年作）

花の木蔭に、やすらへば、
旅のつかれぞ、知られける、

落花を袖に、はらへども、
　やつれをかくす、蔭もなし。
照添ふ月の、木の間より、
　光ると見ゆる、雪の肌。
寒氣立つまで、客目美きは、
　都の人と、見えにけり。』
折から聞ゆる、鐘がふち、
　その音も陰に、うちかすみ。
煙ぶる柳の、本末に、
　露の白玉、置きぬらし。

南無阿彌陀佛と、唱名の、
　珠數とりが啼く、東路や、
隅田川原に、村人の、
　大念佛ぞ、聞えたる。』
やあ〳〵そこに、こと問はむ、
　そもむら人よ、何故に、
かくまで厚く、この塚の、
　主の御靈の、とひ吊らひ、
我も誓に、もれずして、
こゝろの竹屋、渡守り、

邪正は一如、乘合の、
　舟におくられ、來しものぞ。』
追々めぐる、數とりの、
　我をも珠數に、かぞへてよ、
袖ふり合ふも、緣なれば、
　花の蔭にも、宿らまし。
一河のながれ、絶えずして、
　功德はもとの、水ならず。
御恩は世々を、ふる井戸の、
　底よりふかく、思ふなり。』

中にもことに、白ひげの、
　翁は座をば、つとすゝめ、
さらば由來を、明さなむ、
　いざ語るべし、都人、
みやこの人の、聞きまさば、
　袂を露に、絞らなむ。
哀れは他人の、上ならず、
　これも都の、人ぞかし。』
こゝの佛も、みやこの方と、
　やよなづかしの、人の身や、

露だに厭ふ、嫋竹の、
かゝる埴生に、根をうつす、
前世の縁に、からまりて、
われもいさゝか、値遇の縁、
問ふも語るも、世の姿、
變らぬ月ぞ、うらみなる。』
たとひ怨むも、その君の、
歸り來まさむ、由なきに、
月と水との、中の鄕、
うつらふ影ぞ、うらめしき。

見れど跡なき、うたかたの、
あはれぬ君を、慕ひぬる、
都の人の、心根は、
不愍といふも、おろかなり。』
御身も尋ぬる、人ありや、
無しやは知らず、都鳥、
言傳て置きて、この花の、
下に眠れる、塚のぬし、
櫂の雫と、消へたるは、
年も七とせ、稚兒姿、

唐輪にもなき、一輪の、
梅若丸は、散りにけり。』
素性を云へば、洛陽は、
北白川の、かたほとり、
吉田少將、惟房が、
公達とこそ、聞へたれ。
父のその名を、呼ばひしは、
日吉の神の、まをし兒と、
春待ち得たる、梅が枝に、
行末までも、契るめり。』

されども人の、身の末は、
明日待たぬ夜に、花は散り、
嵐に斷れて、行く雲に、
隱るゝ月は、追ひ難し。
父に後れて、たど〳〵と、
辿る山路や、月林寺。
螢をあつめ、窓の雪、
眼は他所に、ちらざりき。』
その頃東の、門院に、
松若と呼ぶ、稚兒ありき。

年はやう〳〵、桃、さくら、
　才はこなたに、劣るらし、
嫉むほどあれ、心合ふ、
　法師つどひて、梅若を、
道の苍に、うしなはんと、
　獲もの翳して、待かけぬ。』
神ならぬ身の、白川を、
　北に心の、急かるれば、
家路をたどる、暗まぎれ、
　立つか塒の、群千鳥、

寄せて一搏ち、羽がひじめ、
　葬めき捕らんと、進み來る、
その手をやみに、紛れ入り、
　譯は知らねど、遁げ失せぬ。』
道をえらばぬ、遁足に、
　都は遠く、なりにけり。
此處はいづくぞ、波寄する、
　大津の浦は、風寒し。
二十日の月は、横櫛の、
　雲にかくれて、黒髪や、

比良山おろし、影冴えて、
湖水の鏡、氷りたり。』
行くもかへるも、しら浪の、
岸に砕くる、音ばかり、
かゝるところに、陸奥の、
人買ひ業して、人の目を、
しのぶの藤太は、近寄りつ、
よき獲物こそ、えたれとて、
おもてを和らげ、僞りて。
東の方へと、つれ行きぬ。』

行けども家に、歸らねば、
あざむかれしと、悟りつゝ、
かへせ戻せと、賴めども、
鬼に涙は、無かりけり。
無殘やな、梅若丸、
綺羅にも堪へぬ、やさ姿、
海に山路に、行暮れて、
蕾のまゝに、凋みたり。』
斯くても代に、かへんとや、
日に〳〵弱る、朝顏の、

蔓より細き、手をひきて、
荊棘に血のる、足柄や、
身は籠ならぬ、箱根山、
手錠かけねど、荒鷲の、
磨ぎたる爪は、剃刀も、
あてぬ熊鬚、伸びたりき。』
時は貞元、二とせの、
彌生は今日ぞ、十五日、
隅田川原に、花散りぬ、
流れはもとの、儘ながら、

變るは人の、身の上や、
こゝに柳の、一本を、
後世のしるしと、とめ置きて、
亡せしは去年の、今夜なり。』
やよその稚兒は、失せしとや、
神もほとけも、あらぬ世か。
もしや〳〵に、ひかされて、
ちかひし事も、そらたのめ、
根にかへりたる、土塊の、
柳の糸を、ひくことは、

逆縁なれど、如何せむ、
　涙をまゝの、手向水。』
翁をはしめ、むら人は、
　いぶかりつゝも、問けらく、
御身は稚児の、知人か、
　問はでも知ろし、召さるべし、
われは童が、母にして、
　班女の前と、いふものよ、
夫にはおくれ、子に後れ、
　先たつものは、涙のみ、

われもむかしは、白川の、
　白拍子にて、侍りにき、
君がなさけを、扇にうけて、
　千代の要の、若君まうけ、
疇昔は向ふ、粧臺の、
　鏡に春を、浮べしも、
今日は粉膩を、いとし兒の、
　愛にすがたは、やつれけり。』
つまには後れ、子に離れ、
　秋の扇と、すてられし、

身の置ところ、無きまゝに、
東の空に、さまよひて、
氣骨も張も、夏過ぐる、
人の心の、冷たさよ。
世ぞうらめしき、斯くなれば、
戀も色香も、褪めてけり。』
なまじ我子の、あればこそ、
頼む甲斐なき、神たのみ、
ほとけにまでも、祈誓して、
僞りの世を、飾るなり。

煩惱なければ、菩提無し、
われはその儘、法躰の、
曇となるべき、さはりなく、
佛の道に、近づきぬ。』
さりとてはまた、如何せむ、
凡夫はもとの、まゝにして、
わが子は今も、なづかしや、
何故顔見せで、亡せたるぞ、
むら人頼む、大念佛、
經の功德の、若しあらば、

童のすがたを、現にて、
見せよとばかり、迫りたり。』
夜は沈々と、更け行きて、
月は朧に、かすみけり。
風習々と、咲き去つて、
花は眞白に、地に敷きぬ。
春は煙ると、見るまでに、
柳は暗し、塚の蔭、
鉦は眠ると、聞くまでに、
念佛の聲は、澄渡る。』

夢かうつゝか、班女の前、
おうなつかしの、梅若丸、
御身の髪は、漆のごと、
誰が梳き呉れし、玉の櫛、
振のたもとは、紅梅の、
花を散らしゝ、裾模やう。
嬉しやわが子、此方寄れと、
招けば靡く、糸やなぎ。』
姿は見えて、手に觸れず、
影は陽炎、痕も無し、

よし反魂の、香あるも、
　玄宗すでに、憾みあり、
班女が扇に、春留めて、
　花前に蝶を、舞はすとも、
風塵の逝くを、如何せむ、
　思へばこれも、夢なりな。』
次第に更くる、春の夜の、
　夢ばかりなるぞ、果敢なきや、
月落ち鴉、啼きつれて、
　曉寒き、川づたひ、

班女は覺めて、なほ夢なり、
　塚には落花の、露しげく、
鉦うち絶えて、水の面の、
　鷗の聲のみ、いと高し。』

浮世の影

（廿九年作）

愛憎も月に頬かむり、
　雲の斷目に横顔を、
見せては覗く懷中の、

かねは上野か淺草か、
つき出されたる父親の、
無心の門も三度笠、
佛の顔のおふくろも、
久離の金に露ぞ置く。
夜はハヤ更けて大川の、
水照る月も眠りたり、
代地に吠ゆるむく犬も、
廂の影に夢むめり、
來る若者の風俗は、

夜目にも白き單衣、
肩と腰とに牡丹花を、
浮き立つばかり染めぬきつ。
すれ違ひ行く美女の、
年恰好も世の人の、
目褄にとまる輕羅は、
瓦斯の光に洩れ透きて、
齒に衣るがごと美くしさ、
艶なとりなり目つかひも、
ぞつと身にしむ秋の波、

ひやつく風に粟立てば、
根がぐら〳〵の魂性の、
いつか悪魔に魅入られて、
所存の臍は夏の夜の、
氷と消へてあともなし。
えゝ儘よ、浮世はなべて色のこと、
酒ぢや〳〵とおでんやの、
屋臺格子は戀の關、
善と悪との追分を、
踏み迷ふたる分別も、

醉に威勢を後押の、
車は宙を飛んで走せ、
心は暗中を辿り行く。
腥風一陣、月は有耶無耶、
雲に影あり、人も無く、
宇宙の醒めて動くにも、
風の姿は見られたり。
かくても眠る車の上、
噫三つ四つ、弗と覺めて、
夢かと思ふ火の番の、

微に響く木の頭、
チョッ、いまいめしいと、
屹と見上ぐる板塀は、
松を廂の櫺子窓、
何處の誰かぐぢやらついて、
睦ましさうな影法師、
見よ！　見よ！　諸君、
神武以來變らぬは、
實に浮世の影ではある。

富士登山

富士は毎年土用中に登山するを好とすといふ。夏雲奇峯多といふことの詐ならで、朝の中は天氣清朗に一點の雲無き日も、午後の夕照より、富士の麓は霧深くなりて、裾野の御殿場すらも、山頂の全く晴るゝを見るは稀なりと。予の櫻谷黑田侯爵に隨ひて、登嶽を試みたるは、今茲八月六日の午後なりし、滊車の山北を過ぎて御殿場に着きたるは、その五時近き頃にもあらんか、風冷に、濃き霧は十里の野を埋めて、咫尺を辨かぬまで深く立罩め、樹も山も村も川も、一面の白色、馭者は馬車の先

驅となりて、手綱をとり、松明の火に前程を照して、闇より闇を駈け行くのみ、さて東口なる瀧川原を過ぎ、こゝより馬上の人となりてよりは、一入この霧の爲に妨げられて、松の青きも、七草の花の白きも、たゞ炬の火に照らされて、わづかにそれと明るきばかり、退之が潮州の賦ならねど、家の何處に在るをも知らで、馬の鞭てども前まざるを覺ゆるのみなり、

登山の口は四ッあれども、馬返しといふ名はいづれにもありて、今予が登れる東口にも、この處はありたり。その馬返しに近き丘より、霧霽れ雲消へて、月は出でたり、峰は流石に雲も去來の自由を得ざるか、夜の富士は玲瓏として、水晶の如く峙

てり、星河點々、氷の如く碧晏に横りて、影は麓の松に沈み、涼風は裙野より吹き捲りて、雨岸の虫の聲を送りぬ、馬は肅々として行き、人は誰も彼もこの荒涼の夜景に魅せられて、口に一語をいふ者あらず、馬返しに着きて、詩趣頓に加はり、太郎坊にいたりて、山は一段に澄みぬ。こゝより金剛杖によりて、稚松軟草の中を出で、漸々にして一合目の登り口に着きぬ。

こゝに來て驚くべきは、山の赤裸々なるにあり、樹といふものの一株も無く、習々たる風の薊の葉を吹くと、虎杖の花の白くして、五歩十歩、點々殘雪を印する如きものゝ外は、平沙十里、白衣の行者のたゞ月光を滿身に浴びて、鈴うち鳴らし行くある

ばかり、眼に入るものとては、一物も無く、路は漸う嶮しくなりて、二合目の石室を越してよりは、金剛杖を砂深く突き入れて、戛々たる物の音の、更けたる夜の空に聞ゆめり、三合目にいたりて、今登り來し麓の方を顧れば、愛鷹も箱根も山嶺は白き雲を劈きて、その影黒く見ゆるのみ、野も丘も折々雲の群立ちて、崩るゝが如きあり、湧くが如きあり、入道雲もあるべく、闇雲もあるべし、天地たゞ一色、白きは空よ、雲なるべし、觸れては搖ぎ、蒸しては騰れるか、一合目を蔽ひ、二合目を包みて、果ては予等が脚下に簇々として襲ひ來るを見たり、また勉強して四合目に登れば、雲も無心にその跡を追ふて、眼前咫尺

の處に進みぬ。

夜更けて月の澄みに澄めば、雲も漸う凝りに凝りて、波濤の如く麓を鎖しぬ。暫らくして曉風嶺を度るよと見れば、殘月光を失ひて、影次第に淡く、雲のみます〳〵雪の如く見えて、星墜つること頻なり、天明に間もあるまじと、黒田侯爵を始め一同石室の前に跼して、東の空を望めば、軟雲は蒸して二子山の裙に碎け、寶永山の麓に消えて、見る限りの天地は齊しく眼の覺めたらんやうに明るくなりぬ、黄なる雲の一片二片浮び出づるよと見る間に、旭日の昇らんとする邊の空の色は、金光を帶び來りて、その前に横はる雲は悉く黄金の糸もて、淡き緣を縫は

れたり、頓て團々として旭日は昇り、雲は一樣にその周圍に朝しぬ。日光を迎ふるの嶽色は紫に光りて、大なる佛像の端坐せる如く見えき。

斯くて七合八合を經て、終に絶頂に達したり、噴火の口には千古の淨雪あり、烈日も光脆くして、これを溶すの術無く、風雨もこれを瀆すの機無しといふ。されば白衣の人も、このところに來れば、慌しく厚き衣を襲ふて、金明銀明の靈水に俗膓を洗ふなり。予等の山上の石室に宿せる夜は、その一時頃にいたりて、寒暖計氷點下三度に下りしことありき、而かも三伏の炎天に於て、旭日岳の巖角に氷柱を見、劒が峯の下に皎々たる氷雪

の、夕陽に映ずるを見るを得るも妙ならずや。絶頂の岩室は淺間神社の側にありて、棟を二つに分ちたり、中には四五十人を入らるべく造りて、床に莚を敷きたり、夜はカンテラの燈火の下に胴衣を襲ひたる人の、顏の色の黃ばみたるが、此處に彼處に一團となりて、寒さを喞つも物凄し。折から空は怪しく搔き曇りて、頓て一白雨の來らんかと思ふ間に、麓の方は千重の雲に襲はれて、燁々たる電光の、寶永山の裙に閃き、闇を破り、靄を劈きて、天地兩斷、一閃稻妻の輝く毎に、山の態、雲の趣など、見え渡る光景の興ある。つゞいては殷々たる雷聲の山の腰を遶りて、麓に千波萬波の怒濤の岩を拍ち來れるか、左

なくては地軸の湧いて流るゝ如き聲のみして、頂上には雷も電も到り得ぬこそ面白き、斯くていさゝかの雨はかゝりぬらん、天風は驀然として吹き起りて、石室を吹き飛ばさんばかりに見えき、此の如きもの二三十分間もありなん、風は凪ぎ、星も出でたりと見ゆるに、麓はその儘に霹靂轟き渡り、電光閃きて、闇は一段の黒きを添えぬ。

天地未だ夜は暗く、殘月のなほあるに目覺して、齊しく起き出でたる石室の一行、時計を檢すれば、四時に近く、曉風更に肌に寒きを覺えて、寒暖計は三十度を下れるならむ、綿厚き夜着にくるまりても、なほ戰慄は止まざりし、予等は携へ行きたるパンと、罐詰の獸肉とによりて飢を癒し、汁二三椀を傾けて、微なる暖をとりつ、結束して、成就岳に登り、賽の河原なる湯氣を吹く地に横臥して、日の昇るを待ちぬ、絶嶺の日出は四合目より見たるとは、やゝその趣を異にして、雄大快濶、我人にあらず、羽化してその巔に至れるかの感あり、雲は萬重、宇宙を罩めて、天地白き中に、淡きは消え、凝りたるは日の前に朝して、金色の綬をうけ、その雲の低き處より、甲山駿嶺の峯のみを現じて、稍々迥かなる方は、蒼旻に續ぐ海なるべく、水も空も雲も、たゞ一色の中に、十尺の紅輪は躍りたり、何ぞ空に光彩を孕むことの長くして、而も雲を劈きて昇ることの速か

なる、一轉又一轉、團々として、幾重の輪を描き、曙光十方に映發して、乾坤みな紅く、嶽色は血の如く、雲は焔の如く、觀望する予等は燃えんばかりに美くしく、須臾にして中天に躍り了れり、六根清淨の聲は山に響きて、白衣の行者の巖角を下るも見えき。

旭日を帽緣に浴びて、一行は急ぎて山を下れり、八合目までは、巖石多くして、急行に便悪しきも、その七合目よりは「走り」と稱して、傾斜の尤も嶮しき砂路を直下するなり、金剛杖により て、一たび隻脚を投ずれば、體は自ら前なる方に進みて、一飛十尺、瞬く間に六合五合四合目の石室を過ぎ、三合目に着きぬ。

下ることの速かにして、登ることの遲きは、獨り登嶽のみにあらで、學者の戒むべきはこれなり、これよりまたも直ッ下りの一本道なれば、薊虎杖の花の中を過ぎて、忽ちにして麓に下りぬ、裙野は深き靄に包まれて、小雨もはら〳〵と降り來りぬ、太郎坊に歸り着きたるは十一時頃なるべし、晝饗濟まして、こゝよりまた馬に跨り、立出でゝ裙野にかゝる、馬返しを過ぎて、下界の雲は消えたり、松疎にして、野は七草の秋の今ぞ盛りに、花は白く飜れて、晝もなほ虫の音あり。玉穗村に憩ひて後、馬上風清き中を、悠々として田の面を行き、夕陽歸鳥、藁屋根に立つ暮煙を望みて、午後六時近き頃御殿場に歸り着きぬ、宿屋

の主人は予等の一行を見て、皆様結構なお山で御座りましたとは、その青天登山を意味したるなりき。めでたし〳〵。

木曾路の春

雲耶、山耶、旅寢の塒定めなく、立ちては泊り、とまりては、立塲につがする息杖も、駕籠か馬かの中を行く、木曾の河流は遠くして、その驛路もはるかなり、さる程にさても其後岡倉天心、川端玉章、寺崎宗山、劔持中洲とおのれとの同行五人、京よりの戻り道を、旅はこれぞと檜木笠、隱れ美濃路も忍ぶ身

は、人目をつゝむ黑小袖の、揃ふ氣合も旅鴉、眞似る鵜沼の宿はづれに、乞食に錢を呉れ行く春は、蝶うら〳〵と氣も寒からず、悠々として土橋を越すに、天高かうして空青みたり、揚がる雲雀の歌ぶくろ、ちよろ〳〵水を渡る風に、麥面白う波を寄せて、東風朶む帆の野中を行くは、川あるべしと、その名を問へば、あれこそ木曾川なり、山を出でゝ四五十里、こゝにて海の如くなれるが、彼方の下手に夕陽を射けて、青甍白壁、繪のやうに立てる犬山城の下を流る、いざ進ませ給へ、觀音坂の絶景は程遠からずといふ、崖を傳ひて至れば、路は水より高きこと千尺、松倒れんとして、巖石峙てり、遠く勝山の宿を見遣れ

ば、危橋夢よりも遙に、驛馬豆の如し、太田の渡を越して、御簡に宿るに、宵より小雨降り出したれば、翌朝は桐油笠の身繕ひして、日吉峠にかゝる、麓には雲の村々、捨て難き眺望無きにしもあらざれど、草臥れてはたゞ旅籠のみ急がれて、中津川町に宿りぬ、落合より新道を辿りて進めば、水近く山聳えたる中を、兎角して山口村に出づるに、龍巖と稱する名所あり、河中に島をなして、水碧潭に渦卷けり、柴負へる樵童の無邪氣なる、花にも鳥にも目は移らで、人の身の春行くも知らざりけり、賤母橋に至れば、馬籠峠雲に聳えて立つ、山窮りて、年老りたる松檜、路を狹んで晝も尙ほ小暗く、路はその腰を繞りて

溪流に沿ふて通ず、吾妻橋より飯田に出る路ありて、雪の駒が嶽遙に見ゆ。この夜須原に宿るに、盥に砂のざらつく、行燈の火の微かなる、旅の哀れはこゝらにありと、湯に浴れば混堂のうたてさ、善光寺詣の女導者が、髮を洗へる黑鬚附の油の浮ぶなど。東男の我慢のならぬ所なり。更けて夜風の寒ければ、炬燵に火を煽さして、木曾冠者が最期の昔を語るに、寢烏の闇に立てる、溪水の微に響きて、雲眠り人無き枕の閑寂なる、夜長うして年の如くなるを奈何せむ、明けてこゝを立出づるとて、村の男に春の何時來るべきやを問へば、梅も櫻も一時に咲き申す、花は都の五月中頃なるべしといふ、宜なり、時は四月の廿

七日、都も京も櫻は散りて、廿日は過ぎたり、さるを此地は未だ梅も咲かず、人は綿厚き衣を二つ襲ねて寒を爐邊に凌ぐをや。この朝も名物のとろゝ汁を、したゝか腹に辷らせ、優しき少女が賣來れる花漬を家苞にして、こゝを立町の宿を過ぐれば小野の瀧あり、岩山の間より落ちて木曾川に流る、なほ行けば滑川橋ありて、木下闇く苔露けし、寢覺めの宿は山の麓のやゝ開きたる所にあり、戸々名物の蕎麥切を賣りて、旅する人の草鞋を休めしむ、臨川寺より床山を眺望すれば、山の容、水の態、目も覺めぬべき趣あり、上松の宿を過ぐるに、木曾の棧今もその悌を殘して、芭蕉が命をからむ蔦かづらといひけむ碑と、山

の根に掛茶屋とありて、名物の蕨餅を賣りき、福島の町は家の數三四百もあるべし、昔はこゝに關所ありて、鐵砲と旅する女とを改めしとか、兎角女人は物議の種ヶ島と、二つ玉に見られしこそ可笑けれ、宮の越を出づれば、木曾義仲公舊里碑あり、風越山の麓やゝ小高き丘の、枯木立夕陽に黑く立つ中に、いと大やかなる碑のあれば、柵前に佇立みて、その文を讀む間に、何處より來にけむ忽然として二人の童子現はれたり、眉目清秀、義仲が幼時にも似たるか、手には白き紫なる花菫を摘みて、我に親しむ氣色の罪無さ、日は落ちて月はあらず、川原を見れば、馬を洗ふて歸るあり、托鉢の僧の靄に隱るゝもあり、この夕暮

の淋しきを巴か淵を過ぎ行くに、藪原の宿は闇なりき。今宵はこゝに夢を結びて、曉に村を立出づれば、朝の雲は峰にかゝれり、雲や何處と分け行くに、鳥居峠は風寒く雨さへ颯と落し來れば、御嶽の祠に嵐を避くるに、麓は見る〳〵霧に隱れて、たゞ石佛の嚴しきのみ、山の凄さを一入添へぬ、奈良井、贄川、洗馬より分れて、松本の城下に着けば、櫻は今が見頃なり、松に天守の聳えたる、昔の態の殘るも嬉しく、この夜は快く眠り、晨に快よく床を離れて、松城舘に知人と酌めば、永き日は午になれり、旅急ぐ身のいざとてこの町を出で、下押野に宿りぬ。左遷ならぬ身の、如何にしてかゝるいぶせき、葎の宿に泊

りけるかと思へば、柳屋といふ名の哀れにも聞きなされて、明くるを待ち兼ね、舟呼びて犀川を下るに、急流矢の如く、兩岸の風景繪よりも妙なり、繪にせば、何人の手に似たる、宋明の山水の如く、我朝にては文晁の筆に似て、頗る雄大の趣あり、舟行き景變じて、江南江北、村あり、家あり、煙を帶ぶる柳と、露重して散る櫻花とあり、青山は眠るが如く、赭山燃えて頽れんとするが如し、其氣色の妙なる、山水寺といふに至りて、趣全く一變す、山窮り水迫りて奇岩溪流を嚙む、翠微に亭あり、石門に苔あり、舟を維いで座して痛飲するに宜し、また急湍を直下するに、水平漫にして、景酷だ佳ならざれども、遠山

に雪あり、日輝く所、其色紫に、近巒に松あり、鳥飛ぶ時、その影黒し、崖低くして、村社杜に隱れ、舟緩ふして鷄犬の聲を聽くべし、河中に水車あり、山間に渡船場あり、新町より陸行するに、一里にして久米路橋虹の如く架り、犀川その下を流れて、不動瀧橋の上手より落つ、山の容の奇なる、松あり、花あり、景と景との取合せ好き、他に得難きの好景なり、この夜は篠井を經て上田町に宿り、翌朝別所にいたりて、安樂寺の四層八角塔を見しに、金碧を假らざれども、結構頗る雅致あり、こは開山樵谷禪師入唐の後建立する所にして、時は足利の初代なりといふ。境内瀟洒、人意を爽にす、温泉場の入口なる北向

堂に參詣群集、頗る繁華場たり、國分寺は上田より二十町、昔の俤をとゞむるもの僅に古瓦、三重堂やゝ古けれども、本堂は見るに足らず、上田の城も大方は取毀たれて、わづかに一廓を餘せるのみ、しかも柳は翠にして、花は年々紅の色を染むれど、幾多の英雄、その國と共に滅びて、山河長へに空しく在り、君見ずやあれあの川中島、船頭蘆荻に船を維いで鳥立つ中に、悠々昔を夢むものあるを、あい〳〵左樣で御座いと、友の云へるを半は茶にして、長野に着けば、停車場前の雜沓は言語に絶えたり、茶屋の檐に花を染め出したる暖簾のひらつく、床几には如來の影賴む爺婆の一群二群、宿引の男に導かれ行く後にな

りて、われも後光を便れば、只ある高樓に導かれぬ、躰裁拙俗、鄉に入りては業腹も養されずと、酒に旅の苦を忘れて、欄前に暮るゝ日の遲々たるを恨み、坐に入る春風の醉を吹くを喜びつゝ、明日は久々にて故鄉に歸らむをのみ心賴みにして、宴をたゝみ、月の黑きに乘じて、善光寺に詣でぬ。たゞ看る闇に本堂の黑裝束、星と輝く兩眼の常燈明を便りて、階段を上り、堂內に進めば、通夜とか唱へて、佛の御前に稱名申して、明朝の日の出を待つなる男女の、蛆虫のやうに寄居たるが、作りし罪を滅さんとて、懺悔し合ふもあれば、廊下を巡る不寢番の爺の、節哀れ氣に、ナマダブ〳〵と百萬遍を唱ふるもありき、堂內に

は天井に吊せる紙燈一つのみ、光明十方を照さず、隅々の小暗き方に幢天蓋などの、ちら〳〵眼に入る外、闇中物色無ければ、氣澄み神眠りて、世を厭ひ俗を惡みする人の、如何に信仰を深うするならむ、人定識なければ迷信深し、迷信は闇なり、信仰は火なり、されば今宵通夜する輩の、この薄淋しき大堂に、この星の如き一道の火を賴みにするは、なほ道に迷へる旅客の野に燈火を認めしが如くなるべし、しかく安心して眠らば、夢には繪に見馴れたる如來の來迎もあるべく、經文の中の極樂にも到り得べし、畢竟邪正は一如、榮華も遊山の酒の泡、花を散すまでは吹かぬ春の風に消ゆる間こそ、夢なれ、浮世なれ、觀じ

來れば義仲も幸村も謙信も信玄も、榮ふる中は醉心地、醒むれば矢張熊八同樣の土饅頭が關の山ぞと、悟り顏して東都に歸れば、右にも左にも英雄豪傑の鼻突合、木曾の冠者、渠何者ぞ、僕も人なり、奴も人なりと、鼻蠢めかする人の多くて、實に住まば鼻の都なる。（卅年作）

鹽原の夏

天河只南樓の上を流れても、晝の日中は、人間一滴の涼味も無きに、夏知らぬ里もがなと、地圖を展べ、名所圖繪を披きては、

何處が尤も涼しからむと、目を圓くしても探りあてず、九尺の矮屋に、五尺の御本尊、偏袒右肩で、後光形の團扇を閃かせど、風も馴れては涼しからず、何か寐轉んで居て、そして涼しき工夫はあるまいかと、赤坂の御前に相談に行けば、多忙君の如きにして、尙且この炎蒸を苦にし給ふか、況んや予の如き英雄無事に弱り居るもの、如何でか、門を出でゝ高樹月蒼々たる淸興無かるべけんやだ、で、斯くは云ふやうなものゝ乙羽子何處にしやうかと、同じやうに問はせ給ふ、旅通の僕天窓を搔く所を、三太夫の泉谷君、原大隅的の橫槍を入れていふ。そは鹽原にし給へ、山に據り水に臨みて、風欄干に滿てり、獨り涼しい

といふのみならで、見ぬ風景の優しさには、寫眞の種の十や二十は殖ゆべしと、夜見世で買つた漫遊案内を朗々と讀み上げては、名所舊蹟の所在を、掌を指すが如く辯じかくる。善哉善哉、然らばその鹽原こそ好からめ、さァ行く段になつては、善は急げぢや、明日の一番といふ短兵急なる仰せに、僕も閉口して、我が家に歸り、その夜は二時まで、留守中の準備をなして、夏の夜は未だ宵ながらの、明方に停車場に行かんとす。これは困つた、今朝見れば、靴下は破れ、洋服また汚れたり、あれかこれかと、少しは男も打扮つて見たく、當年廿幾歳といふ、花の盛りを、木綿縮の洋服とは、さて〳〵情無き旅仕度なり。上野

に行く。入口に舶來の仁王尊立たせ給ふ、誰かと思へば、光村君に泉谷君、精悍しき旅打扮にて、我の遲きを待詫び給ふ風情に、手を握りて、乘り後れざるを喜び合ひ、いざとて汽車に乘り移る。王子は朝靄の消えぬ間に過ぎ、大宮は寢込みの客の目の覺めぬ間に、通り拔けたり、右と左を振返れば、光村君は眠り轉けて、利根川を渡るも知らず、泉谷君亦哲理の幽玄に入て、ムニヤ〳〵の境を出でず、傍の八木君のみは、小說本に眼を曝して、汽車が何處に止らうと、一切に頓着なく、僕獨り窓外に眼を特派して、何か面白き獲物もがなと、氣を注け居れども、更に無きこそ無殘なれ。頓て宇都宮を過ぎ、絹川も渡りて、西

那須野に至る。我が黨曰く、此處だ〳〵と爭ふて汽車を下れば、光村君の從僕も、寫眞機の荷物を提げて來り、一同茶屋に憩ひて、晝餐をまたゝむ。隣室に才子佳人あり、僕想ふに旨く遣つてらァと、折しも幸ひ開け放ちある境の紙門に、端なくも目を注ぎて、その容躰を見奉れば、顏の色黑からず、白からず、恰度その中を往きて、脊亦低からず、圓顏にして、而かも愛嬌あり、帶も衣裳も小奇麗にして、鹽原の根生とは見えず、男は三十二三位の意氣な肌合、いづれ色の戀のと曰くのつく身の上と邪推して、さて熟々とその容子を見れば、行儀作法に隔てあり、禮亂の掟あるなど、乳繰の駈落者とも見えず、湯治人とも

思はれず、さりとては明治の高尾の江戸への身賣かと、また氣を廻して男を見れば、垢拔けのした工合、女衒も仕かね間敷き男振に全く身賣と速斷して、暗涙數行に咽ばんずる刹那に、その男僕輩を紳士と鑑定したか、貴君方お宿は何處ぞと問ふ、舌切雀ぢやあるまいし、お宿は何處ッて、ナニサ、アノ楓川樓だと、澄し切つて居れば、その男懇ろにお辭儀していふ、私はその楓川樓、お途中を御寫眞ならば、前に參つてお待受いたしまするといふ、そんなら貴君は楓川樓か、トウ〳〵僕等も乘せられたと、約してその家を出づ。同行五人挽手いづれも老人なり、僕の乘れるは五十八歲、瘦せて枯木の如き老爺の、汗に塗れて

行く形、御苦勞なり、三里の那須野、テントにすべき日蔭も無く、路は野徑の石高道、車のガタツク毎に、居眠せる先發隊の、吃驚して目を覺すも妙々、途上孤村あり、こゝに休む。その家鷄を飼ふ。今生みたる玉子ありといへば、三つばかり買ふて啜るに、中に一ついと大なるありて、打割るに二ッ子なり、茶屋の老婆目敏くも、それを見つけて、二ッ玉ならば、價は二ッ分戴くべしとて、客の得にはさせぬなど、なか〳〵機敏なものといふべし、ふうせん樓といふがあるのに、鐵道馬車だも無きは、この村の人の敏捷にも似合はぬ事ならずやなど、愚にもつかぬ洒落をいふも、旅の耻なりかし。關谷にて息を入れ、疲

れたる車夫を代へて、山坂にかゝる、やゝ登るに箒川の裾、木の間に現れて、日に白く照り渡るを見る、なほ行けば瀧あり、橋あり、谷川の流れは遠く脚下に聞えて、飛泉なほ山の腰より落つ、兩側の樹と樹枝を交へて、日を蔽ふ廂となれば、谿より吹き上ぐる風の、一度は水を渡りて、涼しきこと夏無きを疑ふ。送り迎ふる景色に、自と後邊顧られて、遲々たる足に日脚は早く傾きたり。山深くなるにつれ、水漸く近ふなりて、見か淵に至れば、目も覺むる心地す。我は幾回か畫中の人となりて、光村君の撮影に遇ひながら、端なく此處に來れる時は、實に神工鬼斧といふ文字の、世をも人をも欺かざるを感じたり。深潭水

を湛へて、色藍よりも翠に、巖の上には、危き松の、崩れんとして、尙ほ支へられつ、山は半面の夕陽を帶びて、明るきは青く、暗きは色も黑かりき。私等は畢道を歩きながらも、淵の底を覗きては、戰き膚も寒かりし。頃しも夏の末にして、山は楓林の晩ならざるも、車を停めて坐に愛惜の情に堪えざれば、茫然と立ち盡すこと半餉、いざと衆に誘れて、なほ山深く踏み行けば、水近ふして凡ならず、山聳えて樹瘦せたり、崖には綠の苔を疊み、流れは岩を嚙みつゝ吠ゆ、路は曲りて弓絃の矢を射る早瀨の川上に、洞門一つ露はれ出づ、未だその洞に入らざるに、橋あり、瀧あり、深澤あり、小暗き方に瀧白く、寒凄橋は

古く寂びて、澤より吹き捲く夕風の、白雲洞に入るかと見れば、夏も寒さに縮みぬべし。材木岩を摩でゝ見つ、原に出づれば、歩みも早く、福渡戸に入る頃は、日もハヤ暮に近づきたり。福渡戸には貴人の別莊多く、驪山宮の俤あれども、我等が宿とすべき楓川樓は、なほ半里の遠きにあり、湯町を過ぐれば野立石あり、こゝより川下を眺むれば、湯の繁昌、水の奇態、まつた向山の松の、木振枝振まで、一目に見ゆる面白さに、小橋を渡りて茶屋に憩ひ、澁茶に咽喉を濕しては、勇氣を皷して登り行く、道に高尾の墓あり、高尾は西湖の蘇小と同じく、姿色兼ね備り、聲望一世に持囃されて、遂に身をこゝに遁れたるもの、

三叉川の下斬は、全く芝居の嘘也と傳ふれども何方が何うと、今は軍配の揚塲に困しむ。斯くして一同絶景に遇ふては一句も無く、たゞ妙々の聲のみして鹽卷も過ぎ、古町に着きたるは、午後六時にも近かるべし。町に入れば、湯の匂ひと湯槽をめぐり歸る人と、賑はふ中をまた通り抜けて、幽寂閑雅の楓川樓に入る。至れば最前の才子佳人、今は門外に迎へて、二階の上段に我等を安置す、正面なるは光村君、ドンカラとコンカラとは僕と泉谷君、別に矢大臣として八木君と關本君あり、但しこの處木像の格を離れて、護謨製の本尊と變り、伸縮自在、存分に手を伸ばし、足を伸して、一同湯に浴る、夜に入り、欄に倚れ

ば、前山屏風の如く峙て、黑き中を流るゝ水は、燈の火を射けつ、その色雪よりも白くして、而かも凄からず、風無きに暑からず、蚊無くして、眠るを妨げず、夜食は主人が我等の爲に、特に關谷より齎せる鰻の蒲燒の、江戸前なるも嬉しく、酒は泥醉せむことを恐れて、禁止のお觸も出でたりしが、この山中叛逆の族もあらざるべしとて、僕の爲に純葡萄酒を取寄せて飲まる、その席に最前の佳人現はれたり、その前觸に曰く、もう出ましたよ早いでせう。そんならお前は今日來たばかりかと、給仕人の初物にも、私等は慥に七十五日の生延は請合なりと、手を拍て喜ぶ、膳を下げてよりは、名々得意の放談に時を移して、

二十日の月の山の端に昇るを見、虫の聲の後山に高きを聽き、酒無かるべからずと、水漬けの麥酒を二三本倒して、僕と泉谷君尤も醉ひ、設けの臥房に入りたるは、清風白露、夜もあゝ更けて後なりき。翌朝早く目覺して、枕を欹れば、水聲雨と訝る、跳ね起きて雨戸明くれば、日は高く昇りたり、朝の雲は山を出でゝ、川の水と白さを比ぶる涼しさ。見れば野渡ならねども、舟自ら横りて、上下に人もあらず、必定私等の爲めに設けられあるなりと、天に謳ひ地に喜びて、櫂を押さんとせしが、疊水練の舟子、萬一を恐れて降參す。さて一浴して弗と思ひつきたるは、これより會津に出でんことなり、地圖に據りて深く

考ふるに、顧ふに左まで遠きにあらず、いでや、この地に逗留せむより、一騎駈の功名して、勇を天下に誇るべしと、決心の由を光村君に語れば、止め玉へ〳〵と制せらる。さりながら僕の意已に決したればとて、人夫を賴めども、會津に行かんといふ者は一人も無し。如何はせむと思へども、一旦發起しては、思ひ止まる事を肯ぜざる僕、人夫無くんばよし、僕その七ッ道具を引つ舁ぎて、尾頭峠の難所を超えて見むと、用意の脚袢に、精悍しく打扮つ、楓川樓を出づれば、光村君も泉谷君も、さらば我等もその途中まで送らんとて、二僕を從へて、その家を出でらる。二三町にして、四君は道案内者と共に源三位の穴に入

るに、僕のみ獨り友に別れて、枯蘆の洲を立ちかぬる鳥の、なほ古巣を離れ難き思なりしが、斷然として決意し、五六貫目もあるらむ、荷物を肩にかけ、石高道を泥靴に踏み轟かして、雲の行衛を追ふたるは、我ながら勇ましくも、小氣味好かりし。さりながら荷は重し、暑さは金も鎔けぬべき空摸樣、雲の蒸して、奇峰となうて崩るゝなど、雨あるべしとは思はるれど、風は死して、ソヨとの音も無く、肩痛み、足は痛む、ハヤ八九町も來たかと思へば、到底その苦に堪えずして、只ある一軒茶屋に息を入れ、人夫やあると搜せども無し、進退こゝに谷つて、我も宇治川ならぬ箒川に、敗軍の將とならむかと、天を仰いで

大息する時、村役場の小使にもあらむか、同じくこの茶屋に憩ひ、僕を官吏と見てとりてや、慇懃に辭を交す。僕思ふ。よしこの小使に賴まば、よも厭とは云ふまじと、門搆へをヌキにして、眞平に賴めば、宜しう御座ります、いづれこの上の御測量遊ばしますのでせう、隣村まで負ふて行て進ぜむと、僕を測量技師と見違へての鄭重は、可笑しくもあれど、苦しい時には、神佛樣とまでに、尊く見えしも心がらなりし、南無源三位の穴賢。（廿九年作）

江楓漁火

春咲く花は種々あれど、柳散り梧落る秋の暮には、霜に驕る齡ひ草の、殊勝氣に吹き匂ひぬると、谷川に錦を懸くる紅葉のみ、せめてもの眺めなりけり、されば菊は隱逸なるものにして、淵明が愛を惹き、東籬の君子とたてらるれば、唐の寒山寺の楓葉は、月落ち鴉啼いて、愁眠を客船に驚かしむる名はあれども、それは異邦の名物とて、見ねば眞にもうけられねど、高雄通天の秋色、何如でか彼れに劣るべきや、年々歳々十月の末つかたより、十一月のなかば過る頃までは、土一升に金一升なるお江

戸の地にも、造菊の觀世物あれば、海晏寺瀧の川なんどゝいふ紅葉の名所あるなり、しかも其地の土魂は升に量る程の、錢臭き塲所にもあらで、瀧の川はかけ茶屋、床几に、澁茶啜る俳諧師が即吟の一句に、邪魔者も無き片田舍なれば、海晏寺また品川村のかた邊に、帆かけ船漕ぐ鮫洲の沖を見晴しの小山、無常身に染む門前の鐘に、旅の男が腹をなぐつて、そゞろに楓林の、晩を急ぐ東海道の初の宿、一寸先は闇の夜に、刑塲の初時雨を松風と齊しく聽く、鈴が森のとほりにありて、江楓漁火客の魂を飛ばすこと、豈それ寒山寺の比ならむや、たゞ團子坂の造菊のみは花の風雅より出て、俗人の懷中を探る、役者似顔の

細工物、近頃大に流行出して、巣鴨染井邊の植木屋は大抵これを造るなり、歳事記にもこの造菊のことを記して、文化の末巣鴨の里に菊花をもて、人物鳥獸何くれとなく、さま〳〵の形を造る事時行出して、江府の貴賤日毎に群集し、道すがら酒肆茶店をつらね、道も去りあへぬ迄賑ひし頃、父とともに此わたりめでありきしも、幼き頃の事にして、今は甘とせの昔とはなりぬ、其後二三年にしてこの事絶たり、されど常さまの花壇は、今にかはらずして年毎に盛なりとあり、又嘉永四年の板本東都遊覽年中行事にも、九月の景物に此處の菊造の事を入れて、近年再び形容の作り菊はやりて、年々新らしきたくみをなすと記

せり、海晏寺は古くより紅葉の名所とたゝへられて、紫の一本、東路鹽土傳にも此處の名を擧げ、享保板本吾妻路の記には海晏寺楓樹千株有と記す、そも〳〵この寺は北條時頼の開基にして、建長六年の創立にかゝる、寺記云後深草帝御宇建長三年申亥五月七日此地の海中より鮫一口、漁夫の網にかゝりて上れり、腹中より聖觀音の靈像を得たり、此事鎌倉へ聞えしかば、時頼朝臣希代の事とし、是祥瑞なるべしとて、其邊に佛閣を闢かれ、觀音の淨土なればとて補陀山と號し、四海安平の義により海晏寺とせらる、同六年の春諸堂落成し、翌る七年入佛供養を修行す、又時頼朝臣南北十二町東西十町の地を寄捨ありて、

五箇の僧坊に百八十貫文を附せらる、八十宇の房舍は巍然として甍をならべたり、殊更重罪の輩たりとも當寺に入者は、其罪を免許すべき則を定給ふ云々、紅葉も最明寺入道が植置かれしと云ひ傳ふれど、今は若樹のみとなり、僧坊も昔時の樣とは變りて、いと物寂びにき、されど晩秋の頃は滿底錦繡を晒すが如く、海越の山々は紅の葉分に見えわたり、蒼海夕日に映じては、又紅を濯ぐが如く、岩倉朝臣が墓の石を照り返して、千萬燈を點すかとも怪しまれ、地は墳塋の間なるも、人は醉色ならざるなし、江戸砂子に當時の紅葉を記せるくだりに、蛇腹紅葉、千貫紅葉、花紅葉、淺黃紅葉、菲梅紅葉、猩々紅葉、の種類あ

れど、たゞ見てはそれかとも判かぬなり、太宰春臺曾て題二海晏寺楓樹一の詩あり、

古剝楓枝簇二晩霞一。深々庭院駐二年華一。那知秋後風霜色。却勝江南二月花。（廿二年作）

雪のふる郷

我が故郷は實に雪のふる里なり、三春落花の頃となるも、不忘の山には、なほ鹿の子班の白きもの殘りて、羈人の袖を撲つさへありき、されば洛陽に客となりて、妝前に月光を看ては、舞

鶴城外の霜と疑ひ、水神の森に鶴氅を着て徘徊する人に逢ふては、炭焚く人の苦しみを思ふこと久し、今茲十二月四日は如何なる吉日ぞや、胡馬北風に嘶きて、我の故郷に歸り去らんとは、

春を得てはなすり衣重ぬとも、我がふる里のさむさ忘るな、と

はこれ我藩の御先代上杉治憲朝臣が、孫娘お三の方の江戸へ初て赴かせたまふ折の餞の歌なり、我東の都に客となる六年にして、歸郷すること四回なり、斯くてもなほ故郷の懷かしきを、

吁嗟禹王はこれを愚と笑はんか、

庚辰極月四日未明上野を發足して羽前の國米澤に向ふ、瀛車白

河を過ぐれば、陰雲密々として白雪風に飛ぶ、東都は未だ落木し盡さゞるに、此地に來りてこの慘憺の光景を見る、以て故郷の寒さ烈しきを想ひやるべし、薄暮岩代福島に着く、日全く曛ざれば腕車を雇ひて庭坂村に至る、行くこと一里許にして夜に入り、月未だ昇らず、泥濘深く寒風鋭くして路捗取らず、佐々木野の松林を過ぐれば、雪の積ること五六寸、車輪深く埋れて人夫の困苦云ふばかりなし、三時間餘を費して漸く二里半の路を辿りつき、丸本といふ旅店に宿かり、炬燵もて暖をとり、晩餐を喫し了りて降雪の多少を問ふに、後山の頂は雪深く風烈しくて、明朝は容易に登るべからず、すでに今日抔は郵便脚夫す

ら往來を見合したりといふ、我は道案内夫を雇ひてなりとも、明日は力めて米澤に着きたしといへば、宿屋の主人苦笑ひして、命惜うはおはさずやと云ふ、驚き怖れて臥房へ入りぬ、翌朝は未明に起出で冷たき水に嗽ぐに、殘月筧の水に映りて、その影の物凄き、闇夜に白刃を閃かすが如し、さりながら後の山は雪霽れて、風木の音聞えねば、心安堵して暫時家人の起出るを待てば、旭日きら〳〵とさし昇り、大空は藍を流せるやうなれば、これにいさゝか力をえて、今日こそは遲くも故郷に到着くべしと急ぎ朝餐をしたゝめ、握飯を用意して、前夜頼み置ける道案内夫の來るを待ちつゝ、九時を過ぐせども三四日降り續き

たる大雪に、山路は未だ人通りあらずとて容易くは來ず、漸く十時に近き頃案内する男來れば、二人して宿屋を出でたり、行くこと數十歩にして山路嶮しく、進めば進むに隨ひて雪深く峯高く、行人全く絶えぬ、路は村の樵夫が大股に歩み行きたる草鞋の痕の、二尺三尺づゝへだゝりて、ちらほらと一文字を殘す、なほ登る一里許霧烏といふ處に至れば、雪に埋もれし藁の屋より炊く煙の低くたなびくを見る、近づきてそが家に入れば、丸木もて建てたる一軒の小屋あり、四十歳許の媼と同胞にやあらん、七つ八つの男兒二人住みぬ、家の前にはこの往還を荷を脊負ひて業とする者にや、五六人の男女の憩へるあり、我は案

内する男と共に藁火焚きて、濡れたる脚袢と草鞋を乾かし抔す
る中、傍に侍べる媼の大息つきていふ、今年の初雪ほど長降せ
るはあらず、先月廿五日の夜より昨日まで十日餘、小歇みもせ
で降續きたり、されば深山に薪樵り嶺蔭に炭焼く人は、里に出
ることもならで、餓え凍えて雪の中に斃るゝ者も多からんが、
そが中にいとも哀れな話を江戸の御方聞き給ふべし、昨日の正
午頃吹雪は紛々と舞ふて溪を埋め、峯より颪す寒風は利きこと
刀を揮ふがごとく、廣野の粉雪を吹き立て搔き上げ、咫尺も判
かぬ程なれば、麓よりの通路全く絶えて、家さへ人さへ木葉微
塵に吹き飛ばされんばかりなる中を、助けてよと苦しき息をつ

きもあへず、我家に入り來る男あり、誰ぞと見れど知人ならね
ば、驚きながらも温水を與へて渇を凌がせ、藁火焚きて暖めや
るに、凝れる衣より雫滴りて水を浴びたるごとく、凍えたる手
は脈さへもいと微かなり、吁嗟好き折にこそ來たまひし、今一
時遲かりせば、御身は凍えて果てたまはんものをと慰めつゝも、
危難のあり樣抔聞くに、この男は憐村に住む某の忰にて、老ひ
たる父母と共に、一里許山奥に炭焼きにとて登り居けるに、俄
の大雪にて里へ下ること難く、兎角する中粮食歇きたれども、
山をば下るすべもあらねば、明日や霽れん、今宵ややまんと、
一日二日と餓を忍びて霽間をのみ待居れど、陰雲漠々、日毎に

風雪の烈しうなるばかり、日の影さへも見ることならねば、これにては座して死するの外なし、いで麓まで下らんものをと、四五日以前父は萬死の嶮を冒して、里ある方へ下りたまふ、其後幾日か經たれども安否を知る由あらざれば、我も母のみ一人殘して、山をばとぼ〳〵下りしに、吹雪一層烈しくなりて、歩み惱み居る折から、同村須田傳十郎の子息二十八九歳なるが我が跡を追ひ來り、予も食はざること七日餘、餓え凍えて、この峯蔭に死なんよりは、御身と共に麓へ行かん、伴ひてよと打凋れて云ひしかば、こゝより凡そ半里許距りし、赤坂てふ坂道にかゝりける時、峯より吹きおろす風の強さに、雪深くして進む

べからず、我も須田も其處にて死ぬべかりしを、共に勇氣を惹起して、なほ連れだち來りしかど、もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、一所にたゝずみて、袖なる雪を打ち拂ひ、うち拂ひて、暫時息をば吐き居けるに、須田は餓えて歩み難し、予は此處にて待つべければ、御身のみ麓へ下りて、握飯を七つ八つ遺してよと、悲鳴の聲と諸共に、深雪の上に伏轉びて、氣息殆んど奄々たり、我は驚き須田の身躰を抱き上げ、肩に舁ぎて又も二三歩進み行く時、一吹き荒む風雪に、須田はうんと苦叫くを最期、其儘撞と斃れける、我は屍に未練殘れど躊躇へば、此身もいと危うきに見捨てゝ過ぐるに、早くも雪に埋

もれて、屍の色さへ見えざりき、我のみは漸うの事にて、此處まで參りぬと、涙を拭ふ、この時夫も家に居ければ、いざ其男と共に屍を堀りに行かんと逸れど、吹雪ます〳〵烈しくなりて、終に其意を得ざりき、今朝になりて隣村に至り傳十郎の家の者を集ひ來り、先刻堀りに往きたれば、今暫時待ちたるならば堀中てゝ歸り來べしといふ、されども我は前途急ぐ旅の者、一所に永く止り難ければ、頓て其家を立出で、五六町餘も歩みしと思ふ頃、須田の屍を堀中てゝ山を下り來る人々に逢ひぬ、二人はこの哀れに袖を絞りて、なほ行くに路ます〳〵嶮しく、雪愈々深くて、一歩足を失すれば股の邊まで埋もり、汗流れ息

苦しく、足は凍えて指墜るが如し、李平村に着く、宿屋を出でゝ僅に二里、三時間餘を費しぬ、此處にて晝餐を喫べたれど、持來し握飯はなほ萬一の準備にとて、肌身にしかとつけ置き、それより新に案内夫を頼みて進み行くに、次第〳〵に山深く風寒く、身躰疲れて心地死ぬべく覺ゆ、漸う產が澤といふ救助小屋に着く、こゝより舊米澤領なり、昔時はこの一軒家へ扶持米を賜ひしとか、なほ進むに見上ぐるばかりの大木の道に倒れ、小山の雪崩したるを見たり、三時に近き頃板谷村に着く、鷄卵三つ四つを啜り英氣を養ひて、また案内夫を代へ、板谷峠にかゝる、この山郡内第一の難所なり、村外れより路嶮しくなりて、

登り行くこと、月の世界にも屆かんかと思ふ、山蔭の窪き處には雪の積ること三四丈、兎角して絶頂に登れば、平八町と稱する處あり、山神の祠あるの外滿目樹木を見ず、風烈しきため、頂には雪少しも積らで枯草の離々たるを見き、その寒きこと肌も寸斷せらるべし、下ること半里、また二軒の救助小屋あり、俗に此處を二軒助けといふ、古より旅人の難儀を救ふために設けたるなり、火を焚き草鞋を暖めて進む、日ははや西に傾きかゝりて、雪に白き山の容は紫色に見え、松吹く風の習々たる響は、谷河に谺する水の音に和して、心細さかぎりなし、駒形嶽といふに至れば、暮色蒼然足下より次第に暗くなるに、雪道の

歩み惱む後の山に、食を求るか狐の啼く音悲し、なほ行きて郵便脚夫に逢ひぬ、渠道を讓りて二人の過くるを待つ、これ無勢なれば多勢の旅人に道を讓るは、雪道行く者の禮儀なり、漸う大澤村の入口に至るに、雪に斃れし死馬を埋むる村人に逢ひぬ、茶屋に憩ひて濡れを乾かすに、足重くして歩み難し、日も暮れたれば宿假らんかと思ひしかど、さるにては故郷の兄御の心痛したまはんをおそれ、晩餐喫べて提灯かりうけ、案内夫を我が家に宿らすことを約して發足するに、夜色黑ければ路分明ならず、幾回か伏轉びつゝ、果は燈を失ひければ、闇夜に杖なく、殊更近眼の悲しさは盲目の川渡りする如くにして、ついに山を

下りぬ、人家あれば火を乞ひて、お先坂まで行くに、橇をひける痕ありて、路の幅も二尺あまりあれば、二人は始めて生ける心地し、喜び勇みて進むに十八夜の月後の山に昇りて、前程を照すを見れば、橇の痕の月影に閃く樣は、軌道の踏切を歩む心地せらる、羽黒堂村を過ぎ、白旗松原に入れば、松の梢に月のかゝれる景の面白く、旅の疲勞を忘れて、清光を辿り行けば、露ならで袖にかゝるは粉雪なりけり、半里あまりを歩むに、古の仕置場に出たり、雪に淋しき地藏尊の殘りある、遙に火影のちらつく抔、無縁の佛の忘執かと見ゆ、近山霽れて夜も峰の嵐を聽くべく、田家遠くして人行稀れなり、其處を過ぐれば

はや米澤の入口なり、次第に我家の近くなることを喜び、松川を渡りて福田町に入るに、案内する男餓えて一歩もあゆみ難しといふ、彼方に生蕎麥賣る家あれば、直と入りて食べをはり、東寺町は路すがらなれば、菩提寺に立寄りて、亡父母の墳墓に詣で、九時過ぐる頃、立町なる我家に着きけり、緣ある人々をはしめ友なる人數多打寄りて、我の歸りを今か〳〵と待居る折なれば、皆一齊に喜び起て、左右より草鞋の緒を解く、一人を誰ぞと見れば去年までは振分髪なりし女の童の、脊丈大分伸びて、髪も銀杏とやらに結び變りたる姪の菊子なりける。（廿五年作）

ながれの末

春

花咲いて鳥居小さく見えにけり

出女の桃によりたる姿かな

春雨の竹屋河岸から降り出しぬ

乞食のつゝれの上や春の月

凧の星を掠めて殘りけり

狗脊（せんまい）の綿搦る妹の鄙びざる

おぼろ夜や童橋越す文使ひ

下町や番傘つゞく春の雨

星明りこゝにも梅の二三輪

朧月ばら〳〵松に燈（ひ）の見ゆる

夏

一入して淋しいか僧の蚊遣焚く

煙突の田の面に赤き暑さかな

夏の月隣の孫を見知りたり

最明寺殿紙帳參らせん貧の宿

蚊帳鈎りて廻行燈眺めけり

日盛や赤土山を登る人

短夜は舟のとまから明けにけり
若草に石あしらふて鹿の子かな
門川や古下駄に蛭の放れもあへず

秋

結ひ立ての野郎天窓や秋の風
竹二本月吹き分ける秋の風
あばら家の壁に月ありきり〴〵す
柳ちる小川に秋は流れけり
山痩せて水音高し秋の暮
萩咲いて陶器の鹿をあしらひぬ

かまきりの五分をも引かぬ心かな

冬

枯木立また枯木立村のある
杉一むら雪に明るき伏屋かな
牛を追ふ聲暮れてゆく雪の村
雪の庭南天の實のたゞ赤き
ほし店のカンテラ寒き夜更かな
いてふの樹の箒となりぬ冬の月
枯柳ヌッと立ちたる野川かな
寒月や一トかたまりの勸化僧

盲人の河岸傳ひ行く霜夜哉

年忘れ我はいくつになりたるぞ

若菜籠　終

明治三十一年十二月二十五日印刷
明治三十一年十二月二十八日發行

著發者兼發行者　大橋又太郎　東京市小石川區戸崎町六十一番地

印刷者　掛川元明　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

定價金廿八錢

發賣元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

博文館發行圖書雜誌賣捌所

◉特別大販賣所

東京　東京堂
大阪　盛文堂

◉特約大賣捌所

東京　東海堂
同　北隆館
大阪　吉岡平助
京都　東枝律書房
名古屋　川瀬代助
熊本　長崎次郎
鹿兒島　吉田幸兵衛
神戸　熊谷久榮堂
同　吉岡支店
廣島　積善館支店
博多　積善館支店
同　森岡書店
長野　西澤喜太郎
仙臺　木村文助

山形　八文字屋太右衛門
米澤　素月晨平
長岡　覺張治平
横濱　有隣堂
長崎　虎與號
函館　魁文舍
松江　川岡清助
松本　水琴堂
久留米　菊竹書店
秋田　成見清兵衛
岡山　武内彌三郎
千葉　多田屋支店
津　關西圖書會社
金澤　宇都宮書店
和歌山　平井文助
德島　三義堂
札幌　小鹽自治館
盛岡　佐藤庄兵衛
福井　品川太右衛門
濱松　谷島屋源三郎
弘前　今泉道次郎

此外全國各地到ル處ニ賣捌店有之候間最寄ニテ御購讀希上候

若葉籠の爲に特に力を添へられたるは秀英舍掛川元明、石川金太郎兩氏の外左の諸氏なり

表紙考案畫家　下谷區谷中初音町四ノ二五　下村觀山先生

口繪揮毫畫家　下谷區根岸金杉村二一八　富岡永洗先生

表紙彫刻家　本所區小梅町二百九十三　五島德太郎君

口繪彫刻家　京橋區弓町十四番地　岡田清次郎君

表紙及口繪印刷家　京橋區越前堀一丁目四番地　吉田市松君

製本師　日本橋區本石町三丁目十六　笠原文次郎君

豫告

乙羽大橋生著並寫眞

千山萬水

日本名勝寫眞百景挿入（定價卅五錢）

著者三奇癖あり、山水癖、愛畫癖、寫眞癖是なり、生平暇あれば遊び、勝景に逢へば寫眞し、錢あれば乃畫幅を購ふ、而も遊毎に必ず其山容水態、風物土宜を記述せざる事なく、足跡既に海内に半し、紀行積て百餘篇に至り遂に本書の著となる、文妙境奇、よく讀者をして、絶叫遑あらざらしむるのみならず、夙癖を證すべき寫眞畫百數帖を附したれば、獨り臥遊の好資料のみならず、亦觀風察俗の佳材たるべく、將た著者其人の肖像畫たるべし、豈獨り文士騷客の雅伴とのみ謂はんや、其略目左の如し、

袖珍美本
全一冊近刻

希くは讀者發兌の時を俟て

評判

富士川の時雨　京の遊行記　曾我の五郎　太田の渡津　日吉の峠ケ關の夜雨　須賀の宿矢立の墨雲　寢覺の床能代の竹　樓雄の淺虫　義仲の居の跡　鳥里寒風の島　松下の城峠蘇武の澤　屋川の湯本の雨事　月光の記北浦の柳若　善光寺詣金川灣の大雷　川中の八郎潟の清波　月の松島の怪巖　嚴美の溪の櫻　平泉の廢趾象　外ヶ濱路鳥海　日光山の一夜有耶無耶の山　阿武隈川の秋吹浦の割　武川の月酒田の烹　勿來關の片の俗　波立馬の薬師最上河畔の夜泊　相馬の野尾花澤の下露　阿古屋の松　薩埵山の遺風　椿山の涙　芭蕉庵　箱根の一夜　逗子の避暑　柳の都　閣莊　滄浪山莊　聞山荘　風熱海の冬　七湯めぐり　三保の松原　千汐の秋　清水の龍華寺　月瀬の春　笠置の今　奈良の古都　夏萩寺の記　秋草と聽虫　吉野の花　多武峯　法隆寺と初瀬　田の羽八景　青梅の鴨　武藏野の夏　松山城の月　水戸の在郷　多方の梯澤の　喜多川の不動瀧目黑の　南會津の片山晒練馬めぐり　玉川河童泳記　嚴の清流　磐梯登山　雪見東海道　西京めぐり　奥の細道　飯坂の明月夢　摺上の洲の花里　昔の露　烹新米　故郷の錦繪行　春の日暮里　春宵の雪　春の火　盆路　行長柄山の夜雨　行江の島入洞記　奈良七堂伽藍　海岸の東山　赤坂御所の菊杉田梅見の來舞子の濱　嘯の離宮晴好雨記　須磨寺の櫻濱　車の御苑横須賀の夏月　上馬背

乙羽生著

累卵之東洋

全壹冊袖珍　正價金拾八錢　郵税四錢

岌々乎として將に累卵よりも危からんとする者は東洋刻下の形勢に非ずや玆に於て印度洋畔奇男兒出で隻手頽瀾を既倒に廻さんとを謀る悲壯淋漓慷慨鬱勃天破れ月駭き風闇く花泣く半宵朗誦すれば鬼神も爲に壯烈に哭せん、見よ、見よ日本の快男兒！（十二月廿日第三版出來）

發賣元　東京堂　東京表神田區神保町

二條公、黑田侯、勝伯
長岡子、福羽子、石黑男
題辭

高山文學士、幸田露伴、野口珂北、朝比奈知泉、廣津柳浪、田山花袋、桐生悠々、岸上質軒、瑜珈山人、宮川曙外、林雲慕風、井上微笑、柳齋、猪波曉花、尾崎紅葉、巖谷小波、川崎紫山、齋藤緑雨、高橋太華、中村桂汀、大鳥春軒、野口寧齋、大岡長峽、中谷水蝶、内文部學士、平二郎、竹林巖

序　跋　評

累卵の東洋一節

寺は西湖の南堤に在り丘に據り水に臨み翠色欄に滴り嵐光窓に入る徐に窓扉を排して湖面を望めば鷺鷗の翩々たる蒼旻墨無きに何の文字ぞ扁舟の搖々たる金波絲無きに何の錦繡ぞ時に日落ち煙迷ひ鐘聲水に響き欸乃漸く遠し少焉にして明月東山の上に跳り清風西湖の面を度り萬波溶々細漣珠を捲き金を鎔す耳を欹てゝ濤聲を聞けば憂々として遠く劍戟の觸るゝ如く眸を凝して波心を望めば瀲灩として近く硝花の閃くに似たり初は蜿蜒として白蛇となり奔騰して金龍と化す風歛まれば一團の滿月となり波動けば一痕の破月と變ず忽ちにして嬋娟樂を窃みて直に月に奔り倏ちにして嬴女簫を吹きて天に上らんとす凌波微步羅襪塵を生ずるの甄媛無きも江清く雲冷かにして夜長く年の如くなるを奈何せん二人眺望賞して歇まず漸くにして老僧謂ひて曰く若し此の明月をして胡塞を照らさしめば如何一夜征人悉く鄉を思はん歟智度問て曰く然らば則ち此の明月をして瑤臺を照らさしめば如何老僧答て曰く豈安んぞ傾國を顧みんやと二人相見て慘然語無し(下略)

一是一非(累卵の東洋批評)

在法科大學　中村桂軒

◉累卵之東洋を讀む

赤本黃表紙に飽き、戀愛小說俠人傳に飽き、滑稽小說に飽き果てたる日本の讀書界は、早晩政治小說の新版圖たらざる可らずとは、予が夙に觀望し豫想したる所なりき、果して多藝多才の聞高き乙羽子は、此時其機を外さず、累卵之東洋と題する一篇の政治小說を著はし、忽にして初版を賣盡して再版を重ね、新聞に雜誌に日報に、二號活字圈點付の大々的廣告を揭げ、人をして殆ど之を讀まざる者は日本人に非ざるの感を起さしむ、洛陽の紙價爲に貴く、繪艸紙屋の塵頭人山をなす底の盛事なしとするも、政治小說の作出を渴望する事大旱の雲霓啻ならざる現時の文界が、如何に之を待設けたるかは蓋想半に過ぐる者あらん、幸にして辱交ある評者は其一本の寄贈を受くる榮を荷へり、寄贈を受けたるは再版なり、先づ執て之を開く、渺たる小冊子、而も殆ど其四分の一は、曰海舟先生の題詞、曰某君の序文、曰某山人の跋等を以て埋められたり、是れ即ち小波先生が所謂交際家としての乙羽子が文學界に名譽ある知友の尠からざるを表彰し、著者の所謂絢爛の光を放つに至れる者ならんか、然れども評者は多數讀者と共に未だ多くの敬意を表する能はず、トンピの下往々襤褸の辱を見る事あればなり、而も若し果して多數讀者が之に依て眼先づ眩し渴仰禮拜措かざる事あらんか、是れ日本文學界の進步が未だ如何ばかり地平線下にあるかを示すもの、評者私かに涙なき克はざるなり。

開卷讀下忽ち見る一個の壯士あり云々といふに至りて、評者又聊か嗟噫を發するを禁ずる克はず、夫の東海散史の佳人之奇遇は如何ばかり幼稚なる我が文界の賞贊を博せしかは著者亦記する所あるべし佳人之奇遇なる聲は評者が未だ讀書界の人とならざる以前既に已に貸本屋の軒前に最囂しく聞えたるものゝ一なりき、今にして之を見る、其措辭の妙形容の美、妙は則妙、美は則美、之を措いて將た何の採る所ぞ、現時の幾分か進歩したる文學界は、復た曩日の如く、爾く小供嘲着的の文字を羅列して而も得々たるが如き文士を憤らざる底の寛宏なる胸量を存せざるを奈何せん、著者にして若し東海散史にかぶれ、佳人之奇遇を繰り返すが如き事あらば、我現時の讀書界の望に背くの罪太だ輕からざらんとす是れ評者が未だ一頁を讀了せざるに先づ想ひ浮びたる贅語なりき、不幸贅語は贅語たるに了らず、一度讀過し了りて、再び佳人之奇遇を讀むに非之るかを疑ひし評者は、著者に呈するに、さきに東海散史に捧げしものより多くの讃辭を以てする克はざるを憾みて已まず、而も諸大家諸先生が序文に跋文に鼇頭の評言に悉く蜜より甘き讃美の辭を以てせられたる所以を異みて已まず、而も或點に於て珂水先生が、若猛省于茲更賞思料再三則一編文字亦足以與佳人之奇遇新帝國策諸書雁行而已、と宣ひし評言の唯り評者の心を獲たるものあるを覺ゆ。

更に他の側面より瑕瑾を求む、題して政治小説といふもこれ政治小説に非ず、政治小説に非るのみか、政治小説らしくもあらざるを奈何せん、政治小説は地理書に非ず、印度の氣候風土を説き、安南柴昆の位置地勢を叙するが如き、贅文字は姑く許す可しとするも、強て更に小學の門に入らしめらるゝ讀者の迷惑は甚だ尠しとせず、政治小説は歴史の教科書

に非ず、支那の興亡史徒に讀者の惓怠を惹起するなからんや、本書果して桂月先生の評言の如く、嗚呼これ乙羽子が當年方寸の東洋經綸策を具躰的にあらはせるものなるか、何處に著書方寸の東洋經綸策を見る可き、強て之を索むれば末文一段の猛虎を以て暴英に擬するの一段か、果して然らば所謂東洋經綸策なるものは、虎屍に踞して刀を拭ひ驟然一笑するにあるか、之をしも東洋經綸策といふ三歳の童子と雖且首肯するに躊躇せず、高山先生は之を名けて日本主義といふ、日本主義大に可なり、乙羽子の東洋經綸策大に可なり、之れを以て政治小説累卵之東洋――四十八頁の序跋と堵の如き鼇頭評言とを以て飾られたる小波先生の所謂政治家としての乙羽子の著書の骨子と爲す、評者は多數の讀者と共に聊か失望せざるを得ず、政治家は講釋師に非ず、政治小説は歴史地理に非ず、政治家は策士たらざるべからず、滿腔縱横の立策、之を演説するも可、論説するも可、或は小説的架空の事實に擬するも可ならずとせず、後者に於て始めて政治小説を見る、累卵之東洋を説いて累卵之東洋を泰山の安きに置くの策を建てざるは、未だ目して政治小説となすを得ざる可し此點に於て評者は故末廣鐵腸先生を惜みて已まず、雪中梅といひ南洋の大波瀾といふ、寔に是れ好箇の一政策、而て大々的政治小説の半面を發揮したるものに非らずや、讀書界は未だ雪中梅の名を忘れず、猶南洋波瀾の聲を記す、佳人之奇遇の爾來を迎するが如く爾く飢渇を覺えざるなり。

口を極めて罵るは文士の禮に非ずとは評者と雖夙に之を知る、而て嘲罵を惟れ事とする評者も亦此書に於て、覺えず案を拍て快哉を絶叫せし好文字の存する事を隱蔽する克はず、かの杞人所憂行五節の如き眞に痛壯淋漓誦み去て鐵腕の鳴るを覺ゆ、而も往々詩の如

きの文景情兩ながら目睹するが如きを覺えしめ、詞華絢爛才情紙面に溢れんとするあるは、著者の最得意とする所、本書の價値彼にあらずして此にあり、殊に結撰奇想突如として筆を起し、忽ちにして支那、忽にして安南、國を憤る壯士あり、夫を悲む美人あり、古を談ずるの老僧、猛虎を劈くの勇士、彼去り此來り、變轉出沒、興涯なく、覺えず結末に至て餘音の嫋々たるが如きに至ては、著者の手腕が所謂弱冠の時より優に時流に超出せしを見る、筆路晦澁行文粗笨といふもの、もとより著者の謙辭たるに過ぎず、評者は少しく毛色の異りたる短篇小說の小乘として本書を世に紹介するを憚らず、後進菲才敢て著者及び諸先生の尊嚴を讀す事多し、妄評罪當死多謝々々。

在法科大學　桐生悠々

◉「累卵之東洋」を讀む

友人乙羽君著「累卵之東洋」出づ、惟ふに「累卵之東洋」を讀む者は皆いはむ、憾むらくば、此の如き書にして十年以前に出でざりしを、蓋し其形に於て、又其神に於て、俱に十年以前の稚氣を脫せざればなり、志かはあれど、其稚氣を脫せざるところは、やがて著者が世に對して大に誇るところに非ざるか、故いかにといふに、「累卵之東洋」は、著者が當年の意氣を公示するに、最恰好なる一方法なればなり。

「累卵之東洋」は著者が少年時代に於ける思想の所現なり、故に此書を評せむ者は、須らく少年の思想を以てせざる可らず、プラートンは一世の大哲なりき、而かも近世の哲學思想を以て渠を評せむは、時と處とを忘るゝ者に非ずして何ぞ。

「累卵之東洋」出づ、其結構や妙ならず、其文章や亦妙ならず、而かも愛すべき少年天眞の狀は躍如として見るが如し、抑少年の智識は直覺的なり、其直覺的なるが故に、其眞理たるところ又決して少なからず、「累卵之東洋」は其形質に於て、俱に十年以前の稚氣を脫せざるにも拘らず、宛として現時に於ける國家交際の狀態を直寫せり、モノポリー主義は、昔、東洋が西洋に對して採りたる政畧なりき、而して今や即ち奈何、師弟の地位は顚倒せり、而かも昨の弟は昨の師に得たるところを以て、これを昨の師たる今の弟に施しつ、モノポリー主義は、啻に英が印度に對して採るところの政畧たるのみならず、今の西洋が今の東洋に對して採るところの唯一の政畧なり、想ふて玆に至れば、「累卵之東洋」は單に所謂慷慨悲歌のみに非ざるなり。

我れ乙羽君を知ること于玆年あり、偶「累卵之東洋」を讀みて、我も亦小波子と同じく、滑稽家、小說家、美術癖ある紳士、寫眞術に巧なる才人、事務家、旅行家、交際家としての乙羽君以外に、別に敬服すべき一の乙羽君あるを知れり、そは小波子が所謂大經綸ある政治家に非らずして、當年の意氣軒昂たる乙羽君なり、乙羽君在焉。

◉「累卵之東洋」を讀む

慕風閑人

世に萬國公法なる者あり、而も是れ唯白人國交の規なるのみ、人に愛の教なる者あり、而も是れ亦唯白人相互の愛なるのみ、其自由を說き平等を唱ふる、亦皆白の自由平等たるに過ぎず、是れ既往見下を通じて更らざるの眞狀なり、東方に國し人の白ならざる者、一たび想ふて此に臻る、誰か悚然として懼れざらんや、近來隣邦の物騷なる、邦人の韓を曰ひ淸を云ひ、露を言ひ英を謂ふ、其聲益々高きを加へたるは事實なり、而も未だ片言隻句の夫の大雄氏が生地文化の母親たりし東方一故國の現狀に說及せし者あるを見ず、曾て天保時代の邦人は、其宗教の三國傳來といふの故を以て、日本國の外に唐、天竺の二國ある

を知りたりき、而も天竺を知るに於ては、自國及唐國の如くならず、輙もすれば之れを星辰と同視して恰も天上に懸れるかの如く想像する者多かりき、是れ今日に於ては、茶上の一笑柄たるに過ぎずと雖、東洋平和を大呼し大東合盟を高談する者、時に此敬す可く而も又哀む可き一故國を度外に置き、論者の意想中絶へて現はれざるが如きは何ぞや、現代開明の民も、印度に就きては、夫の天保度翁媼の想像に比して、餘り上達せざるものゝ如し、斯の如きの時に於て、吾人は此雄篇を手にすることを得たり、感喜曷ぞ弱まらん、篇末の一段、嘗て吾が法親王御遭難の箇所と覺しき邊に於て、印度日本兩國傑士の握手を看る、議する所其れ何似、恭く香華を供して、般若波羅密多、ひのもとくに兩傑士の健在にして其『グランド、スキル』をして有終の美あらしめんことを佛陀に祈り奉る、(戊戌天長節の夕)

◉「累卵之東洋」を讀んで

曉花生

膠洲灣占領、旅順港借用、事既に陳腐に屬せり、而して之に踵げるものは、皇帝蒙塵、國王毒弑、公使館護衛兵、名士走竄、軍艦派遣、示威運動、頻々又繁々、瞬一瞬時、倏忽報來するの打電は、一として寒心せざるなく、凄慘たる大勢、聞くとして毛髮竦然たらざるなし、噫、近者漫々たる東洋の風雲は、急激の事態一として雷霆霹靂、電光石火の大慘狀を潰出する伏魔殿的現象を包含するもの、豈に彼の卵子に卵子を累ぬる者に非ずして何ぞや、此時に當つて『累卵之東洋』出づ、思はざりき、著者乙羽氏が滿腹の經綸を椽大の筆に迸らしめしもの、其稿の舊なると將た新なるとは我敢て之を知らず、只所論の慷慨淋漓たる黑奴兄妹を拉し來りて密に流離轉々の狀を畫く、明確の論堂々の議、何爲れぞ夫れ一部の小部

ならんや、否優に氏が綽々の餘裕を示すものに非ずして何ぞ、眞に敬服に堪えざるなり、讀了一番、敢て記す、妄言多罪。

◉讀「累卵之東洋」

竹林巖

二三世紀以降、大塊の頑雲痴霧は亞細亞の版圖を黑く覆ひ來りて印度は亡び、埃及は死し、安南は呑まれ、緬甸は逝き、朝鮮少に餘脈を保ち、其能く獨立の躰面を東洋の天に維持しつゝあるは實に我大日本と支那との二邦あるのみならずや、此時に當り東洋の天地、亞細亞の盟主として旦に支那の眠を覺ましつ前門に虎を逐ひ、夕に朝鮮の夢を呼びつ後門に狼を防ぎ、朝鮮をして朝鮮人の朝鮮たらしめ、支那をして支那人の支那たらしめ、東洋をして東洋人種の東洋たらしめ了らんず天爵あるものは其れ何れの邦なりとするか、我大日本早に粤に見ありてや、向に友邦の革新を促さんがため或は萬朶の花を折りて八道に匂はせ、或は百錬の鐵を揮ふて四百餘州を靡かせ、以て恩威二つながら施し、且つ彼れ丹髯碧眼子の腦漿を衝きて優に亞細亞の天下を經營し來りしより、忽ち泰西億兆の髯眼を悚動せしめ、たま〳〵彼をして油斷大敵也と疾呼せしめ、條ち視る大塊の頑雲痴霧は今や一に東洋の局面に向つて更に層一層黑く蒸し起りつゝあるなるを、就中海に大なる獅子ありて、牙を研ぎつ、陸に大なる鷙ありて爪を砥ぎつ、以て東洋の累卵を攫み去らんとしつゝあるなるを、吁、我東洋は之を先天既決の命數なりとして甘んずる歟、吁、我東洋は終始主動的東洋たる能はず受動的東洋たりとして頷くある歟、我東洋の態度其れ奈何、固より風雲萬々丈の間にあつては沈重の風色なかるべからずと雖も、亦仁者として山を樂み、亦智者として水を樂む如き悠長なること能はざるなりとす、即ち勇者として仁者の山、智

者の水を呑吐するに餘あるの大抱負なかるべからざるなりとせりき、夫れ苟も之が大抱負なくして徒に沈重の風色を粧ふも、是れ猿の沐浴して冠りせると何をか異ならんや、其れ然矣、然るに我東洋の態度今日果して奈何、累卵！日又日に累卵!!!、噫。

乙羽大君玆に涙淋漓禁ずる能はざるか「東洋之累卵」の著あり、披きて之を閲せば警世鍼言、血滂沱、紙背に大君が秘藏の大日本刀ありて暗々裏に猿の冠を兩斷し落せるを見る、快絶！。絶壯!!!、明治三十一年天長節、谷中靈梅院に於て識。

◉毎日新聞評　友人乙羽子其舊著「累卵之東洋」を寄せて批を需む、披いて之を讀むに、硬的文字を以て一家の政治的抱負を吐囑したるもの、宛然彼の「東洋之佳人」の片影倘し荔枝の憂に九年母を生ず、鏞島が獅子の兒を生むを以て奇なりとせば、乙羽子が此著を出したるは奇の又た奇なりと稱すべし、何となれば滑稽家、小説家、美術家、寫眞家、旅行家なる乙羽子の手中より所謂東洋の大經綸を擲たれたるは宛かも八百屋の笊より大鯨の出たるが如く、藝妓の三味線箱よりバイプルの現れたるが如き感あればなり、漣讃美して曰く子の多面多藝なる優に三面六臂の佛以上に出つと、是れ強ち米櫃の禁厭とのみ聞くべからず

予は乙羽子と舊交あり、一燈の夜雨十年の心、相對して志しを語るの時、既に子が慷慨悲歌氣節を負ふの青年なるを知り、文を以て世に立つ方に硬文學の方面に於て成効すべきを期したりき、爾後子の徑路は側面に向つて奔り、遂に此の天分の發揮を見るに到らずして止みぬ、今此の著を讀むに及び、私に懷舊俯仰の感に堪へざると俱に、世の意外とする所は予の意外とする所に非ずして、世の意外とせざる所は即ち予の意外とせざるを得ざる所なるに驚く

淺膚の議論なりと說くは野暮なり、行文粗

雜なりと嗤ふは酷なり、不健全にてもその一氣直往、沈痛悲愴なるを取れ、空にても涙の多きを取れ、赤からずとも血の饒きを取り、脂粉の氣なきは偶々以て少年子弟を鼓舞するに足らむ、只た著者の所謂諸先生の序跋は寧ろ之を讀まざるを以て妙となす（默禪）

◉讀賣新聞評　乙羽子の著東洋の累卵といへる政治小説は、子が十年前の舊作なる由にて、今回公にするに至りしは、西力東漸の勢日一日より猛にして、東半球の輿地圖は纔に支那日本とを除くの外、悉く虎狼の爪牙に懸り、而かも支那老大國將さに西力の爲めに、蹂躪せられんとするを慨し、遂に日本の今後印度の覆轍を踏むなからんを願ふの餘り、壯年の意氣を奮起して、世の同意に訴ふるものなりとぞ。

◉都新聞評　小説家としての乙羽君は世人既に之を知る、此書は氏が筆を中央新聞に執りし當時、時事に感ずる所ありて、著はしたる政治小説なり、否な小説にあらずして一の經世策なり、此人にして此著あり、寧ろ異とすべきなり、今や東洋問題!!に急なり、此書時事に多少の補ひなしとせんや、又た文章を學ぶもの、範と爲すべきものあり。

◉毎日新聞評　乙羽子の政治小説は初めて之を見る、筆を印度の興敗に起して、東洋の危機を論ずるに、佳人之奇遇的一種慷慨淋漓の妙味を覺之しむ、昨今東方風雲慘憺の秋、志士再讀の價値あるべし。

◉中央新聞評　此の奇題を設けたる袖珍の一小美冊は乙羽子が、我が中央新聞に在りし頃作れる政治小説なり、今始めて上梓して世に出せり、佳人之奇遇と比して、文章の巧麗遠く及ばざるも、其の趣向は寧ろ其の上に在るが如し、

◉萬朝報評　本書の例言に曰く「本書

予が弱冠の作、慷慨悲歌不平鬱勃の氣紙幅に溢る、爾來之を深く匣底に秘したるもの、一に將來の推移を恐るればなり」と、今や博文館諸氏の序跋を附記して出版せらる、往年佳人之奇遇を愛讀せし少年は、また本書の愛讀者となるべし。（越後生）

◉國民新聞評　乙羽氏舊作の政治小說也、印度の一青年が國運興復を謀りて、辛酸流離する者を寫す、佳人之奇遇を學で、未だ至らざるもの。

◉時事新報評　「累卵之東洋」は乙羽子の舊稿なるべし、佳人之奇遇に酷似したる漢文調もて、一篇のおもしろき小話をものしぬ、表紙の繪は不折、序跋の數は本文の短きに反して最も多し、よろづ體裁よき小冊子なりけり。

◉日本評　署して政治小說と云ふ、乙羽子自ら言ふ、本書予が弱冠の作慷慨悲歌不平鬱勃の氣紙幅に溢ると、蓋し眞然なり、其結構一奇士を描き出して、印度の回復を策し、以て西力東壓の根柢を覆へさんとするに在り、諸家叙跋嘖々として稱賛措かず、袖珍の小卷、不折子の意匠に出でたる表裝、頗る愛出たし。

◉東京朝日新聞評　「累卵之東洋」は一冊の政治小說にして乙羽氏の著なり、漣山人の序に筆を小說に假りて、大に東洋の經綸を論ず、其時弊を慨し、人心を鼓舞するもの、堂々政治家の風ありて存せり、嗚呼何等の快文字と、誰やらは喫驚せり。

◉報知新聞評　乙羽子の政治小說也、海舟伯の題字其他高山巖谷等諸子の序文と太華桂月等諸子の跋文とを附す、佳人之奇遇以後始めて此種の小說を見る、片々たる小冊子と雖も、讀了して中々に面白きを覺えぬ。

政治小說　抱月

乙羽君その著「累卵之東洋」を寄せて評を求めらる、作者が弱冠の頃血氣にまかせ筆を呵したる政治小說なりといふ、題を英領印度の志士智度といふに假りて、歐人の暴橫、印度支那東洋諸邦の危機を說く、其今日に刊行せらるゝ良に偶爾ならず。

文體結構といひ、中に歌行を挿みて、全篇の趣味すべて佳人之奇遇にかたどれるまで、吾人が此書によりて想ひ起すは、正しく十年前の我小說壇なり、讀詩社會の好尚の度なり、十年の星霜、歷史の上には眞に半頁にだも値せずして、獨り移れるは小說壇の氣運なる哉、彼の土は言はず、我が文壇に元祿の風一たび吹き靡きてより、戀愛小說、暗黑小說、狹斜小說、宜しく並在すべきもこの時を追ひて相起るや、人は應接に遑なからんとして、一是一非、論壇は多事に忙殺せられんとしぬ、而て尋いで出でしものは、最近政治小說の呼び聲なり、嗚呼政治小說か、政治小說か、十年の昔、乙羽君が「累卵之東洋」を草せし頃は、實に政治小說の時代なりしなり。遮莫「累卵之東洋」を讀みて、私に疑ふ、今日の所謂政治小說とは如何なるものか、人は歷史の反覆を說けど、人事豈反覆せんや、十年前の政治小說は斷て今日の政治小說にあらず、然らば世の政治小說といふもの、如何の意義ぞ、新小說に宙外君の再び之を論ずたるものありと聞けば、吾人は其の意見に接したる後、大方の說を聞きて更に論ずることあらん。

終に臨み、吾人は少なくとも以上の意によりて「累卵之東洋」の今日に出でたるを喜ぶ、殊に作家たる乙羽君の手より出でたるを喜ぶ、其の他は必ずしも言ふを須ひざるべし、さるにても面白きは十數年前の小說的趣味なり、顧みて打ち笑むを禁ぜざるもの、豈啻に吾人のみならんや。（讀賣新聞）

眼前口頭（一節）　綠雨

「累卵之東洋」、是れ何等の惡文字ぞ。他を愚にするに先ちて、己を愚にする者とも謂はんか、われは久しき友なる著者のために、之を公刊したるを惜む、殊に太甚しく惜む、桂月氏の一文のみ體を得たるを除きて、諸家の序跋亦拙し。（萬朝報）

文界雜報（一節）　文庫

「累卵之東洋」これは乙羽子の著である、時事に慨する所があつて、十餘年前の舊著を今出版するといふのであるさうだが、眞面目でそんなことを云ふ作者の氣が知れぬといふものもある、これと何の關係も無いのであるが、我等は最近の「新小說」にある內田魯庵の「うきまくら」を見て、兼て望んで居た政治小說は、ちよいと斯ういふかたちでやつて貰ひたいと思つた。

柳短微煙錄（一節）

反省雜誌政治小說の呼聲に力を得たる者か、將た又東亞の事日に非にして激越自ら禁ずるに堪へざるに出でたる者か、今回乙羽氏は氏が弱冠の舊稿「東洋之累卵」を匣底より公衆の前に曝け出した、博文館編輯局の諸先生惣幕出揃ひの序跋いと物々しく、おまけに客員然たる桂月氏の跋も愛嬌だ、本書の價値は寧ろ、乙羽氏が文學的才能の發達を稽査せんには必要の者であらう、又其裏面には「佳人之奇遇」といふ者が、いかばかり、我讀詩社會を影響したかを考證せん時の材料にもならう。

時文（一節）　大町文學士

亡國印度の慷慨家、英人の獄に陷る、其妹之を救ひ、身反て獄に陷る、兄、國を脫して波斯に行く、志を得ず、支那にゆく又志を得ず、遂に安南にゆさて、日本の志士と山中に相會す、是れ乙羽か「累卵之東洋」の脚色也、少年の時の作なれば、嚴密の批評をなさむは野暮なるべし、思ふにこれ發端にして、一篇の脚色、決して茲に完成せるものに非ず、

佳人之奇遇にかぶれたるは一目明瞭なれども、亦以て乙羽が當年の意氣込を伺ふべし、文はなほ未熟なれども、詞藻豐富、才華爛發、流麗華贍、人をして覺えず卒讀せしむ、之を少時の文とすれば、われは其文才に驚かざるを得ず、今の小說に普通なる例の戀愛なく、代ふるに兄妹の友愛の掬すべきを以てし、慷慨の氣、一篇に溢る、以て少年の氣を鼓舞するに足る、少年の讀物として珍重すべき也。

先づ印度の滅亡、次に安南、次に大韓國、次に支那の分裂、而して其次に來るべきものは何ぞや、內、政權を爭ふに急にして、眼孔未だ國外に達せず、或は達するも、大韓國、もしくは支那に止まりて、安南にだに達せず、況んや印度をや、聖跡をして長く白皙人種の手に落ちしむ、十年後の今日、なほ人心を外に轉ぜしむるに於て、この書の影響する所の少なからざるを信ず。

卷中の詩は、感服せざれども、卷首に載せたる詩の中にて、

峯巒中斷大江流。紅樹青山滿目秋。三十六灣行不盡。一帆夜泊荻花洲。

の一絕の如きは優に詩人の域に入れり、但し里程を六灣と改めぬ、灣とは、海でも川でも屈曲せる處を云ふ也、知らず、乙羽首肯するや否や。（文藝倶樂部）

政治小說　竹井文學士

近時政界の波瀾震蕩につれ、政治小說を誘奬せむとするもの多けれど、作家は絕ねて斯界に試みむと欲するものなきは何ぞや。」頃來乙羽子政治小說『累卵之東洋』を世に公にしき、其例言によれば、本書は子が弱冠の作にして慷慨悲歌不平鬱勃の氣覺にず紙幅に溢れしもの、今や時運の趨勢に感發して之れを上木せしものなりと云ふ、印度の志士智度と云ふもの、英國の壓制を憤り、窃に獨立の義旗を擧げむとせしに、時日に非に

して志事を達はず、危機一髪將に一敗地に塗れむとせしが、纔に難を遁れて支那安南を經歷し、遂に日本の壯士日野某に邂逅するに於て談畢る、滿紙悉く憤慨的文字を以て充塡せられしもの、多少の興味はあれど、要するに結構粗笨にして首尾整はず、固より小說として見るの價値少なき也、遮莫、著者は云ふ、此議を發する所以のもの文を飾り辭を弄ぶの徒事にあらず、亦大に感ずる所あるを以て也と、是れに由りて之れを觀れば、此作題して政治小說と謂ふも其實小說にあらずして一種の經綸論策たり、經綸の論策を捉らへ小說の規矩を以て擬せむとす、作者を難ずるには當らず、寧ろ評家の野暮とも見るべき也。（中學世界）

○

乙羽子の政治小說「累卵之東洋」は、東京堂より發兌せらる、是れ子が弱冠の作なりと雖ども、千秋の意氣、流麗の辭藻、共に見るべし、筆を亡國の事に假りて東洋連衡の策を論ずる所、轉た今日の時事に適切なるものあり、唯一部小說として是を視れば、情の到らざるもの、事の盡されざるものあるを惜む、卷中錄するの『杞人憂行』の一詩、以て是書の性質を視るべし。

杞人所憂在東洋、隻手固期掃天荒、底事兄弟鬩蕭牆、自壞社稷毀廟廊『歐人跋扈日促々、暗逞權謀極殘毒、印度蒼生泣虐政、埃及帝王空放逐』只剩日本與淸洲、敢將外交付悠々、都門士女耽歌舞、日夕宴安不知愁』自古奸雄害世道、龍驤虎視貪不飽、妖霧冥々太平海、隣島沒去又隣島『月照沙漠影如烟、風鳴椰樹響似弦、此夜無限孤客恨、決眦按劍望秋天』（太陽）

○　有誰生

政治小說々々々々と猫も杓子も雷同して鼓吹せる文壇に夫れならば一つと昔ながらの

勇氣を出して『累卵之東洋』と題打ちし小冊子を印刷せしめし乙羽子の健氣こそ有難けれ、之を喜んで卷首に叙したる高山林二郎氏が得たり賢こしとお得意の日本主義をふりまはしたるも難有、嗚呼敬すべき哉敬服したる小波子が大經綸ある政治家と著者を紹介したも難有く、落想超凡神變鬼化、一種慨世の意を號けぶ珂水子の跋、筆力雄渾紙有風雲氣と記せし春汀氏の跋、奇氣橫秋：：：作者抱負之所存可以視、：：：亦見不邉字烹句煉之末之問也とあはてたる質軒子の跋、這般慷慨悲歌の文字あらむとはとびつくり仰天せる桂月子の跋皆是難有淚の溢ぼるゝ底の妙文字ならざるはなし、偖て乃處で其本文を讀み行けば明月悲みて埃及頽れ紅花凋みて土耳古衰ふの如き明句の全篇所々に點出せるなど何れ難有からぬ所はなき近頃の好著なるべし、蓋し難有き政界の風雲に難有き政事小說を見る我等もやがて彌陀の彼岸に近くことなるべし穴賢々々。（早稲田學報）

「累卵之東洋」を評す

三宅青軒

本書は乙羽氏の所著にして、其少年の鋭氣を驅り、即ち情熱し腕自ら顫ふの時になりしもの、概評は前きに揭げたれば、今其書に就て細評を試みん、全體の仕組は、英國の爲めに殆んど亡滅せんとする印度の悲運を慨き、こゝに智度の想ひを以て、劈頭先づ『印度可建英可斃二億蒼生豈無靈』の句を以て全局の話說を提げ、而して滔々數千言、智度が心胸淋漓たる慷慨を滿目蕭條たる印度式微の風光に反映せしめ、乙羽氏が最も長所なる繪畫的叙景の文を舞して、時に聯邦の興亡を論ず、時に美術の衰殘を悼み、時に佛教の頽廢を惜み、一轉英國の暴橫を憂憤するのところ、夕陽波涙に落るの外界と、双々景情を叙し來りて、坐ろに汨羅に行吟する

楚人を想はしむ、此間の文字實に得易からさるの才華を咲かして、確かに感興を起さしむるの價あり、而して智度の妹羅夢なる一少女を點出して千古の翠松紅蘿を纏はしむるの結構を成したるは好けれど、羅夢の描寫極めて疎にして、兄妹相別るゝ時の景情亦足らず、讀者をして喰足らぬ感を抱かしむるは遺憾なり、智度が羅夢の助けに依つて、逃げて支那に入るの後は、作者愈々其擅長の叙景を盡くして、眞に支那風光の畫幅を成す、特に其吟ずる所の古詩の如き、悲壯の音、激越の調、人をして坐ろに傷心に堪えざらしむものあり、『月照沙漠影如煙。風鳴椰樹響似弦。此夜無限孤客恨。決眦按劍望秋天』の句の如き、實に金聲をなすものと云ふべし、われは乙羽氏の文を知る、其長所は、其天才の在るに任せて、力を外界の叙景に擅まゝにし、しかも一氣呵成殆ど推敲を費さゝるに在り、其短所は、殆ど人心の內面を描き出さず、好し描き出すも甚だ粗雜なるに在り、是故に本書亦此長所をあらはすと同時に其短所をあらはす本書の價値は即ち此に在るなり、作者幸ひに余の妄言を容れて、こゝに自家の長短を顧み、而して其長所なる繪畫的叙景に全力を竭し、加ふるに字句の鍛煉に其思考を費さば、蓋し當今の文詩中作者の右に出るものなかちん、予は作者の天才が、この方面に向つて英發せらるべきことを信ず、是れ確に信ずる所なり、故に盡言此處に及ぶ。（文藝倶樂部）

「累卵之東洋」に就いて

越後のコメッキ生

近來の文壇が頓と振はざる事は御同樣殘念至極に存ト居り候折から、昨日大々的珍書を求め得候て、種々の感慨涌出致し候故、大要を書中にて申上候、其珍書は博文館の若旦那又太郎、號は乙羽とやら申す仁の著述にして、政治小說「累卵之東洋」と申すものに

御座候、紙數は僅か百卅頁足らずの袖珍小冊子に候へ共、躰裁と云ひ印刷と云ひ、流石に點の打ち所なき、實に可愛らしき小本に候、乙羽と云ふ名は太陽の寫眞版の側にて善く見る所、又た時折は紀行文或は小說などにても覺え有之、餘り上手な作家とも存ト居らず候へ共、兎に角マメなる可愛き作家と記臆致し居候處、政治小說、たかも東洋問題に大經綸あるとの事を、只今始めて承知仕り候て、たゞ驚くの外無之候、此書を見て最も感心致候は、前後に並べある序や跋の多き事に御座候、其筆者は文學士高山林次郎先生を始め巖谷の小波、大町の桂月、鳥谷部の春汀、紫山質軒等、出でゝは文壇の大將たり、入つては博文館の忠臣たる歷々の面々玉揃ひ候、これらをや威風堂々とも申し奉るべき御有樣と感涙を催し候、序文の中にも高山先生が「事を亡國に假りて其壯心を舒べたるもの蓋し予と國家の憂を共にする者なり」など申され、小波先生が「堂堂政治家の風あつて存せり、嗚呼何等の快文字……圖らざりき此大經綸ある政治家としての乙羽子を今日に至つて初めて知らんとは……子の多藝多能なる優に佛以上に出ずるものあらずや」など書きつけあるを見候てはひたすら恐れ入り申候、お世辭も其度を過せば滑稽となり、諷刺と相成るとか聞き及び居候、若旦那が俄かに政治家、佛以上に昇進仕候事、文明の餘澤と難有涙にくれ申候、小生の友人は此書を指して、博文館の御婿樣の威光は大したものだ、前後に大家先生を召し連れ一道化芝居をして居るなどゝ申され候へ共、これは禮を知らざる野人の暴言と存ト候、何は兎もあれ、東海散士囊を食への御手際、金玉の文字、堂々の論議、小波先生にあらずとも、敬服の至りに御座候、と小生も賛め申候間、博文館內閣の出來候曉は相當の御褒美御周旋の程貴下ま

で豫め願置候、筆末ながらヘスチンゲをマーケットドレートンの破落戸と記載有之候へ共、これはクライヴの誤に無之やと愚考仕候、右は内々御注意までに申上候こと故乙羽さんの機嫌を損ぜぬ樣貴下より御序の節乙羽さんへ御つたへ被下度候、記者足下。

（慶應義塾學報）

◉人民評　東海散士の佳人之奇遇に似たる政治小說(?)也、全躰漢文口調にて、振り假名なければ、通常讀書家に讀めべきものにあらず、讀める人に取りては難有かるべき書にあらず。

◉日本新聞評　乙羽ぬしより送りこさる、少しばかり批評らしきものをせんと思ひたれど、これは君が少年の作とやらにて、君自身にも小供らしきを云々し玉へる程なればと、こゝに筆を止めぬ、佳人之奇遇的の文なれど、やはり少年時の作なり、同舘同人の序跋なか〳〵にぎ〳〵しきとなり、躰裁は小まゝやくれてをかし。

◉大阪毎日新聞評　乙羽子が弱冠發憤する所あり、一氣呵成したる政治小說にして、印度亡國の一壯士を藉り、巧に滿腔の不平を發露したるもの、行文雅麗間々流暢を欲くの憾あるは是非もなし、殊に中村不折子の意匠に成れる表裝は愛すべし。

◉日本人評　標題の如きものあり、之は例の博文舘の婿殿乙羽先生の大著也、本書予が弱冠の作、慷慨悲歌、不平爵勃の氣、紙幅に溢ると曰ふは、御本人自からの御吹聽、通俗之を自讃自賛流とは申す也、先生の友人巖谷某の賛序には、此大經綸ある政治家としての乙羽子を、今日に至つて初めて知らんとは、嗚呼、さへッ言葉とは申す也、累卵追從的御世辭、はは則ち當世流行の政治小說とやらの標題也、化けて出たらば可

笑しかるべしとは綠雨が序文中の文句也、賞めたのやら、嘲つたのやら、何には兎もあれ、毀譽褒貶種々の方面ある中に此の書は嘲笑せらるべく如くに文林を賑はしたる珍本として人間の手に置かれたりとゝや。

◉帝國文學評　印度の志士智度とやらが、難を逃れ支那安南を經めぐり、一老僧に遇ひ、また日本の人日野基邦に邂逅すといふ話、著者弱冠の作なるよし、なるほど中學生徒の口吻らしきも見えたり、序跋批評ともに當世の名士とやらいはるゝ御方の諂諛的文句を以て充たされ、中には見すぼらしき漢文のもあり、全躰に於て佳人之奇遇に似て及ばざる者何の奇もなく、何の妙もなし。

◉女學雜誌評　是れ乙羽子昔し硯友社にありける比の舊著なるが、圖らざりき此の慷慨激越の經世談を聞かんとは、天竺の志士「智度」砂上に書して曰く、印度可レ建英可レ斃、二億蒼生豈無レ靈と、筆を此の感慨に起して、破牢國を逃れ、遂に日本壯士と會見するに至り、忽然筆を收む、餘韻長し、正に是れ『佳人之奇遇』に彷彿たるもの、頗ぶる乙羽子の才筆を發揮す。

◉反省雜誌評　讀で奇もなく妙もなく、想の取るべきもなく、文の見るべきもなし、これを知りながら、人の勸めにまかせて梓に上ぼされし政治小說、これをしも聞くべくんは、小學生徒の政論亦聞くべし、我はむしろ著者の板に上ぼされし勇氣を愛す、麗はしき小冊子。

◉早稻田學報評　袖珍の好小冊子、元是れ著者が其年少氣鋭の際になりし政治小說なりと云ふ、繙いて一讀すれば嘗つて乙羽氏が「佳人之奇遇」に耽けりし頃湧溢滾々たりし其滿腹の經綸策を印度の一偉男兒智度なるものに托せしものなり、文章剛健よく其趣向と比例す、乃ち秋夜の伴とすべ

し。

◉東京經濟雜誌評　著者自身「本書余が弱冠の作、慷慨悲歌不平欝勃の氣紙上に溢る」と、吹聽せる大層物と知るべし、百二十頁の袖珍本に四十頁の序跋エライものかな。

◉大日本評　乙羽庵主人の著が久く吾人の眼に觸れざりしが、今茲に久しぶりにて其政治小說に接するを得たり、題して「累卵之東洋」と云ふ、著者今日の危運に對する抱負以て想ひ見るべし、筆調輕快通讀の際、壯氣身に滿ち來るを覺ふ。

◉文藝倶樂部評　累卵之東洋は、乙羽氏未だ世に出でず、偃蹇傲兀情熘中に鬱して外に發洩する能はざるの中に成りしもの、故に其想悲壯沈痛、其文軒昂激越、實に乙羽氏の文中未だ曾つて見ざるところのもの、文字稍洗煉を缺くの遺憾はあれど、如今軟弱小說の外に於て別に一旗幟を樹つ、細詳は他日に讓るとして、こゝに其好著たることを推奬す。

◉少年世界評　「累卵之東洋」とは乙羽氏の好著たり、多情多熱の一箇印度俠黑兒を拉し來つて、隻手英國の苛刻を擺脫せんとを企圖す、血あり涙あり、滔々たる軟弱文字中、優に一異彩を放つ、人は久しく不健全なる小說に倦きたりし折柄、ゆくりなくも今悲壯の文字に接す、吾人は双手を擧げて斯書を歡迎するものなり。

◉中學世界評　こは乙羽子の新著に係り、印度の一偉男兒が本國の現狀を慨し回天の大志を抱きて諸國に流寓したる顚末を綴りたる一篇の政治小說なり、落想行文共に『佳人之奇遇』に髣髴し、其神玉し、情激するや、讀者をして拍案快を呼ばしむ、夢に仙闕に遊びて美術を論ずる處、舟を西湖に泛べて古今を觀ずる處、蓋し全篇中の精彩なるべし、杞憂行の詩五篇また一誦の價値あり、年少氣鋭の諸君、請ふ一讀あれ、

◉山陽新報評　乙羽子の著「累卵之東洋」といへる政治小說は、子が十年前中央紙へ掲載せし舊作なるが、今回東京堂より公にしたり、之は西力東漸の勢、日一日より猛にして、東半球の輿地圖は纔かに支那日本を除くの外、悉く虎狼の爪牙に懸り、支那老大國將さに西力の爲めに蹂躪せられんとするを慨し、遂に日本の今後印度の覆轍を踏むなからんを願ふの餘り、壯年の意氣を奮起して、世の同意に訴ふるものなりとぞ。

◉中京新報評　「累卵之東洋」は乙羽子の舊著、政治小說と標榜したる小册子にて英國の暴政、印度の亡國、支那の腐敗等を描し二三の好漢出でゝ東洋建國の大策を劃せんとすと云ふ筋なり「佳人之奇遇」に酷似せる文調にて行文尙粗笨なるを免がれざれども雅馴の箇所なきにもあらず。

◉扶桑新聞評　著者乙羽子が東洋諸邦の衰頹を慷慨し假りに印度の壯漢智度なる者を主人として自家の憤懣を發漏したる好政治小說。

◉河北新聞評　乙羽子少時東洋の時事に慨して、一氣政治小說を呵成したるもの、今上梓して「累卵之東洋」と題す、時局に鑑みるもの亦以て愛誦すべし、文字亦雅健、趣工特に斬新たり。

◉新北陸評　題して政治小說累卵之東洋」といふ、何ぞいかめしきや一個有爲の印度人を促らへて亡國の形勢、征服者の虐政を畫き來る、其趣向稍々東海散士の佳人之奇遇に似たり、而かも彼は浩瀚の大部冊、波瀾あり抑揚あり、文章高潔にして措辭又苟くもせず、是れは即ち僅々百二三十頁に充たざる短篇にして首尾殆んど完からず、而かも文辭巧を窮めむと欲して却て拙、間々誦すべきの美辭なきにあらずと雖ども全篇

を通ずては斯筆力の一致を見るなし、趣向又平凡、乙羽子の作として下劣なるもの、蓋し柄にもなき仕事に手を着けたるの過ちなり、若し年少時代の舊作にして當今の筆にあらずといはゞ其れ迄なり、併し學生作文の模範位には適當ならむ。

◉北海道每日新聞評　政治小說の題名を冠して印度の時事を論評す、方今東洋問題の研究一日を忽にすべからず、經綸の策一刻を爭ふの機に在り、之れが畫策を樹てん事は、惟り吾人の翹望のみに非す、東洋の名を表する本著は果して能くこの希望を滿たすべきか、文章粗笨未だ精刻ならず、著者の政見那邊に在るを知り難し、遺憾百二十餘頁の袖本にして、躰裁甚だ佳なり。

◉北門新報評　「累卵之東洋」は、乙羽氏著政治小說、佳人之奇遇的行文を以て、篇內人物の口を籍り、東洋經綸の策、不平鬱勃の氣を吐臚せるもの。

◉越佐新聞評　政治小說「累卵之東洋」は、乙羽の著、此れ著者弱冠の作、爾來深く匣底に秘せしもの、今や西力東漸の勢日一日に迫り、老大支那國も亦將に蹂躪されんとす、唇顚えて舌寒し、夫れ一政治小說と雖燈下繙讀せば豈に無慮の感なからんや、勝伯の題字其他序跋等多し、袖にするを得るの小冊子なり。

◉平等新聞評　「累卵之東洋」は乙羽氏の著述にかゝり、百六十頁の小形冊子筆を小說に假りて東洋の危勢を說き、政治上の感慨を描出する者、其批論は諸家の序跋に就て見るべし、蓋し少年時の作と云ふ。

◉山陰新聞評　「累卵之東洋」は政治小說にして、乙羽庵主人の近著に係る、表紙に鷲と獅子、蛇と鰐魚とありて、極東の淸國圖上に徘徊するさまを見ば、其叙する所推して知るべし、唯文字稚氣を帶びて、着想の佳人之奇遇に肖たるは首肯し難き點なしとせず、時節柄枕頭の伽とせば可ならむ。